

牧畜は共同で行はれ、畜群の番をマルク組合員がてなでにすることは禁ぜられてゐた。村のすべての家畜はその種類に應じて種々の共有群に分たれ、その各々に一人の村屬牧人と一頭の先導獸とが附せられ、なほ畜群は鈴をつけるといふことになつてゐた。マルク地域全體に互つての漁獵權も、矢張りすべてのマルク組合員に共同であつた。仲間知らせず自分の持地に係蹄をかけたなり、穴を掘つたりすることも許されなかつた。礦物や何かも、鋤先きよりも深く地中にある場合は、マルクの全地域に互つて組合に屬するものであつて、個々の發見者のものではなかつた。各マルクには必要な手業者が定住してゐなければならなかつた。各農家は日常生活の使用品の大部分を自分で拵へ、めいめい自家でパンを焼いたり、肉を炙つたり、紡いだり、織つたりしてゐたのではあつたが、しかもなほすでに早くから二三の手業者が専門化されてゐた。殊に農具を拵へる手業者はそうであつた。たとへば低地サクソニーのウエルベにある山林マルク組合では、組合員は「林地に各手業の人間を二人づゝ有してゐて、木材を加工させてゐる。」森林を保護して、組合員にとつてのみ必要なものを供するため、手業者に對して、如何なる種類のものをどれだけ使用してよいか規定されてゐた。手業者はマルク組合から生活に必要なものを受取り、一般としては他の大勢の農民と全然同じ位置にあつたが、但しマルクの中で完全な權利を認められてゐなかつた——その理由の一部は、手業者が渡り者で、土着の人間でなかつたためであり、一部はこれも結局は同じことに歸するが、彼れ等が主として農業にいそしまなかつたためであつて、農業は當時經濟生活の中心になつてゐて、公生活、マルク組合員の權利義務は、それを中心として

ゐたからである*。そういふわけでもマルク組合の中に入り込むことができなかつた。外部のもの定住させるためには、全組合員の一人残らずの承認を得なければならなかつた。そして各人は自分の割地を、同じマルク組合員にのみ譲ることが許され、外部のものに譲ることは許されなかつた。そして組合員にそうするにもマルクの法廷で許された場合だけであつた。

マルク組合の先頭に「ドルフグラーフ」または「シュルトハイス」(何れも村の司き)が位してゐた。これは所によつては「マルクマイステル」(マルクの長)または「セントネル」(百人長)とも呼ばれ、上司としてマルク組合員から選舉されたものである。この選舉は選舉人にとつて單に名譽であるばかりでなく、義務でもあつて、選舉を拒んだものは罰せられた。尤も時が經つにつれて、マルク首長たる職は一定家族の世襲となつた。そしてこれがもう一歩進めば、今度はこの職が——その權力と所得とを目宛てに——買ふことができるようになり、褒賞に與へることができようになる。一般に公選の純民主的職位から、その團體に對する支配の道具と化するに至るのである。それはとにかく、マルク組合の全盛時代には、マルク首長はマルク全體の意志の執

* これと全然同じ地位を、手業者はホーマー時代のギリシヤの村で占めてゐた。——「すべてこれらの人々(金屬工、大工、樂人、醫師)は「デミウルゴイ」(デモス——民衆のためのもの)である。言ひかべれば、彼れ等は自分自身のためではなく、自治體員のために働いてゐる。彼れ等は人身的に自由ではあるが、完全に自由だとは見做されず、本來の自治體員たる小農の下位に立つてゐる。往々彼れ等は定住せず諸所方々を渡り歩き、また有名である場合には遠方から呼び寄せられる。」(マイヤー著『古代の經濟的發展』第一七頁。)

行者に外ならなかつた。すべての共同の事柄は組合員全體の會議で規定され、またそこで争ひも裁決され、ば罰も課せられた。農業上の仕事、道路および建築、農圃警察、村落警察等の全規定が總會の多數決で決議され、なほまたマルク經濟を記帳する定めであつた『マルク員出納簿』を檢査するのも總會の役目であつた。マルク内の仲裁と裁判とはマルク首長の議長の下に、判決發見者として立會ひの組合員（裁判立會ひ）によつて、口頭で且つ公衆の前で行はれる。組合員のみが法廷に臨むことを許され、外部の者は入ることを禁ぜられてゐた。組合員はお互ひのために證人となり宣誓後見人となる義務があり、同じくまた一般に火災の場合や敵の襲撃の場合、その他すべて危急の場合には、忠實に且つ親しく互ひに扶け合ふ義務がある。戰爭の場合は組合員は各々部隊を形づくつて、各部隊力を協せて戦つた。何人と雖も自分の仲間を敵の槍先に委ねてはならぬ。マルクに犯罪や災害が起つた場合や、組合員の一人が外部に對して犯罪を行つた場合は、マルク全體が連帶の責任を負ふ。組合員は旅人を宿泊させ、困つてゐる人間を保護する義務がある。各マルクは本來一個の宗教共同社會を成してゐて、キリスト教の移入——これはサクソニー人の場合の如く、ゲルマン民族の一部の間に極く後になつて、即ち九世紀になつて初めて起つたものである——以來は一個の教會團體を成してゐた。最後にマルクは常則として村のすべての少年のため一人の教師をかゝへてゐた。

この古代ゲルマンのマルクの經濟制度ほど、單純で同時に調和的なものを思ひ浮べることはできぬ。この場合における社會生活の全機構は掌を指す如く明瞭である。こゝでは一個の嚴密な計

劃、一個な強固な組織が、各個人の一舉一動を左右し、各個人を一小部分として全體に適合させてゐる。日常生活の直接欲望と、各人に對するこの欲望の平等なる充足、これが全組織の出發點であり、終點である。萬人が萬人のために働き、萬事を共同で決定する。だが、こゝいふ組織と、こゝいふ個人に對する全一體の權力とは、何處から生じ何に基いてゐるのか？ この根據は土地に對する共產主義、言ひかへれば、勞働する人間による最重要生産手段の共有に外ならぬ。しかしながら農業共產主義經濟組織の典型的特徴が最もよく正面に現はれるのは、この經濟組織を實際的土臺の上で比較研究して、これを生産の世界的形態として、その歴史的多様性と弾力性とおいて見る場合である。

次に南アメリカにおける古代インカ帝國に移らう。この帝國の地域は現在のペルー、ボリビア、チリーの三共和國、即ち現在千二百萬の居住人口を伴へる三、三六四、六〇〇平方キロメートルの地域を包含するものであつて、ピザロが行つたスペイン人侵略の時代には、なほその幾世紀以前におけると同じ具合に經濟が營まれてゐた。まづ第一に吾々はこゝに古代ゲルマン民族の場合と全然同一の制度を見出す。各氏族團體は同時に武裝し得る男子の百人組であつて、一定の地域を占めてをり、その地域はマルク（共有地）としてこれに屬し、且つ不思議なことには「マルカ」といふ名に至るまでゲルマン民族の場合と似てゐる。マルク地域から耕地を切り離し、地割を行つて、毎年播種の前に各家族の間に籤分けされる。割地の大きさは家族の大きさに應じ、従つて各家族の欲望に應じて定められる。村の首長——その職はインカ帝國が形成された時代、即

ち十世紀十一世紀頃にはすでに選舉から世襲に移つてゐたのだが、これは一番大きな割地を受け、北ペルーでは各家族が自分の割地を別々に耕作するのでなく、一人の指導者の指揮の下に十人組を作つて耕作してゐた——これもまた古代ゲルマン民族の場合と同じ事實を思はせる制度である。十人組は順々に全員の割地を耕やし、インカ族のため戦争に従事したり、徭役に従事したりして不在の者の分もそうしてやる。各家族は自分の割地に出來た成果を受取る。マルクの中に住み氏族に屬してゐた人間だけが、割地を得る権利があつた。とはいへ各人は矢張り自分の割地を自分で耕作する義務があり、幾年もの間（メキシコでは三年間）それを耕作しないまゝで置けば、割地に對する権利を失ふ。割地は賣つたり贈與したりすることは許されなかつた。自分のマルクを去つて外のマルクに移住することは嚴禁されてゐたのであつて、これは村落氏族の血縁の力強さと一致するものであつた。週期的にしか雨が降らない沿岸地方における農耕は、古くから運河を以てする人工的灌漑を必要としてゐた。そしてこの運河はマルク全體の共同勞働によつて築かれたものであつた。各自村民の間や村民内部における水の使用と分配とに關しては、嚴格な規定が設けられてゐた。

また各村落は「貧者の田地」を有してゐて、マルクの全員が總がかりでこれを耕作し、その收穫を村の首長が、老衰者や、寡婦や、その他困つてゐる者の間に分配した。耕地以外の残りの地域はすべて「マルカバハ」——共同地である。農耕が物にならぬ山岳地方では、駱馬を殆んば唯一の對象とせる手頃な牧畜が住民の生存の基礎であつて、住民は時々その主要生産物——羊毛——

を低地に持つて行つて、農耕者の王蜀黍、胡椒、大豆と交換してゐた。この山岳地方には、インカ人侵略の時代にすでに畜群の私有と著しい財産の差別とが存してゐた。普通のマルク組合員はまづ三—一〇頭の駱馬を所有し、一人の酋長は五〇—一〇〇頭ぐらい持つてゐたらしい。それにも拘はらず、土地や山林、草地は矢張りこゝでも共有物であり、なほ私有畜群の外に、分配するを許さざる共有畜群があつた。特別の手業者はなく、各家族は必要なものをすべて自家で拵へてゐたが、しかもなほ村民の中には、織工、陶工、或は金屬工として特に何等かの手業に秀でゑる者があつた。各村落の首端には最初は選舉された、終には世襲の首長が位して、農耕の監督を行つてゐたが、重大な事柄は丁年者相談會が會議を開いて處理し、この會議は貝喇叭で以て召集された。

右の限り古代ペルーのマルク組合は、すべての重大な點においてゲルマン民族のマルク組合の忠實なる模型を示してゐる。しかしながらこの古代ペルーのマルク組合は、吾々の知つてゐるゲルマン民族の原型と、どの點が合致してゐるかといふことよりも、むしろどの點が乖離してゐるかといふことを調べた方が、この社會的體制の本質に通曉する早道である。古代インカ帝國の特徴は、外人の支配が布かれてゐた被征服國であつたといふ點である。この國に入り込んだ征服者インカ人は、なるほど同じインディアン種族に屬してはゐたが、平和な土着のヴェキユア種族を征服したのであつて、この征服が易々とは行はれたのは、後者が村落の中に世界から切斷されて生活してゐたためであつた。即ちこの種族の各マルクは、大きな地域に互つて結合することなく、

マルクの境界の外にあるものや、外で起つた一切のものに利害關係を有せず、マルクの圍ひの中で自分だけのことをしてゐたのである。こゝにいふ極度に各個獨立主義の社會的組織が、インカ人の征服を極めて容易ならしめたのであるが、この組織はインカ人の侵略後も一般にそのままにして置かれた。しかし彼れ等は經濟的搾取と政治的支配との精妙な制度を、この組織の中に詰めて込んだのである。征服されたマルクはそれぞれ若干の地所を、「インカ田」および「太陽田」として別にして置かなければならなかつた、そしてこれは依然としてマルクの所有地ではあつたが、その収益は現物でインカ人の治者種族や祭司族にさへげたのである。同様に牧畜を營んでゐる山地マルクも、畜群の一部分を「領主の畜群」として分けて、治者のために供しなければならなかつた。この畜群の番も、インカ田および祭司田の耕作も、徭役としてマルク組合員全體の上に課せられた。その上になほ鑛山労働や、道路および橋梁の工築の如き公共労働の徭役——その指揮は支配者が握つてゐた——があり、嚴格な規律を伴つて兵役があり、その外になほ若い娘の進貢があり、これは一部は禮拜上の目的のため犠牲に供され、一部はインカ人の妾に供された。しかしながらこゝにいふ嚴密な搾取制度にも拘らず、マルク生活の内部も、その共產民主的の制度も依然として元のまゝと變りがなく、徭役公課そのものが、マルクの共同負擔として共產的に果されてゐた。茲に不思議なことは、共產主義村落組織は歴史に屢々見るように、幾世紀に亙る搾取および奴隷化の制度のための鞏固にして持久的な地盤たることを證したばかりでなく、こゝにいふ搾取および奴隷化の制度そのものがまた、共產主義的に組織されてゐたといふことである。即ちベル

1の被征服種族の背上に安樂に暮してゐたインカ人が、自から氏族團體やマルク組合を作つて生活してゐた。インカ人の主要住所たるクスコ市は、一ダース半の集團營舎の合成に外ならず、各營舎は内部に共同墓地、従つて共同の禮拜所を有する全氏族の一個の共產主義的世帯の場所に外ならなかつた。そしてこれらの大きな氏族住家の周りには、不分割の林地および草地と、分割耕地——同じく共同で耕作されてゐた——とを伴へるインカ氏族のマルク領域が存してゐた。即ち原始的民族として、この搾取者および支配者は、労働をまだ拋棄することなく、たゞ被支配者よりも良い生活をするために、そして禮拜のために犠牲をヨリ豊富に供へるためにのみ、自己の支配的地位を利用するにすぎなかつた。専ら他人の労働で養はれて、自分で労働しないことを以て支配の屬性たらしむる近代的技術は、共有と一般労働義務とが根柢の深い民俗となつてゐた社會的組織の本質には、まだ縁の無いものだつたのである。政治的支配の運用も、インカ氏族の共同の職分として編成されてゐた。ペルーの地方諸州に任命されたインカ行政者は、その役目がマレ一群島におけるオランダ駐劄官に類似してゐて、クスコ市ではインカ氏族の代表派遣者と見做され、集團營舎の中に住居を有し、且つ自分自身のマルクを分けて持つてゐた。これらの代表派遣者は毎年夏祭にクスコに歸つてきて、行政の審査を受け、自分の種族仲間と一緒に宗教的大祭典を祝つた。

故に吾々は茲に重なり合つてゐる二つの社會層を見るのであつて、兩者はそれぞれ内部では共產主義的に組織されてゐながら、相互に對して搾取および隷従の關係に立つてゐるのである。こ

の現象は一寸見れば理解し難く思はれるかも知れぬ。けだしマルク組合の組織の土臺となつてゐた平等、友愛、民主主義の原則と、非常に矛盾してゐるように見えるからである。しかしながらまさにこの點に、原始共產主義の制度は實際においては、人類の一般的平等および自由といふような原則とは何等係りのないものだつたといふ、一つの生ける證據を見る。これらの「原則」——少くとも「文明」國、即ち資本主義文化國の範圍では一般妥當性を有してゐるところの、抽象的「人間」従つて一切の人間に關するこの「原則」は、漸やく近來になつてのブルジョア社會の產物にすぎないのであつて、ブルジョア社會の革命——アメリカ並びにフランスにおける——がこれを初めて宣言したのであつた。原始共產社會は一切の人間に對する一般的原則といふものは知つてゐなかつた。この原始共產社會の平等および連帶は、共通血縁の傳統からと、生産手段の共有からと生じたものである。この血縁とこの共有とが及んでゐた範圍は、權利の平等と利害の連帶も及んでゐた。この利害關係の圏外にあるものは——そしてその利害關係は一村の境界を出でず、最も廣い意味でも一種族の地域範圍を出でなかつた——彼れ等にとつて縁のないものであり、従つてまた場合によつては敵對的なものであつた。それどころか、内部が經濟的連帶を基礎としてゐたこの共產體は、生産發達の階段が低かつたために、それに人口の増加に拘らず食料の源泉が豊富でないか乃至は疲弊してゐたために、週期的に他の同種の共產體と死活的な利害の衝突に陥ることを餘儀なくされ、その場合には動物的な鬭争や戰爭が裁斷しなければならなかつたのであつて、その終局は交戰者の一方側の掃蕩か、乃至は——この方がずつと多かつたのだが

——搾取關係の樹立であつた。原始共產主義の根柢となつてゐたものは、平等自由といふ抽象的原則の遵奉ではなく、人類文化の發達の低位、外部的自然に對する人類の無援といふ金剛不壞の必然なのであつて、これが人類に對して、比較的大きな團體に固く結合することと、勞働の場合、即ち生存鬭争の場合に計劃的統一的な動作をとることとを、絶對的存立條件として強要したのである。ところが他方においては、自然に對する征服の度が低いといふ、この同一の事情が、同時にまた、勞働における共同計劃や共同動作を、自然草地または開墾された村落植民地といふ比較的小さい地域にのみ局限して、ヨリ大きな範圍における共同動作には全く不適當ならしめたのであつた。當時の原始的農業状態は、村落マルクの文化以上に大きな文化の發生を許さず、かくてこの文化は利害の連帶の作用範圍を極く狭く局限したのである。そして最後に、勞働生産力の發達の不足といふ、この同一の事情が、同時にまた個々の社會的團體間の週期的な利害の對立を惹起し、それに伴つて、粗野な強力を生み、この對立を解決する唯一の手段たらしめた。かくて戰爭が社會的共同體間の利害の衝突を解決する常住的方法として生まれたのであつて、この方法は勞働生産力の最高の發達、言ひかへれば人類による自然の完全なる征服が、人類の物質的利害の對立を將來制遏するにいたるまでは、引續き優勢を占める筈である。しかしながら各原始共產體間の衝突が常住的現象として存在してゐたとすれば、この衝突の結果如何を決定したのも、矢張りその時の勞働生産力の發達の程度であつた。牧場のために鬭争を始めた二つの流浪的牧畜民族の衝突の場合だつたら、何方が主人としてその場所にとどまり、何方が荒涼たる廢地に驅逐さ

れ、乃至は掃蕩されてしまふかを、専ら粗野な強力が裁斷することが出来た。ところが農耕がすでに發達してゐて、總體の人間の勞働力とその生活時間の全部とを費やすことなしに、人々を安固に養ひ得る程度になつた場合は、この農耕民族を外部の征服者が組織的に搾取するための基礎も、同じくそこに存在してゐた。かくて吾々はベルギーにおけるが如く、一つの共產體が他の共產體に對して搾取者として臨むといふような事情が生ずるのを見る。

インカ帝國のこゝろいふ特有の構造が吾々にとつて重要であるのは、古代、殊にギリシャ歴史の發端における、これと類似の幾多の現象を理解するための鍵鑰を吾々に與へるからである。たとへば書史の中に、ドリアン人によつて統治されてゐたクレイト島では、隸民は自分の一家に必要な食料だけを除いて、田地の全收益を共同體全體に交附する筈であつて、それを以て自由民(即ち支配的ドリアン人)の共同食事に充てられてゐたとか、或は矢張り同じドリアン人共同體たるスバルタでは、「國有奴隸」即ちヘローテンが存在してゐて、自由民の持地を耕作するために「國家から」各個人に交附されてゐた、といふような簡単な報道が残されてゐるとすれば、こゝろいふ事情は最初には解くべからざる謎である。そこでハイデルベルヒの大學教授マックス・ウェーバーの如きブルジョア學者は、歴史が傳へたこゝろいふ奇妙な傳説を説明するために、今日の事情および概念の上に立つて珍無類な臆説を掲げてゐる。「被統治人口はこゝろ(スバルタ)では國有奴隸または國有隸民の状態にあるものとして取扱はれ、彼れ等の現物寄進を以て武人の暮しに宛てられてゐる。但し一部は上述の方法によつて、共同的に行はれるが、一部は各個人がそれぞれ一定の田

地を奴隸に耕作させ、その收益に頼つてゐるのであつて、その田地は各人が色々の程度に擅用し、段々後に世襲となるに至つたものである。割地の割替や分配は有史時代においても實行し得べきものと見做され、また實地に行はれてゐたらしい。それは勿論決して田地の割替ではなく、「勿論」ブルジョア大學教授といふものは、そゝろいふものはどんな場合でも認めるわけには行かぬ)謂はゞ地代基礎の割替であつた。軍事的見地、殊に軍事的人口政策がすべての細目を決定する。……この政策の都市封建主義的性質は、隸民附きの自由民の地面がゴルチーの軍事特別法の下に置かれてゐるといふ、特色ある形を取つて現はれた。即ちこれらの地面は「クレロス」を構成し、武人家族の扶養と密接な關係をもつてゐたのである。(大學教授式ドイツ語から普通一般のドイツ語に直せば——割地は共同體全體の所有であつて、従つて讓與したり、割地所持者の死後分配したりすることは許されなかつた、といふ意味であつて、これはウェーバー教授も別の箇所で、「財産の分散を防止するため」並びに「身分相應な武家持地を保護するため」の賢明な方策だと説いてゐる。)この組織は武人の將校集會所式共同午餐、即ち「シシチエン」の場合、並びに武人養成のため國家によつて行はれる兒童の士官候補生式共同教育の場合にその效力を最もよく發揮してゐる。*)かくて英雄時代のギリシヤ人、ヘクトルおよびアキレス時代のギリシヤ人は、仕

*『ハンドウェルターブーフ・デア・シユターツウィッセンシヤフテン』第一卷、古代における農事情 第二版、第
六九頁。

合せにもプロシヤ式の世襲財産制度や地代制度や、「身分相應」のシャンペン酒宴會をやる將校集會所の概念の中に入れられ、そして共同國民教育を受けてゐた天真爛漫な少年少女は、ベルリン郊外グロース・リヒターフェルデの監獄式幼年學校の中に拉し去られたのである。

インカ帝國の内部的構造を知つてゐる者にとつては、上述の事情は何等困難を呈するものではない。これらの事情は、疑ひもなく、或る一つの農業マルク組合が他の共產體によつて征服されたところから生じた寄生的二重具象の産物にすぎぬ。この場合に共產主義的基礎が、如何なる範圍まで支配民の風習の中に維持され、如何にして被征服民の状態の中に維持されたかは、この二重具象の發達段階、存続期間、環境によつて左右されるものであつて、これらの事情には一から十までいろいろの度合があり得る。支配民がまだ自分で勞働してをり、被征服民の土地所有が全體としてなほそつくり維持されてゐて、各社會層がそれぞれ閉鎖的に組織されてゐるインカ帝國は、おそらくそつくり搾取關係の最も本源的な形態と見做され得るものであつて、この形態が數百年の間保存され得たのは、専ら文化發達が比較的に原始的だつたのと、この國が世界から切り離されてゐたおかげに外ならなかつた。クレイト島の傳統は、これより進んだ段階にあることを思はせる。この島では征服された農民共同體は、暮しに必要な分だけを控除して、勞働の全收益を差出さなければならぬ掟であつて、従つて支配民共同體は自ら耕耘することなく、被搾取マルク組合の貢物で暮してゐたのであるが、それでも彼れ等自身の間ではまだ共產主義的に消費が行はれてゐた。スバルタでは——發達が更らに一步進んで——土地はもはや被征服民共同の所有で

はなく、支配民の所有と見做され、そして支配民の間にマルク組合式に地割と割替とが行はれてゐた。被征服民の社會的組織は、その土臺たる土地所有權の喪失によつて破壊され、土地そのものが支配民共同體の所有となり、彼れ等はこれを「國家のために」、共產主義的に、勞働力としての個々のマルク組合員に委ねてゐた。また支配民スバルタ人自身も、當時なほ嚴密なマルク組合的關係の中に生活してゐた。そしてこれと同じ様な事情は、その程度はいろいろであつても、テッサリア——そこでは從來の住民、ベネステ人即ち「貧しき民」がエオリア人のために征服されてゐた——にも、ビシニア——そこではマリアンディア人がトラキア種族のために矢張り同じ状態の下に置かれてゐた——にも、行はれてゐたと言つて差支へない。

しかもこつち寄生的存在は、必然の勢ひを以て支配民共同體の中にも瓦解の萌芽をもたらすようになる。征服を維持してゆく必要と、搾取を常住的の制度として固める必要とが、強大な軍事組織の形成を誘致することは、インカ帝國の場合にもスバルタ國家の場合にも見る通りである。そしてこれと共に、本來平等にして自由な農民大衆の間に不平等を惹起し、特權的身分の形成を誘致する第一の基礎が据ゑられたのである。そうなれば、あとは文化の高い民族と出合つて、洗練された生活欲望と活潑な交換とを喚び起す都合のよい地理的文化史的事情さへあれば、それに伴つて支配民の内部にも不平等が急速の進歩を遂げ、共產主義的聯結を弱め、貧富の分裂を伴ふ私有制度に道を開くようになる。こつち成行きは典型的實例は、東洋の古代文化民族と遭遇した以後のギリシヤ世界の早期の歴史である。かくて或る一つの原始共產社會が他のそれによつて

征服された結果は、その時期の早いと遅いとを問はず、つねに同一なものであつた——即ち共產主義的傳統的な社會の紐帶が、支配民の場合にも被支配民の場合にも等しく切斷され、全然新しい社會成態が生まれ、同時に不平等と搾取とを伴へる私有制度が世の中に現はれてくる。かくてギリシヤ古代における舊マルク組合の歴史は、一面においては、負債を負へる小農の大家と、軍務、公職、貿易を握り、不分割共有地を大土地所有としてわがものとしてゐた貴族との對立となり、他面においては、この自由民の社會全體と、搾取されてゐる奴隸との對立となる。戰爭で征服した民族に對して、一共同體が行ふ自然經濟的搾取の種々様々の形態から、各個人が奴隸を購買する制度にいたるのは、實に只の一步である。そしてこの一步を急速に進めたものは、ギリシヤにおいては、沿岸國家および島嶼國家における海上交通と、國際貿易およびその諸々の結果とであつた。チコッチも奴隸制度の二つの型を區別してゐる、「吾々がギリシヤ史の劈頭に認める經濟的奴役の、最古の、最も重要にして最も流布してゐた形態は、奴隸制度ではなく、隸民制度の一形式であつて、これを家士制度クワツヤレンツムと呼んで殆んど差支へないものである。」さればテオポンプスは誌して曰く、「テッサリア人やラケデモニア人の以後に、ギリシヤ人の間で最初に奴隸を使用したのはキオス人（小アジアのキオス島の住民）であつたが、彼れ等は奴隸を獲るのに、テッサリア人やラケデモニア人と同じ仕方を以てはしなかつた。……後の兩者は、現在自分等が所有してゐる土地に以前に居住してゐたギリシヤ人を、奴隸階級たらしめたのであつて、即ちアケヤ人、テッサリア人、ベレーベン人、マゲネシヤ人を強制によつて奉仕させ、この被征服民をへロー

テンまたはベネステ（何れも隸民の意）と呼んでゐた。これに反してキオス人は奴隸として異邦人（非ギリシヤ人）を手に入れ、これに對して或る價格を支拂つてゐた。」これにチコッチは正當に附言して曰く、「そしてこういふ差別の生ずる根據は、一方に内地民族と、他方に島嶼民族との發達程度の相違に存してゐた。蓄積されたる富が全然無かつたこと、或は極く貧弱だつたこと、並びに商業の發達が不足だつたことは、その一國內において所有者が直接に生産を行ひ、且つそれを増大することをも、奴隸を直接使用することをも不可能ならしめ、その代りとしてもつと初歩的な貢物といふ形式を誘致し、分業と階級形成とに導き、支配階級からは、軍隊が生まれ、被征服階級からは農民といふ身分が生まれた。」*

ペルーのインカ國家の内部的組織は、原始的社會形態の本質の重大なる一面と、同時にまた原始的社會形態の没落の或る一定の歴史的方法とを吾々に示してくれた。然るにペルー・インディアンその他アメリカにおけるスペイン植民地の歴史のその後の章は、原始的社會形態の運命における、もう一つ別の方向を吾々に示してくるであらう。そこでは何よりもまづ全然別個の搾取方法、たとへばインカ人支配の場合とは似もつかぬ方法が吾々の前に現はれる。新世界における最初のヨーロッパ人たるスペイン人の支配は、征服されたる住民の假借なき剝滅を以て始まつた。スペイン人自身の證言によれば、アメリカ發見後數年のうちに彼れ等によつて剝滅されたイン

ディアンの数は、千二百萬乃至千五百萬であつた。ラス・カサスは言ふ、「スペイン人はその怖るべき且つ非人間的取扱ひによつて千二百萬の人間——その中には婦人も子供もゐた——を剷滅したと主張して差支へない。予自身の意見によればこの時代に殺された土人の数は實に千五百萬を越えてゐる。」ハンデルマンは言ふ、「ハイチ島では、一四七二年にスペイン人が發見した土人の数は百萬に上つてゐたが、一五〇八年にはこの百萬の人口のうち生存してゐたものは僅かに六十万、そして九年後には更らに十四萬にすぎなかつた。かくてスペイン人は必要數の働き手を得るために、附近の島からインディアンの輸入をしなければならなかつた。一五〇八年だけでも、ハマ島から四萬の土人がハイチ島に輸入され、奴隷にされた。」スペイン人は堂々と銅色人種狩りを行つた。このことは、その時の目撃者にして参加人だつたイタリア人ギロラモ・ベンツォニが吾々に書き残してゐる。即ちベンツォニは、クマーグナ島でそういふ土人狩りが行はれて、四千のインディアンが捕はれた後で、こゝ書いてゐる、「食物の缺乏のためと、親や兒と訣れた悲嘆のためとで、囚はれた土人の大部分はクマニ港への途中で、死んでしまつた。奴隷の中で疲勞のため仲間と同じ速さで進めない者があれば、スペイン人は、その人間が後に止まつて背撃を加へはしないかといふ心配から、背後から七首で刺してむごたらしく虐殺した。これらの不幸な生物が、まる裸で、疲れ切つて傷だらけになつて、飢のためにヘトヘトになつて、立つてゐることもできないばかりになつてゐるのを見るのは、胸の張り裂けるような光景であつた。鐵の鎖がその頸や手足を縛りつけた。娘のうちでこの強盜(スペイン人)のために暴行を加へられなかつたも

のは一人もなく、忌はしい荒淫の犠牲にされて、娘の多くは永久に梅毒の犯すところとなつた。……奴隷にされた土人はすべて灼熱した鐵で記號をつけられる。ついで奴隷の一部を隊長が取り、あとは兵卒の間に分配してやる。兵卒はそれを賭博に賭けるか、スペイン人の移民に賣つてしまふ。商人はこの商品を、葡萄酒、麥粉、砂糖、その他日用品と換へて、スペイン植民地のうちで最も奴隷の需要がある部分に輸送する。この不運者の一部は輸送中に、水の缺乏と船室の空氣の悪いのとで落命してしまふ、といふのは、商人はすべての奴隷を船底に幽閉して、坐る場所も新しい空氣もなくしてゐるからである。」しかしそれでもスペイン人は、銅色人狩りの手數と、奴隷を購求する費用とを免れるために、西インド領とアメリカ大陸とに、謂はゆるレバルチエントス制度、即ち國土分割制度を布いた。即ち占領地域全體が總督によつて幾つかの團ひに分割され、團ひの村長「カチーケン」は、要求された人數だけの土人を奴隷としてスペイン人に差出す義務を負はされた。そして各スペイン移民は、總督から定期的に或る人數だけの奴隷を給與された、但し「奴隷をキリスト教に改宗させるように骨を折る」といふ條件付きで。奴隷に對する移民の虐待は想像に絶した。自殺でさへもインディアンにとつては救ひとなつた。その時代の或る一人(アコスタ)は言ふ、「スペイン人に捕はれたすべての土人は、遠く家郷を離れた鑛山にやられて、不斷の體罰の威嚇の下に、非常に骨の折れる仕事を強要される。されば幾千といふ奴隷が、外にこの恐ろしい運命から遁れる見込みがないので、首を縊るか、身を投げるか何かして、われと我が命を斷つただけでなく、自分達に普通な、どうにもこうにもならない不幸な境遇を一度、

に片附けるために、前以て自分の妻子を殺すに不思議はない。また他方では女は胎兒を墮ろすか、奴隷を生みたくないために男との交りを避けるかしてゐる。」

最後にスペイン移民は、皇帝懺悔聽聞僧、聖父ガルチア・デ・ロヨラの斡旋で、ハップスブルグ家のカール五世からインディアンを總括してスペイン移民の世襲奴隷と宜した勅令を得るに至つた。ベンツォニはこの勅令はカライビ食人種族だけに關するものと考へてはゐるが、事實は一般インディアンの上に擴張され、適用されてゐたのである。スペイン移民は自己の暴虐を辯護するために、人食ひその他インディアンの惡徳に關する途方もない幽霊話を計劃的に流布したために、たとへば同時代のフランスの史家マリー・ド・シャテルは、その著『西インド總史』(パリ、一五六九年刊)の中に、インディアンについてこんなことを記してゐる、「神はその惡業に對して彼れ等を奴隷で罰し給うた。けだしその父ノアに對して罪を犯したハムと雖も、インディアンが上帝を冒瀆してゐるほどには至らない。」それにも拘らず、これと略し同時代にスペイン人のアコスタは、その著『インドの自然および道德誌』(ベルセロナ、一五九一年刊)の中に、この同じインディアンについて次ぎの如く書いてある。彼れ等はいつでもヨーロッパ人に親切を示さうとしてゐる「氣立ての善い」民族であつて、その態度は氣もちのよい無邪氣さと正直さを表はしてゐるので、人間の本心を全然失つてゐない人間なら、誰れでも情愛を以て彼れ等を遇しないわけには行かないだらうと。

スペイン人の暴虐に反對する企てもあるにはあつた。一五三一年に法皇パウロ三世は諭令を發

して、インディアンは人類に屬するものだから奴隷を免かるべきであると説いた。スペイン西インド樞密院も後に奴隷制度に反對を聲明したが、これらの努力は勅令の再發によつて、その公明よりもその無効を證明したのである。

インディアンを奴隷状態から解放したものは、加特力僧侶の敬虔なる行動でもなければ、スペイン國王の反對でもなく、インディアンは生理的および精神的構造から見ても、苛重な奴隷勞働には絶対に役立たなかつたといふ簡単な事實であつた。こういふ有りのまゝの不可能に對しては、スペイン人の極度の暴虐も永くは如何ともできなかつた。この銅色人種は蠅のように奴隷世界の中に落ち込んで、逃げ出すか命を落すかしてしまふ——一言でいへば、この仕事は極めて引き合はぬものとなつた。そしてインディアンのための倦むことなき慈悲深い擁護者、ラス・カサス僧正が、役に立たぬインディアンの代りに逞しい黒人をアフリカから奴隷として輸入するといふ考へを案出した時に、初めてインディアンを以てする無益な實驗が廢止されたのであつた。この實際的な案出は、スペイン人の暴虐のことを書いたラス・カサスのパンフレットよりも、急速に且つ徹底的に効果を奏した。インディアンは二三十年後に奴隷から解放され、黒人の奴隷制度が始まり、爾後四世紀の間も續く運命となつた。十八世紀に一人の善良なドイツ人、ヨルベルヒの「大膽な老ネッテルベック」が、ギネアから南アフリカのグアヤナー——矢張りこゝでも別の「大膽な東プロシヤ人」が植民地を搾取してゐた——に向ふ船の船長として、數百の黒人奴隷を輸送したことがあるが、これは他の商品の外にアフリカで仕入れたものであつて、彼れは十六世紀のスベ

インの隊長が行つたと同様に船の下層に押し込んで運んだのであつた。だが啓蒙時代の人智の進歩はこゝにも現はれて、ネットルベックは奴隷の間に幽鬱病と死亡とを防ぐために、每晚奴隷を甲板にあげて、音楽と鞭打ちの響きの下に踊らせたのだが、昔の粗野なスペイン奴隷貿易商はそつういふところまでは氣が付かなかつたのである。そして十九世紀末の一八七一年には、ナイル河源を發見するためにアフリカに三十年間を送つた貴きダビッド・リビングストンは、アメリカ人のゴールドン・ベネットへの有名な手紙に次ぎの如く書いた、「私がウディディイにおける事情の眞相を明らかにしたことが、東アフリカにおける怖るべき奴隷貿易を打切らせることになるなら、私はこの成功をどんなにナイル河源の發見よりも高く考へるだらう。貴下の國では奴隷制度は何處でも廢止されてゐる、願くはこれをなほ達成するために、貴下の力強き助力の手を吾々に貸されんことを。この美しき國土は徴症か、いと高きものゝ呪咀かを負はされてゐるようである。」

しかしとにかくスペイン植民地におけるインディアンの運命は、こつういふ激變によつて毫も改善されなかつた。従來の植民制度に代つて、別な植民制度が現はれただけである。住民の直接的奴隷制度を基礎とせる従來の「レバルチエントス」の代りに、謂はゆる「エンコミエンダス」が實施された。この場合形式上は住民に對して、人身的自由と、土地の完全なる所有とが認められた。たゞその地域がスペイン移民、就中最初の征服者コンキスタドールの後裔の行政的指揮の下に置かれてゐただけあつて、彼れ等はインディアンを未丁年者と見做して、「エンコメンデロス」として後見を行ひ、併せてまた土人の間にキリスト教を弘布する役目をもつてゐたのである。土人のための教會

建築の費用に充てたり、後見役としての自分等の辛勞に酬いたりするために、「エンコメンデロス」は、「相當の金納税および現物税」を住民から要求する權利を法律によつて享有してゐた。この規定はやがてインディアンにとつて「エンコミエンダス」を地獄のやうに思はせるに充分だつたのである。なるほど土地は彼れ等の手に委ねられ、しかも種族の分割財産として渡されてはゐた。しかしながらスペイン人は、これを直接墾に觸れてゐる耕地のみと解したか、または解しようとした。分割共同地も、使用されてゐない地所も、それどころか往々休耕の農圃すらも、「荒地」としてスペイン人のために横領されたのである。しかもそれは極めて徹底的に且つ厚顔無耻に行はれたのであつて、ツौरリタが記してゐるところを見ても分る、「土人の利益や所有權を侵害することなどには頓着なく、ヨーロッパ人の所有と宣せられなかつた農地は一つもなく、かくて土人は太古の時代以來住んできた地域を手離すことを餘儀なくされた。彼れ等が現に耕作してゐる地所さへも、ヨーロッパ人の收用を防止する目的のために播種したにすぎぬといふ口實の下に、彼れ等から取り上げられることも稀れではない。こつういふ制度のおかげでスペイン人は二三の地方では、自分等の所有を非常に擴張して、土人には耕やすべき土地が少しもあとに残らないほどである。」それと同時に「相當な税」はスペイン人の「エンコメンデロス」のために厚顔無耻に高められ、インディアンはその苛税の重荷で壓死するほどであつた。同じくツौरリタはこつう言つてゐる、「インディアンの動産および不動産の全體を以てしても、課税を拂ふには足りない。インディアンの間には、財産が只の一ペソ(約二圓)にもならないで、日々の賃勞働で生活して

ある人間がいくらでもある。こういふ具合にしてこの不幸なる人々には、家族を養つてゆくに充分な物資は決して残らない。若人が往々にして正直な稼業よりも破廉耻な稼業を擇ぶのは、こゝろいふ理由からであつて、殊に兩親が四レアルか五レアル（一レアル——約二十五錢）以上の錢を自由にすることができない場合はそうである。インディアンは衣服の贅澤を殆んど許されない。衣服を買ふ金がない多くの人々は神事に列する資格がないのである。彼れ等の多數が、自分等の家族に對して必要な食物をとるのへる資力を見出し得ないで、絶望に陥つてゐるのは不思議ではない。……最近の旅行中に、予は幾多のインディアンが、課税を拂へる見込がないからと妻子に説き聞かせてから、絶望のうちに縊死したのを見聞した。」

最後に、土地の強奪と課税とを補ふものとして強制労働がくる。十七世紀初にはスペイン人は、往々、十六世紀には形式上廢棄されてゐた制度に逆戻りをしてゐる。なるほどインディアンに對して奴隸制度は廢止されたが、その代りに、その本質はこれと殆んど區別のない強制労働といふ一種獨特の制度が現はれてくる。すでに十六世紀の半ばにツリタは、スペイン人の下におけるインディアン賃労働者の状態を次ぎの如く書いてゐる。「インディアンはこの全期間に互つて、玉蜀黍パン以外には何の食料も得ない。……エンコメンデロスは彼れ等を朝から夜中まで働かせ、その間彼れ等に半分腐つたパンしか食物を與へないで、朝霜夜霜の中に、暴風雷雨の下に裸のまま放つてゐる。……インディアンは野天の下で夜を明かす。賃銀は強制労働の期間の終りに初めて拂はれるので、入用の暖い着物を買ふ金がないのである。エンコメンデロスにおける

かゝる状態の下では、労働が彼れ等の上に極度に疲勞困憊を來たすものであつて、インディアンの急速な死亡の原因の一と見做すことができるのに不思議はない。」この強制賃労働の制度は、今や十七世紀の初めにスペイン王室から、公式に且つ一般に法律を以て實施された。インディアンは自由意志では働きたがらない、しかしインディアンなくしては、黒人の現在數を以てしても鑛業を営むことは極めて困難だといふ原則が、その根據となつてゐる。インディアンの村落は今や必要な人數だけの労働者をとるのへて（ペルーでは人口の七分の一、新イスパニアでは人口の四プロセント）、エンコメンデロスに否應なしに差し出す義務がある。この制度の致命的結果は間もなく明らかになる。『俗界および宗教界におけるチリ王国の危険なる状態についての報告』と題するフィリップ四世への匿名建白書には、次ぎの如く書かれてゐる。「土人の數の激減についての周知の原因は、鑛山並びにエンコメンデロス農園における強制労働の制度である。スペイン人は非常な數の黒人を自由に使用し得ながら、そしてインディアンに對しては、征服以前に彼れ等が酋長に支拂つてゐたよりも比較にならぬほど高い租税を課してゐながら、しかも強制労働の制度を廢棄することはでき得ないと考へてゐる。」

その外にも強制労働の結果として、インディアンが屢々自分の田地を耕やすことができなくなり、これがまたスペイン人に、その田地を「不毛地」として捲き上げる口實を與へた。インディアン農業の衰滅は、豊饒な土地を自然に高利貸の手に渡した。「インディアンは土着の支配者の下では何等高利貸といふものを知らなかつた」とツリタは言つてゐる。スペイン人はそういふ

インディアンに、この貨幣經濟と苛税との開化を徹底的に知らしめたのである。負債に併呑されてインディアンの地所は、單にスペイン人に強奪されたばかりでなく、スペイン資本家の手に集團的に移つて行つた。そしてこの場合の不動産の地價の見積りは、それ自身ヨーロッパ人の卑劣を示す特別の一齣を成すものである。かくして土地の偷盜、租税、強制労働、高利貸が一箇の鋼鐵の如き環を結んで、インディアンのマルク組合の存在はその環の中で滅茶々に崩れてしまつた。インディアンの傳統的な公共的秩序、祖先傳來の社會的紐帶は、すでにその經濟的土臺——マルク組合的農業——の崩壞によつて消滅してしまふ。そしてこの經濟的土臺はまた土臺で、すべての傳統的權威の粉碎によつて、スペイン人のために計劃的に滅ぼされたのであつた。村長と種族酋長とは「エンコメンデロス」の裁可を必要としたのであるが、これは只彼れ等の生き物——極度に衰頹せるインディアン臣民——の單なる上置きにされてゐたにすぎなかつた。それにスペイン人の御得意の手段の一つは、酋長に對してインディアンを煽動することであつた。土人を酋長から搾取されないように保護してやるといふ、キリスト教的目論見を口實にして、スペイン人はインディアンに對して祖先代々古くから酋長に納貢してきてゐるのを、する必要がないと説いて聞かせた。ツーリタは言ふ、「スペイン人は現代スペインに行はれてゐることを根據として、酋長は部下の種族を掠奪すると主張してゐるが、スペイン人自身がそいふ壓制に責任がある。何故なら舊來の酋長から地位と收入とを取つて、一般インディアンの中から新しく任命したものを以てこれに代へてゐるのは、外ならぬスペイン人自身の仕事だからである。」また個々のマル

ク組合員がスペイン人に違法に土地を賣つたのに對して、村長や種族酋長が抗議した場合も、スペイン人は同じような陰謀をめぐらした。慢性的叛亂と、個々の土人間の不法土地賣却に對する無限の連續的訴訟とがその成果であつた。零落、飢餓、奴隸に、もう一つ無政府狀態が加はつて、インディアンの生活を完全に阿鼻地獄たらしめた。こゝにいふスペイン人のキリスト教的後見の總勘定は、二つの言葉に盡きた。土地がスペイン人の手に移つたこと、インディアンが死滅したことがそれである。ツーリタは言ふ、「インドにおけるすべてのスペイン領域では、土人の種族が——二三の人はその反對のことを主張してはゐるが——全然消滅するか、乃至は數を減少するかしてゐる。土人は住居と地所とを捨て、ゆく。土人にとつては住居も地所も、無際限の現物税や金納税のために價値が無くなつてしまつたのだ。彼れ等は他國に出て、一つの地方から他の地方へと放浪するか、危険を冒して森林の中にかくれて、晩かれ早かれ野獸の餌食となる。自殺で自分の生涯を斷つてしまふ土人が澤山あることは、予自らが目撃したり土地の住民に聞いたたりして、これを確證する機會にいくらかも出會つた。」そしてその半世紀後には、同じくベルギー駐在のスペイン政府の高官、ユアン・オルテル・デ・セルヴァンテスは次ぎの如く報じてゐる、「スペイン植民地における土着人口は、段々稀薄になりつゝある。土人は従來の住所を棄て、土地を耕やさず放つておくので、スペイン人は必要な人數だけの耕作者と牧畜者とを見出すのに骨が折れる。謂はゆるミタヨス人——この種族がなければ金銀鑛の仕事は不可能となるのだが、彼れ等はスペイン人の住んでゐる都市を去つてしまふか、留まつても恐るべき速度を以て死滅するかして

る。」「
 そういふ經濟が行はれてゐたにも拘らず、インディアン民族とマルク組合制度とが十九世紀にいたるまで殘骸を保つてきたのを見て、人々は實際この兩者の奇蹟的な粘ばり強さに驚嘆するに相違ない。

別な方面から古代マルク組合の運命を吾々に語るものは、イギリスの大植民地たるインドである。世界の何處の一角よりも、こゝに吾々は土地所有のありとあらゆる形態の一箇の見本圖を研究することができる。そして同時にこの見本圖は、ヘルシユルの星辰圖のように、平面圖に投影された數千年の歴史を現はしてゐるのである。村落共同體と並んで氏族共同體があり、平等な割地の定期割替と並んで不平等な割地の終身的所有があり、共同土地耕作と並んで私的單獨經營があり、共有地に對する全村落居住民の權利の平等と並んで或る種の群團の特權があり、そして最後に、すべてこれらの共有の形態と並んで土地の私有があり、そしてこの私有はまた自作農矮小地の形もあれば、短期小作地、巨大地所の形もある——すべてこれらのものは、インドでは二三十年前には實物大のまゝ研究することができた。インドにおけるマルク組合が太古の時代のものであることは、インドの幾多の法制的典據が確證してゐるところである。たとへば法典に編纂された最古の習慣法たる、紀元前九世紀頃のマヌ法典がそうであつて、その中にはマルク間の境界争ひに關する規定や、不分割共同地に關する規定や、親マルクの分割地に分村が移住する場合の規定などが無數に含まれてゐる。この法典は自己の勞働に基く財産だけしか認めず、なほ手工

業を農家の副業として述べ、またブラーマ即ち僧侶の經濟的權力に制限を課して、それに動産を贈與することだけを許してゐる。後代の土着的諸侯たるラーヂヤは、この時代にはまだ選舉された種族酋長たる役目をつとめてゐる。その後の紀元前五世紀にできたヤヂナワルキヤおよびナラダーの兩法典も、社會組織としての氏族團體を認めてをり、公權力も裁判權も、こゝではマルク組合員の總會の手におかれてゐる。マルク組合員は個人の犯罪に對して連帶責任を負ふ。村落の首端には選舉されたマルク酋長が位してゐる。兩法典とも、最も平和で公平な最良の組合員をこの職に選舉して、それに對して無條件的に服従すべきことをすゝめてゐる。ナラーヂ法典はすでに二種のマルク組合を分けてゐる——「親族」即ち氏族組合と、「同居居住者」即ち非血族の地域的團體たる近隣者共同體とがそれである。しかしながら兩法典とも、矢張り自己の勞働を基礎とせる財産のみを認め、遺棄された土地は、それを耕作するために占領せる者に屬し、違法所有地は、所有者自身の勞働が伴はない場合には三代後に至つても承認されない。故に吾々はこの時代までは、まだインド民族が原始的な社會的紐帶と經濟關係との下に生活してゐたのを見る。即ちインド民族はインドス地域においても、またその後ガンヂス地方征服の英雄時代となつて、ラーマヤナおよびマハーバーラタといふ偉大なる民族叙事詩が生まれた時にも、數千年に亘つてそらいふ原始的事情の下に生活してゐたのである。舊法典に對する註解——これはつねに深甚なる社會的變動に特有な徴候であつて、舊來の法律的見解を新たな利益關係に應ずるよりに變化させ、解釋せんとする努力の表徴であるが、こゝに註解がやがて現はれたことは、註解者の活動時期

たる十四世紀までに、インドの社會がその社會的構成に徹底的變動を闊みしてきたことを示す一つの明瞭な證據である。註解者は舊法典の明瞭な文句に——封建的西洋における同じ仲間のキリスト教註解學者の場合と全然同じく——「解説」を試みて、僧侶の土地所有を是認し、ブラーマに對する土地の贈與を奨励し、かくして農民大衆を犠牲にしてマルク所有地の分配と、寺領大土地所有の形成とを促進するにつとめてゐる。こゝにいふ成行きはすべての東洋社會の運命に典型的なものであつた。

東洋の大多數の地方において、比較的進歩せる農業の生命問題は、人口的灌漑である。故に吾はインドにおいても、エチプトにおいても、すでに夙に農業の堅實なる基礎として、大規模な灌漑工事、運河、貯水池、または農業を週期的氾濫に順應させるための計劃的豫防設備を見るのである。すべてこれらの大規模な企圖は、當初から個々のマルク組合の力に餘るものであつて、その發起や經濟計劃を以てしてはできなかつた。これらの計劃を指揮し實行するには、個々の村落團體の上に位しその勞働力をヨリ高級な單位に總合することのできる一個の權威が必要であつた。それに加ふるに、村落の境界内に閉ぢ込められてゐた農民大衆の觀察および經驗の分野におけるよりも、もつと高い程度に自然律を統御することが必要だつた。こゝにいふ必要から、東洋における僧侶の重要な職分が生じたのであつて、僧侶はどの自然宗教にも必ず伴つてゐる自然觀察によつて、並びにこれは一定の發達段階に當然起ることであるが、農業勞働への直接の參與から解放されてゐることによつて、灌漑といふ大公共企業を行ふに最もよく適してゐたのであつた。

ところがこゝにいふ純經濟的職分から、時を経るにつれて、自然に僧侶の或る特殊の社會的權力が生じた。即ち分業から生じた一つの社會部分の専門化が、農民大衆に對する特權および搾取利益を伴へる一個の世襲的鎖封的身分ケイストと化したのである。こゝにいふ過程があれやこれやの民族の間にどんな速度で、どんな範圍で運ばれたか、ペルーのインカ人の場合におけるように萌芽的な形でとゞまつてゐたか、それともエチプトまたは古代ヘブライ人の場合のように、僧侶階級の正式の國家支配、即ち祭司政治にまで發達したかといふことは、つねに特殊の地理的および歴史的事情によつて決せられたのであつて、殊に隣接民族との度々の戰爭的衝突の結果、僧侶階級の外に、有力な武人階級が出現して、この階級が軍人貴族として僧侶階級と覇を争ひ、乃至は僧侶階級の上に立つてゐたかどうかによつて決せられたのであつた。しかしながらどの道、古來の共產主義マルクが特殊的に各個獨立主義的に局限されてゐたために、その組織は經濟的性質の任務にして、政治的性質の任務にして、比較的大きな任務には適せず、隨つてマルク以外の、そしてマルクの上に位する權力の支配に歸し、この權力が右の職分を取り上げたのである。たしかにこゝにいふ職分の中に、農民大衆を政治的に支配し、經濟的に搾取するための鍵鑰が存してゐたのであつて、東洋の野蠻的征服者は——モンゴル人たると、ペルシヤ人たると、アラビア人たるとを問はず——すべていつの場合でも、征服した國において軍事的權力の外に、農業の死活條件たる大公共企業の指揮および實施を掌握したのである。ペルーにおいてインカ人が人工的灌漑工事や道路および橋梁の建設に對する監督を、自己の特權とも義務とも見做してゐたように、インドでは幾世紀

のうちに互に交代してきた種々のアジア的専制王朝は、これと同じ仕事を引受けてゐた。そういふわけで世襲的身分が形成されたにも拘らず、専制的外人支配がその國の上にかぶさつてゐたにも拘らず、幾多の政治的改革があつたにも拘らず、インド人社會の居住地の中に村落が靜かにつつましやかな存在を保つてゐたのである。そして各村落の内部にはマルク制度の太古からの傳統的律令が行はれてゐて、これらの律令は騒々しい政治史のかけで、靜寂な、人目につかぬ自身身の内部的歴史を閲みし、古き形態を脱ぎ棄て、新しい形態を取りあげ、繁榮、衰頹、分解、改造を閲みしてきたのであつた。如何なる記録者もこういふ成行きを記録して來なかつた。そして世界歴史はマセドニアのアレキサンダーの大膽なるインドス河源の遠征を記載し、血腥きタメルランおよびそのモンゴル人の戰爭騒ぎや何かでいつぱいになつてゐながら、インド民族の内部的經濟史については全然口を噤んでゐる。吾々はこの内部的歴史の古い斷層の殘片からのみ、インド民族の共同團體の臆測的な發展圖型を組立て得るだけであつて、こういふ重要な學問的任務を果したのは、實にコヴァレフスキイの功績なのである。コヴァレフスキイに従へば、なほ十九世紀半ばに至つてもインドにおいて目撃されたる土地共同體の各種型式は、次ぎの如き歴史的順序に排列することができる。

一、最古の形態と目されるものは、一氏族の血族者總體を包含し、土地を共有し、またそれを共同に耕作してゐるところの純氏族共同體である。従つてこゝでは共同體耕地も不分割共同地であつて、共同村落穀倉に保管される收穫物だけが分配されるにすぎぬ。こういふ村落共同體の最

も原始的な形態は、北インドの僅々二三の地方において維持されてゐたにすぎぬが、しかもその村落共同體の住民は、大多數の場合古代氏族の若干分枝 (*sub-tribes*) に限られてゐた。コヴァレフスキイはボスニアおよびヘルツェゴビナの「ツァドルガ」と比論した結果、これを原始的血族の解體の産物と認め、この血族が時を経るにつれて人口増加の結果若干の大家族に分裂し、それがまたそれぞれ所有地と共に分かれたのであると認めてゐる。前世紀の半ばにはまだこういふ型の顯著なる村落共同體が存在してゐて、そのうちの或物はたとへば百五十人以上の成員を有し、或物は四百人からの成員を有してゐた。しかし主として存在してゐたのは小村落共同體の型であつて、これは特別な場合にのみ、即ちたとへば所有地を讓渡した場合などに、昔の氏族の範圍内で、もつと大きな親族團體に合成したが、普通の場合は嚴格に規律された隔離的生活を営んでゐたのであつて、マルクスはイギリスの資料によつて、『資本論』の中にこの生活の荒筋を叙べてゐる。

「たとへば一部分はなほ存續してゐるところの、太古の小さなインド共同體は、土地の共有と農業および手工業の直接の結合と、並びに新共同體を建設する場合に既存の雛形および筋書として役立つところの、一の固定した分業とに立脚してゐる。これらのインド共同體はそれぞれ自足的な生産的全一體を成してゐて、その生産範圍は一百エーカーから約一千エーカーにいたるまで色々ある。生産物の主たる大量は共同體の自己必要のために生産されるのであつて、商品として生産されるのでなく、従つてインドの社會全體として、生産そのものは商品交換がもたら

す分業には係はりない。たゞ生産物の過剰のみが商品に轉化するものであつて、それも一部分は國家の手によつて初めて行はれる。生産物の一定量は、想像すべからざる古い時代から、國家の手に現物地代として流れ込んでゐるのである。インドの種々の部分は、それぞれ種々の形の共同體を有してゐる。その最も單純な形のものとしては、共同體が土地を共同に耕作し、土地生産物をその成員の間に分配すると共に、一方では各家族が紡績、機織等を家内副業として營んでゐる。これらの同一種類の仕事に従つてゐる大衆の外に、なほ次ぎの人々が存在してゐるのを見る。即ち裁判官、警察官、收税吏を一身に兼ねてゐる「首腦住民」、農業上の計算を行ひ、農業に關する萬事を評價し入帳する簿記係、犯罪者を起訴し、外來の旅人を保護し隣村に案内する今一人の吏員、隣村との境界を見張る境界係、農業上の目的のために共同貯水池から水を分配する給水監督者、宗教上の禮拜を司る婆羅門僧、村童に砂で讀み書きを教へる教師、占星者として播種期、收穫期を知らせ、あらゆる特殊農業勞働に對してそれぞれ吉凶の時間を知らせる曆僧、すべての農具を製作し修理する鍛冶工および大工各一名、村で必要なすべての容器をつくる陶工、理髮師、衣類を洗ひ淨める洗濯工、銀細工師、また所によつては詩人——これは或る村では銀細工師に代り、他の村では教師に代る。これらの十數の人々は村全體の費用で養はれる。人口が増加すると、從來の村を手本にして新しい村が未耕地に設立される。……村の分業を調節する法則は、ここまでは一個の自然律たる犯すべからざる權威を以てはたらく。……絶えず同じ形で再生産され、そして偶々破壊される時は同じ場所に同じ名で再興されるところの、これらの自足的共同體の單純な

る生産機構は、アジアの社會が一貫して變化しなかつた秘密を闡明する鍵を與へるものである。實にこのアジアの社會の不變性は、アジアの國家の不斷の興亡と絶え間なき王朝の交代とに對して著しい對照を成してゐる。社會の經濟的基本要素の構造は、政治的雲界の狂亂に係はりなく、いつまでもそのまゝであるのである。*

二、イギリス人侵略時代には不分割耕地を伴へる原始的氏族團體は、大部分すでに瓦解してゐた。しかしその瓦解から或る一つの新たな形のものが発生した。即ち分割耕地を伴へる親族共同體であるが、平等でなく不平等なる家族割地を伴つてゐるのであつて、その割地の大きさは曾祖から見た等親の度合に精密に依存してゐたのである。こゝろいふ形ものは西北インドにもガンヂス地方にも非常にひろがつてゐた。この場合割地は終身でも世襲でもなく、人口の増加のためや、一時不在だつた親族に耕地の分け前を與へるために、割替が必要になつてくるまで、家族の所有となつてゐるのである。しかしながら往々こゝろいふ新たな要求は、一般的な割替によつてはなくなり、新たな割地を未耕共同地に振り當てることによつて充たされた。こゝろいふ具合にして家族割地は往々——法律上でなくとも事實上に——終身となり、剩へ世襲とさへなるのである。しかしこゝろいふ不平等に分配された耕地は別として、林地、沼地、草地、未耕地は依然としてすべての家族の共有であつて、共同に利用されてゐる。ところがこの不平等の上に立脚してゐる奇妙な共產主

義的組織は、時を経るにつれて新しい利害と矛盾するにいたる。代が後になる毎に、各個人の等親の度合を確定することがますます困難になり、血縁の傳統が薄くなり、そして地割で損をしてゐる者は家族割地の不平等なことを、段々不公平と感ずるようになる。他方では多くの地方において、親族の一部が移住したり、戦争で住民の一部が剿滅されたり、外來者が入り込んで來たりするために、勢ひ人口の混合が生じてくる。そういふ具合で、外見上は事情が不動不變であるやうに見えるに反して、共同體の住民は地味に應じていくつかの團 ("windu") に分たれ、そして各家族は灌漑の良い團 ("sholgura") の中にも、灌漑の悪い團 ("oulnae") の中にもそれぞれ條田を受けるやうになる。割替は最初のうちは、少くともイギリス人侵略以前には定期的でなく、人口の自然的増加の結果、家族の經濟的地位に事實上の不平等が生じた度毎に行はれてゐた。特にこれは利用し得べき團の貯へを有する、土地の豊富な共同體において行はれてゐた。もつと小さな共同體では、割替は、十年毎、八年毎、五年毎、往々一年毎に行はれてゐた。そして一年毎の割替は、優良な團が缺乏してゐるために、これをすべての組合員に毎年平等に分配することが不可能な場合、従つて種々の團を交替的に利用することによつてのみ、均等に公平の實を擧げ得る場合に、特に行はれてゐた。かくてインドの氏族共同體は瓦解して、史上にゲルマン民族マルク組合の起源と認められてゐるところの形態を以て終つてゐるのである。

吾々は英領インドおよびアメリカにおいて、古代共產主義經濟組織がヨーロッパ資本主義と衝突せる場合の絶望的闘争と、その悲劇的終結との二つの典型的實例を學んだ。しかしマルク組合

の變遷極まりなき運命の圖景は、結びとして或る一國の不思議な實例を顧みないなら完全だといへまい。その一國では、一見歴史が全然別個の經濟を取つてきたのであつて、即ちそこでは國家が、農民的共有制度を強力的に破壊せずに、正反對にこれをあらゆる手段を以て保護し保存せんとつとめた。この國とは即ちツァール國ロシアである。

吾々はこゝでは、ロシア農民の共同耕作制度の起源について、數十年に亙つて行はれてきた理論上の大論争には觸れるわけに行かぬ。ロシアにおける共同耕作制度は原始的な歴史の產物ではなく、ツァール政治の財政政策の人爲的產物だつたといふ、ロシアの大學教授チチェリンの一八五八年の「發見」が、ドイツの學者の間に熱心な採用と同意とを獲たことは、只々當然のことであつたし、また原始共產主義に反對な、今日のブルジョア學問の一般的氣もちと一致するものである。矢張りチチェリンの説も、自由主義學者といふものは、歴史家としては反動派學者よりも多くの場合はるかに役立たずであることを示す一つの證據なのであるが、チチェリンはマウラー以來西ヨーロッパに對しては明確に無効になつてゐる散居説、即ち十六世紀および十七世紀に初めてこの散居から密居村落が發生したといふ學説を、なほロシアに對して採用してゐる。この場合チチェリンは、共同耕作と強制耕作とを農場交叉から派生せしめ、共同土地所有を境界争ひから、そしてミール組合の公權力を、十六世紀に實施された人頭税のための納税連帶責任から派生せしめてゐる。即ちすべての歴史的相互關聯、原因と結果とを極度に自由主義的に逆立ちさせてゐるのである。

しかしロシアにおける農民共同耕作制度の年代および起源が如何に考へられてゐようとも、とにかくこの共同耕作制度は農奴制度の永い歴史を過し、農奴の廢止を経て、最近時に至るまで生き残つてきた。だがこゝでは吾々は、十九世紀における共同耕作制度の運命にだけ注意を向ける。

ロシア皇帝アレキサンドル二世が謂はゆる「農民解放」を實施したとき、農民は——全然プロシヤの手に倣つて——自分の土地を地主から賣付けられ、この際地主は自稱地主地の最も劣悪な部分に對して、國庫から有價證券でたんまりと賠償され、農民に「貸與」された土地には負債を課され、この負債は年六分の償却率で四十九年以内に國庫に皆済することに取定められた。しかしこの土地はプロシヤにおけるように私有財産として各個の家族に分與されることなく、讓渡も入質もしてならぬ共有財産として村全體にあてがはれたのである。土地買戻負債に對しても、すべての租税公課に對しても、村全體が連帶責任を負ひ、村の各員の間の算定は自由であつた。大ロシア農民地の歴大な全地域はこゝにいふ具合に處分されたのである。九〇年代の初めには、ヨーロッパ・ロシア（ポーランド、フィンランドおよびドン・コサック地方を除く）における總土地所有の分類は次ぎの如くであつた——國有地、これは大部分北部の廣大な森林地域と荒地とより成り、一五〇百萬デシヤチン（一町一段四歩）を包含し、御料地が七百萬デシヤチン、寺領地および市有地が九百萬デシヤチンを下らず、私有地が九百萬デシヤチン、そのうち五%だけが農民に屬し、残りは貴族に屬してゐた。そして一三二百萬デシヤチンが農民の

共有となつてゐた。一九〇〇年にはなほロシアにおいて一二二百萬ヘクタール（一ヘクタール——一町二十歩）が農民の共有となつてゐて、二二二百萬ヘクタールだけが農民の私有となつてゐた。

こゝにいふ歴大な地域におけるロシア農民の經濟が、最近の時代にいたるまで——部分的には今日においてもなほ——如何に營まれてゐるかを見るならば、ドイツにもアフリカにも、ガンヂスにもペルーにも、あらゆる時代に普通一般に行はれてゐたマルク組合の典型的制度を容易にこゝにも認めることができる。即ち一方に分割耕地があり、他方に林地、草地、河水が分割の共用地をなしてゐた。そして原始的三圃農業が一般に行はれてゐた場合は、夏穀作地も冬穀作地も地味に従つて幾つかの圃（カルテン）に分たれ、各圃はまたそれぞれ條田に分たれてゐた。夏穀作地は四月に、冬穀作地は六月に分配される慣はしであつた。土地の均分を精密に遵守したために、ひどい農場交又が現はれて、たとへばモスクワ縣では、夏穀作地と冬穀作地とに平均各々十一の圃が宛てがはれ、各農民は少くとも二十二の分散的割地を耕耘しなければならなかつたほどである。村は普通に一定地面を別に取つて置いて、危急の場合のため共同用に耕耘され、乃至は同じ目的のために穀倉を設けて、各成員はこれに穀物を提供しなければならなかつた。經濟の技術的進歩は次ぎの如くにして配慮されてゐた。即ち各農家は自分の割地を、施肥するといふ條件の下に十年間保持することを許され、乃至は各々の圃に幾つかの分地が仕切られて施肥され、十年毎にのみ割替された。同じ規則が大多数の場合、亞麻油、果樹園および野菜園にも行はれてゐた。種々の草牧地に對する共有畜群の分配、專屬牧人の發見、牧場の圍込み、農圃の監視、耕種式

の決定、並びに個々の耕作上の仕事の時刻、割替の期間および方法の決定——すべてこれは共同體の仕事、即ち村會の仕事であつた。割替の度数はといへば非常に種々様々であつた。たとへばサラトフ一縣だけについて見ても、一八七七年には、調査された二百七十八の村落のうちで、約半數が毎年割替を行ひ、残り二年、三年、五年、六年、八年、十一年毎にこれを行ひ、一般に施肥を實行してゐた三十八の村は割替を全然廢止してゐた。

ロシアのミール組合に最も奇異なるは土地分配の方法である。この場合行はれてゐた原則は、古代ドイツ人の場合におけるような均等割當の原則でも、ペルー人の場合におけるような家族の欲望の大きさによる原則でもなく、専ら納税力の原則であつた。納税上の利害關係が農民解放以來村落共同體の全生活を支配し、村落のすべての制度文物は租税を中心としてゐた。ツァール政府にとつては課税の基礎として存在してゐたものは、謂はゆる「檢閲人頭」だけであつた。即ちピョートル大帝の下における最初の農民人口調査以來、約二十年毎に有名な「檢閲」によつて確定されたところの、年齢の區別を問はざる村落のすべての男子住民の謂ひである。この「檢閲」はロシア國民の恐怖であり、その前にはすべての村が離散したのであつた。*

*ピョートルの勅諭によつて一七一九年に行はれた第一回の「檢閲」は、敵國における一種の懲罰征討のように編成された。軍隊は愚圖ついでゐる知事逮捕し、これを官廳に監禁して、「改悔するにいたるまで」そこに留めておく權利を與へられた。農民名簿の調査を委任されてゐる僧正がその際に人頭の隱匿を見通した場合には、職を免ぜられ、「高齢の者」と雖も容赦なき體刑を加へられた後懲役に處せられる「定めであつた。「人頭」隱匿の嫌疑ある人間は務問にかけられた。後代の「檢閲」はこれよりは緩やかではあつたが、なほ久しい間矢張り懲罰に行はれた。

政府は村に對して檢閲された「人頭」數に應じて課税した。しかるに村は割宛てられた租税總額を勞働力に應じて農家に割宛て、このようにして算定された納税能力に應じて、各農家の土地の割當が定められた。かくてロシアにおいては一八六一年以來、土地の割當は當初から農民の給養の基礎でなく、納税の基礎たる形をとり、各農家が要求權を有する恩惠ではなく、各村民に國家に對する奉公として強要された義務だつたのである。だから土地の分配が行はれる場合の、ロシアの村會ほど奇妙不可思議なものはない。土地の割當が多過ぎたといふ苦情を、いたるところに耳にすることができ、正當な勞働力を有しない貧しい農家、主として女や子供の家族を有する農家は、「無力」の故を以てお慈悲で割當を免除され、これに反して富める農家は、貧農の大家から否應なしに最大の割當を押しつけられた。かくロシアの村落生活の中心となつてゐる租税負擔はまた莫大なものである。土地買戻金額に加ふるに、まづ人頭税、村税、寺院税、鹽稅等があつた。八〇年代には人頭税と鹽稅とが廢止されたが、それにも拘らず租税負擔は依然として巨額であつて、農民のすべての經濟要具を併呑したのである。九〇年代の或る統計によれば、農民中の七〇%はその持地から最低生活費をも引き出すに足らず、二〇%は食つてはゆけるが家畜を養ふことができず、約九%だけが自家の需要以上の餘分を賣りに出すことができたにすぎぬ。されば「農民解放」後も矢張り租税の滯納が、ロシア農村の不斷の現象となつた。すでに六〇年において、一年に平均五千萬ルーブルの人頭税の支拂に比して、一千一百万ルーブルの滯納があることを示してゐた。人頭税の廢止後も、八〇年以來ますます高額に捲き上げられた間接税のおかげで、ロシ

ア農村の貧困はますます増大した。一九〇四年には租税の滞納は一億二千七百萬ルーブルに上つたが、これは徴集が完全に不可能だつたのと、革命的醜態を顧慮したのとで、殆んど全額を免除された。租税はやがて農民經濟の全収入を併呑したのみでなく、農民をして否應なしに副業を求めしめた。一面においては農業季節労働が、今以て收穫期になるとロシア國內に全民族移動を誘致し、村民のうちの有力な男子は、自分等の持地を老人、婦人、未成年者の力弱い労働力に委託して、地主領地に赴き、そこで日傭賃を稼ぎ出す。他面においては都市が、工場工業が手招きする。かくて中部ロシアの工業區域には、冬の間だけ都市、しかも大多数は繊維工場に移り、春になれば儲けを携へて村に歸つて耕作に従事する一時的労働者の一つの層が形づくられた。最後になほそれに加ふるに、多くの地方には工業家内労働または農業上の偶然的副業、たとへば運搬仕事や伐木の如きものがある。しかもそういふものがあつても農民の大多數の衆團は、それでもなほ着のみ着のままの生活を支へることが難かしかつたのである。農業の成果ばかりでなく、すべての工業的副業の成果も、悉く租税のために併呑されたのであつた。租税に對して連帶責任を有するミール組合は、組合員に對して峻嚴な權力機關を國家から賦與されてゐた。ミール組合は租税滞納者を外部に賃労働に貸してやつて、その稼いだ金を沒收することができ、また組合員に旅券を與へたり拒んだりする権利があり、そして農民はこの旅券がなければ村から出ることができなかつた。最後に、ミール組合は、組合員が頑強に租税を滞納する場合は、體刑を加へる法律上の權利を有してゐた。そこでロシアの農村はロシア内地の廣大なる範圍に互つて、週期的に全く

一種特別の光景を呈した。村に租税取立ての期日が來れば、ツァール・ロシアが、「滞納の叩き出し」といふ専門的名稱を案出した或る一つの處置が始まる。村會は全員を以て開かれ、滞納者はズボンと靴を脱いでベンチの上に横はり、同じミールの仲間から一人一人管で慘たらしく打たれねばならなかつた。管打たれる者——その多くは鬚の生えた家父や、往々白髮の老人——の呻吟と號泣とを後にして、御役人は仕事に済むと三頭馬車に乗り、鈴の音を鳴らして別の村へと向つて同じことをする。農民がこの公けの處刑を、自殺によつて脱れることも稀れではなかつた。こゝろいふ状態のもう一つの奇妙な産物は「租税乞丐」であつて、貧しい老農夫が乞丐杖に縋つて、期限の來た納税額をあらゆる道で掻き集めて、村に持つて歸るために放浪に出る。

このように一個の租税搾出機械と化したミール組織を、國家は嚴重に且つ不斷に監視してゐた。たとへば一八八一年の法律は、農民地は農民の三分の二の決議によつてのみ村全體が手離すことを許され、但しこの場合内務大臣、大藏大臣、國有地大臣の承認を要すといふ規定であつた。個々の農民は自分が獲得した世襲地産を、自分が屬してゐるミール組合の仲間のみ譲渡することを許され、また農民地を抵當に取ることは禁ぜられた。アレキサンドル三世の治下には村はあらゆる自然權を剝奪され、「地方首長會議」——プロシヤの「ランドレーテ」(地區行政最高機關——地區評議會)に似た機關——の意のままに委ねられた。村會の決議はこの機關の承認を要し、土地の割替はその監督の下に行はれ、租税の賦課および徴收も矢張りそうであつた。一九〇三年の法律は時勢に迫られて部分的讓歩を行ひ、割替を十二年毎にのみ許容することを宣した。しかし同

時にミール組合からの脱退は、村の同意を必要とし、且つその當事者が自分に割宛てられてゐる土地買戻負債を皆済するといふ條件が課せられた。

こういふ法律の人為的鎔で村を締めつけてゐたにも拘らず、三人の大臣とチノフニキイ軍勢との後見にも拘らず、もはや村の崩壊を停止させることはできなかつた。歴史的な租税負擔、農業的副業の結果による農業の衰微、土地の缺乏、特に土地買戻の際に大多數貴族のために強奪された結果の草牧地の缺乏、それに加へて人口増加による使用耕地の缺乏——このすべては村落共同體の生活の中に二様の重大なる現象を惹起した。都市への逃避と、村落内部における高利貸の出現とがそれである。割地と工業的その他の副業とを一緒にしても、たゞ徒らに租税を支拂ふ役目をするだけで、極度に窮乏な生活すらも支へることができなくなるにつれて、ミール組合に屬してゐることはそれだけ農民にとつて鐵の足枷となり、頸をしめる飢餓の鎖となつた。そしてこの鎖から脱れることが、貧しい村民の全大衆にとつて當然翹望の的となつた。幾百となき逃亡者は旅券なき浮浪人として、警察のためにそれぞれ村につれ戻され、そこでミール組合員によつて見せしめのために笞打された。しかしながら夜陰に乗じて「村落共産主義の地獄」から都市に逃れ、工業プロレタリアートの大海の中に決定的に身を沈めようとする農民の集團的逃亡に對しては、笞も旅券の強制も無力であることを示した。家族の足枷やその他の事情のために逃亡に對してはしどろろできない人々は、合法的な方法でミール組合からの脱退を實行しようといふところがある。そこには土地買戻負債の皆済が必要だつた、そしてその難儀を救つてくれたものは——高利貸で

あつた。租税の重荷のためにも、納税のために否應なしに穀物を最悪の條件で賣却しなければならぬためにも、ロシア農民は非常に早くから高利貸の手に引渡されてゐた。逼迫する毎に、凶作の度毎に、矢張りまた勢ひ高利貸に走ることを餘儀なくされた。そして最後に村の束縛から脱却するといふそのことも、大多數の農民にとつては、高利貸の束縛の中に身を委せて、これから先き日宛てのつかぬ期間を高利貸のために服役し、貢物の奴隷となるといふ方法による外には、實現することができなかつたのである。このように、貧農が困窮から脱するために、ミール組合から離れようとつとめたと同時に、他面においては、富農は貧農の納税に對する厄介な連帶責任を避けるために、屢々彼れ等に背を向けて脱退して行つた。しかし富農の正式の脱退が起らぬ場合でも、富農は大部分同時に村の高利貸を構成してゐた——またミール集會においては貧農大衆に對して支配的權力を構成してゐて、負債を負ひ隷屬してゐる多數が決議を可決しても、これを暴壓することができたのである。かくて形式上は平等と共有とに立脚してゐる村落共同體の胎内に、小數ではあるが勢力のある農村ブルジョアジーと、隷屬的な、そして事實上プロレタリア化してゐるところの農民大衆との、明瞭な階級區分が形づくられた。

租税の重荷に息の根をとめられ、高利貸に併呑され、内部的に分裂せる村落共同體の内部的衰亡は、最後に外部に向つて鬱氣を散ずるに至つた。飢餓と農民一揆とは、八〇年代のロシアに週期的現象となり、ロシア内地諸縣を容赦なく見舞つたが、同時に租税執行官と軍隊も矢張りこれと劣らず容赦なく、農村の「鎮定」のために一揆を追求した。ロシアの農圃は廣大な地域に互つ

て、飢餓と血腥き暴動との前に懐愴極まる斃死の舞臺となつた。ロシアの百姓はインドの農民の運動を聞き、こゝでのオリッサに當るものは、サラトフ、サマラ、それから遠くヴォルガの下流にも及んだ。最後に一九〇四年と一九〇五年とに、都市プロレタリアートの革命がロシアに勃發したときには、それまでは混沌状態だつた農民暴動が、今や初めて政治的要因として、その全體の重力を以て革命の秤盤に乗り、農村問題が革命の中心點となつた。かくて農民は抵抗すべからざる奔流の如く貴族領地に流れ込み、土地を返せといふ叫びを以て「貴族の巢」を火焰の中に焼きつくしたとき、そして労働者黨が國有地と大地主所有地とを無償で收奪して農民に引渡せといふ革命的要求の中に農民の窮迫を約示したとき、ツァール政府は遂に幾百年の間鐵の如き操守を以て行つてきた農村政策から手を引くに至つた。ミール組合はもはや没落を喰ひ止めることができず、廢棄されなければならなくなつた。すでに一九〇二年に、ロシア特殊の姿を取つた村落共同體の根幹そのものに斧鉞が加へられてゐた。即ち租税に對する連帶責任が廢止されてゐた。しかしながらこの處置は、ツァール政府自身の財政政策に確實な用意があつて行はれたのである。國庫が直接税における連帶責任を容易に斷念することができたのは、間接税が非常な高度に達したのを見たからであつて、たとへば一九〇六年の豫算において二〇三〇百萬ルーブルの普通歳入總額のうち、直接税からの収入は僅か一四八百萬ルーブルだつたのに、間接税からの収入は一〇〇百萬ルーブルであつて、そのうち五五八百萬ルーブルは、飲酒癮打破のために「自由主義」大臣ウィッテによつて實施された火酒專賣からだけの収入であつた。この税を几帳面に納付する

ためには、農民大衆の貧窮と、絶望状態と無知とが、最も信憑すべき連帶責任を負つたのである。一九〇五年および一九〇六年には土地買戻負債の殘額が半減され、一九〇七年には全部帳消しされた。そして今や一九〇七年に實施された「農村改革」は、小農的私有財産の創設を公然と目標にかゝげるに至つた。そのための手段としては、國有地、御料地、および部分的には大地主所有地の分割を以てするといふにあつた。かくて二十世紀のプロレタリア革命そのものが、その未完成的な最初の階段において、すでに農奴制度と、ツァール政府によつて人為的に保存されてゐたミール組合との最後の遺物を、同時に一掃してしまつたのである。

二

ロシアの村落共同體と共に、原始的農業共產主義の變遷極まりなき運命は終りを告げ、大團圓を告げた。社會發展の自然發生的產物として、經濟的進歩、社會の物質的および精神的發達の最上の保證物として始まり、今やこゝに土地共同組合は政治的および經濟的時代おくれの濫用的道具として終焉を告げる。ツァール專制主義に奉仕するために、同じ仲間の組合員によつて皆で折檻されるロシアの農民、これこそは實に原始共產主義の限界の狹隘さに對する最も冷酷なる歴史的批判であり、またこゝにいふ社會形態も矢張り理性が不條理となり、幸が災となるといふ辯證的定則に支配されるといふ事實の、最も明瞭な現はれである。

種々の國および大陸におけるマルク組合の運命を仔細に觀察するときは、就中二つの事實が眼

前に現はれてくる。原始共産主義經濟制度のこの最高にして最後の形態は、動きのつかぬ千遍一律の型物でないばかりか、何よりもまづ無限の多様性、弾力性、順應性を示すものであつて、歴史的環境に應じてありとあらゆる形態をとつて現はれる。この場合それはあらゆる環境とあらゆる事情の下において、或る一つの黙々たる轉化過程を閉みするものであつて、この過程は緩漫に行はれる結果、最初は外部に向つては姿を現はさなくとも、しかも社會の内部においては絶えず古びた形態に代ふるに新しい形態を以てし、かくて本國または外國の國家制度のあらゆる政治的・上部構造の下に、經濟的および社會的生活において、不斷に發生と消滅、發展または衰亡を閉みするのである。

同時にこの社會形態は、その伸縮性と順應性とおかげで、異常な粘り強さと耐久性とを示してゐる。それは政治的歴史のあらゆる暴風に抵抗する。否むしろこれを受け身で持ち耐え、自分の頭上を通過させ、あらゆる侵略、外人支配、專制、搾取の壓迫を幾世紀の長きに互つてちつと耐えてきたのである。しかしたゞ一つの接觸だけは持ち耐えない。即ちそれはヨーロッパ文明、即ち資本主義との接觸である。古い社會にとつてはこの資本主義との衝突は、いづれの場合も例外なしに致命的なものであつて、それは幾世紀の星霜も、最も兇猛なる東洋の侵略者も能くしなかつたものを成就する。即ち全社會的構造を内部的に解體させ、すべての傳統的紐帶を切り離し、社會を最も短い期間に一つの滅茶々々な廢墟と化するといふ仕事である。

しかしながらヨーロッパ資本主義の死の息吹きは、原始的社會の没落を遅かれ早かれ奈何とも

できぬようにする唯一の要因ではなく、單に最後の要因たるにすぎぬ。その没落の胚芽はこの社會そのもの、内部に存してゐるのである。いろいろの實例によつて學んだような、原始的社會の没落の種々の方法を綜括すれば、或る歴史的順序が出てくる。生産手段の共産主義的所有は、嚴格に編成された經濟方法の基礎として、長い時期に互つて社會の最も生産的な勞働過程を保護し、社會の存續と發達との最上の物質的保證となつてゐた。しかし取りも直さずそれによつて保證されたところの勞働生産性の緩漫ながらの進歩が、時を経るにつれて共産主義組織と或る種の衝突を起さなければならぬ羽目となつた。この共産主義組織の胎内において、高級農業——犁嘴の使用——への重大な進歩が行はれて、マルク組合がこの基礎の上にその鞏固な形態を維持するに至つた以後、生産技術の發展における一層の進歩が、或る期間後において一層集約的な耕作を必要たらしめねばならなかつた。そしてこの集約的耕作はといへば、その當時の農業技術の段階においては、一層集約的な小經營によつてのみ、即ち人身的勞働力を土地と一層鞏固に、一層徹底的に結合することによつてのみ到達され得たのである。同じ一つの割地を個々の農家によつて一層長く利用することが、それを細心に取扱ふための前提條件となつた。特に土地の施肥は、ドイツにおいてもロシアにおいても、符節を合したように土地の割替が稀れになつた原因である。一般には何處でも一樣に、マルク組合の生活の中に割替の期間が段々長くなる特徴を認め得るのであつて、これはいたるところに割地所有から世襲所有への推移を遅かれ早かれ結果するものである。共有から私有への移動が勞働の集約と歩調を揃へると同じく、吾々は次ぎの事實を究めることが

できる。即ち森林および牧場經濟はどの場合でも一番長く共用地を附帶するに反して、集約的に營まれる農業はまづ最初に共有地分割に道を開き、ついで世襲所有に道を開くといふ事實である。なるほど割地の私有が確立したからといつて、共同經濟組織はまだ除去されるものでなく、農場交叉によつてなほ久しく維持され、林地および牧地の共有によつて強要される。それにまた經濟的および社會的均衡も、それと共に舊社會の胎内においてまだ除去されはしない。まづ最初には生活條件を等しうする小農の集團が形成されるだけである。そしてこの小農は一般には數百年の間に互つて、古い傳統に従つて勞働し生活することが出来るものである。それにも拘らず既に土地財産の世襲と、それに伴ふ相續分または長子相續權によつて、次いで特に農民所有地が賣買され、一般に讓渡され得るようになったことによつて、將來の不平等に對して既に門戸が開かれてゐるのである。

とはいへ右の如き過程を以てする傳統的社會組織の顛覆は、極めて遅々として進むものである。然るに茲になほ別の歴史的要因がはたらいてゐて、遙かに急速に且つ徹底的に右の仕事を行つてゐる。即ちそれは、狹隘な限界内におけるマルク組合ではその性質上果せないところの、一層總括的な公的任務である。吾々は東洋において人工的灌溉が農業に對して、如何なる決定的意義を有してゐるかをすで見つた。こゝにいふ勞働の集約とその生産性の力強い向上とは、たとへば西洋において施肥に移つて行つたとは全然別個の遠大な結果を誘致した。人工灌溉の實施は當初から大規模なる集團的勞働を、大經營を、計算に入れてゐる。まさにそゝいふ性質のものであるから、

人工灌溉はマルク組合組織の胎内に何等それに適應する機關を見出すことはできず、マルク組合の上に位する特殊の機關をつくり出さなければならぬ。吾々は公的給水の管理が、僧侶支配とあらゆる東洋的君主支配との最深の根帶であつたことを知る。しかしながら西洋にもその他何處にも種々の公的仕事が存在してゐて、今日の國家組織と比較すれば簡單なものではあるが、如何なる原始的社會においても處理されなければならぬものがある。そしてこの仕事はその社會の進歩發達と共に増大し、従つてまた時が経つにつれて特殊の機關を必要としてくる。かくて吾々はいたるところに——ドイツにおいてもペルーにおいても、インドにおいてもアルゼリアにおいても——原始的社會における公職が選舉から世襲に移る傾向を有することを以て、發達の特徴と定めることができた。

まづ最初、徐々且つ目に見えぬように行はれるこの變遷は、矢張りそれだけではまだ共產主義社會の基礎との斷絶ではない。むしろ公職の世襲は自然の道を辿つて生れるのであつて、矢張りこの場合も原始的社會の本質におけると同じく、傳統と人身的經驗の蒐集とが、職務の遂行を最もよく保證するといふ事情から生ずるものである。それにも拘らず、一定の家族が公職を世襲するといふことは、時が経つにつれて必然的に小さな土着的貴族の形成を誘致するようになり、この貴族は共產體の僕べからその支配者となる。殊に不分割マルク共有地やローマの「アーゲル・ブブリクス」(貴族共有地)——それには自然に公權力が直接に附隨する——は、この貴族といふ身分の擡頭の經濟的基礎たるはたらきをした。分割されざる、または使用されざるマルク共有地

の倭取は、農民大衆の上に成り上つてこれを政治的に束縛するすべての國內および外國の支配者の常則的方法である。これが文化の大道から離れた民族の場合なら、原始的貴族はその全生活様式において大衆と殆んど差別がないのであつて、生産過程にまだ直接に参加してをり、風俗慣行の或る程度の民主的單純さが、財産の差別を胡魔化してゐるかも知れぬ。たとへばヤクト人の民族的貴族は、一般大衆に比して家畜の頭数をヨリ多く所有し、公的仕事にヨリ多く勢力があるにすぎぬ。ところが高級な文明民族と接觸して、活潑に交易するようになる、忽ち精練された生活欲望と勞働習慣の拋棄とが、貴族の從來の特權に加はり、現實上の身分的分化が社會に行はれるようになる。その典型的な圖景はホーマー以後の時代のギリシャである。

かくて原始的社會の胎内における分業は、早晚必然的に政治的および經濟的平等を内部から破壊するようになる。しかるに公的性質の或る一つの仕事は、この過程の中に極めて著しい役割をつとめ、平和的性質の公職に比して、はるかに精力的に右の仕事成就する。即ちそれは戰役である。最初には社會の一般大衆自身の仕事だつたのが、生産の進歩の結果、時を経るにつれて、原始的社會の或る一定範圍の専門となる。社會の勞働過程が發達し、規則的に且つ計劃的になればなるほど、戰爭生活の不規則性と、時間および勢力の浪費とに耐えられなくなる。狩獵や移動的牧畜の場合には、戰爭が折々經濟制度の直接の成果となつてゐるのに引きかへ、農業は社會の大衆の平和性および受動性を伴つてゐるものであるが、しかも取りも直さずその故に往々防衛のため武人といふ特別の身分を必要とするのである。いづれにもせよ戰爭生活——それ自身は勞働

生産性が狭く局限されてゐる事實の現はれに外ならぬもの——は、すべての原始的民族の間に大きな役割をつとめ、時が經つにつれて何處にも或る一つの新たな種類の分業を誘致する。武人貴族または戰爭酋長の分離は、いたるところにおいて原始的社會の社會的平等に對して加へられる最も力強い衝撃である。そういふわけで、吾々が今まで知つてゐる歴史的に傳はつた原始的社會または現存してゐる原始的社會のどれを見ても、モルガンがイロクオイ族といふ僥倖なる實例を以て描き出すことのできたような、民族の自由平等なる諸關係は、もはや殆んど何處にも見出すことができないのである。反對に、いたるところに不平等と搾取、——これが長い崩壊史の產物として吾々の前に現はれるところの、すべての原始的社會の特徴なのであつて、東洋の支配的世襲的身分の場合であらうと、ヤクト族の民族的貴族の場合であらうと、スコットランド・ケルト族の「大氏族民」であらうと、ギリシャ人、ローマ人、民族移動時代のゲルマン人の武人貴族であらうと、または最後にアフリカ黒人國の小專制君主の場合であらうと、この事情に變りはないのである。

たとへばルンダ國の東部、中央アフリカにおける有名なムアタ・カゼンベの邦國——十九世紀初にポルトガル人が侵入したところの——を観るときは、吾々はこのアフリカの心臓、殆んどヨーロッパ人と接觸しない一地域においてすら、各員の自由と平等との跡をあまり見出し得ない社會關係が、原始的黒人の間に成立つてゐるのを見る。たとへば一八三一年にザンベジから奥地の方へ、通商および探險の目的で企てられたモンテイロ少佐とガミット大尉との遠征は、次ぎの

事情を吾々に叙べてゐる。まづ最初に遠征隊はマラヴィ國に入つた。マラヴィ族は原始的な耨耕を営み、圓錐形小屋に住み、腰部に一つの布を巻いてゐるだけであつた。モンテイロとガミットとがマラヴィ國を旅行した時代には、この國は「ノーデ」といふ稱號をもつた一人の專制的酋長の下にあつた。すべての争ひ事はこの酋長によつて、その首都ムチエンダにおいて決定され、この決定に對しては何人と雖も抗議することを許されなかつた。形式上は酋長は長老の相談會を招集するのだが、長老はいつでも酋長と同じ見解を持してゐなければならぬ。國は州に分れ、州は「マンボー」によつて統治され、これがまた區に分れ、區は「フノー」の支配下におかれてゐる。すべてこれらの職は世襲である。——八月八日、チェワ族の最も有力な酋長ムカンダの住まひに到着した。種々の木綿製品、紅巾、種々の眞珠、鹽、寶貝より成る贈物をしたら、翌日黒馬に乗つて天幕にやつてきた。ムカンダは六十から七十位の、氣もちのよい、凜々しい風采の男であつた。彼れの唯一の衣服は汚ないぼろ布で、それを腰に巻きつけてゐた。約二時間の間そこにあつた。別れ際になつて親し氣に、否とは言へぬように各人に贈物をせびつた。——チェワ族における酋長の葬式は極度に野蠻な儀式を伴ふ。死んだ酋長のすべての妻女は死骸と一緒に同じ柩の中に入れられ、埋葬の用意が萬事整ふ。それから葬列が墳墓を指して進み、そこに着くと死者の寵妻と他の七人の妻女とは墓穴の中に下りて、手脚をひろげて伏す。そこでこの生ける礎を布で包み、その上に屍を置き、それから今度は、前以て咽喉を切られてゐるもう六人の妻女を墓穴の中に落す。そこで墓に蓋をして、次に二人の少年を人柱に立て、一人は太鼓をもつて墓の絶頂に据ゑ

られ、一人は弓矢をかゝえて墓の脚下に据ゑられ、それでこの恐るべき儀式が済む。モンテイロ少佐はチェワ國に滞留中にこういふ葬式を目撃したのである。——こゝから山上へマラヴィ國の中心に入り込んだ。ポルトガル人一行は、生活資料が殆んど完全に無い荒涼たる高原の一地方に入つた。どこを見ても以前の戦役によつて荒らされた跡が見え、飢餓が一刻も猶豫できぬまでに行方を脅やかした。案内者を得るため一番近くの「マンボー」に向けて、若干の贈物を持たせて使ひを遣つたが、使ひの者は「マンボー」が家族と一緒に、餓死せんばかりになつて、全村にたつた一人だけ残つてゐるのに會つたといふ絶望的な報道をもつて歸つてきた。——マラヴィ國の心臟に近づく前に、まづその地では日常の事となつてゐた野蠻な司法の取調べを受けた。幾多の若者が何か瑣細な過失のために、刑罰として耳や手や鼻やその他四肢を切られたのに出會ふことが珍らしくはなかつた。——十一月十九日、遂に首都への乗込みに成功し、その際ガミット大尉が乗つてゐた騾馬は少からず人々をびつくりさせた。間もなく約四分の三時間行程の街路に到達した。この街路の兩側は二—三メートルの高さの牆で仕切られ、この牆は枝を編み込んだものであつて、規則正しく編まれてゐるために壁のように見えた。兩側には或る間隔を置いて、この牆壁の中に小さな開き戸が見えた。街路の終端には小さな四角のブラックがあり、それは西方にだけ開いてゐて、その中の木造の床の上には無細工な木彫の七〇センチメートルの高さの人像が置かれてゐる。開いてゐる側の前には三百以上の頭蓋骨のひと山が積んであつた。こゝで街路は大きな方形の場所となり、その端に大きな森林があつて、廣場とたゞ一つの牆で仕切られてゐ

るだけであつた。この塔の外面や門の兩側には、三十ばかりの頭蓋骨が一行に並べられて、裝飾とされてゐる。——さて今度は國主ムアタへの謁見となり、國主はあらゆる野蠻な裝飾物によつて圍はれ、五六千人より成る全軍隊を四圍に従へてポルトガル人一行を引見した。彼れは豹や獅子の皮を山と積んだ上に、緑の布で包んだ椅子を据ゑたのに腰かけた。彼れの頭被は〇・五メートルの長さの羽毛を集めてつくつた、猩々緋の圓錐形の帽子でできてゐた。額には燦爛たる石を以て成る飾帶を巻き、頸と肩のまはりには、螺旋や四角の鏡様のものや鑲造寶石などから成る一種の肩掛を帯び、兩方の腕には毛皮で縁取りした蒼色の布でできた幅の廣い腕章を巻きつけ、その外に上腕は蒼色の石で作つた環で飾り、下腰部は赤青で縁取つた黄いろの布を纏ひ、これに一本の帯を巻きつけてゐる。七つの様々な日覆ひで太陽をよけて、傲然として國王は坐についた。王は笏として角馬の尾を手に振り、帯をもつた十二人の黒人は國王の神聖なる身邊から、あらゆる塵、あらゆる不淨物を取りのけるためにいそしんでゐた。支配者のまはりには非常に複雑な宮廷儀式が展開された。まづ第一に獸角を以て飾つた黒人の上半身を象つた四〇センチメートルの高さの二列の像が玉座を守護し、その像の間に二人の黒人が坐して炭盤に香葉を焚く。名譽の座には二人の首妻が即き、そのうちの一人はムアタと同様な服装をしてゐる。背後には四百人の婦人を以て成る宮妾が列し、しかもこれらの貴婦人は腰覆を除けば全身裸體である。その外になほ二百人の黒色の婦人が命を待つて立ち列んでゐる。婦人によつて形づくられた方形の内部には、王國の最高の位官たる「キコロ」が獅子と豹の皮の上に坐し、その各々が日覆ひを上にしてムア

タと同様な服装をしてゐる。その外に一種獨特の嗜好をした樂器で、耳を聳するばかりの騒音を發する種々の音樂隊があり、毛皮と獸角で身を裝つて、あちこち走り廻つてゐる若干の宮廷戲化師があつて、王の周圍が一切とゞのひ、王はこゝろいふ風に威儀をとゞのへてポルトガル人一行の進行を待つた。ムアタはこの國民に對する絶對の支配者であつて、ムアタといふ稱號は單に主君を意味するだけである。ムアタの次ぎに位するものは第一に「キコロ」即ち貴族であつて、これがまた二つの階級に分れる。貴族の首班に列するものは、皇太子、ムアタの最近親者、並びに軍事機關の最高司令官である。しかしこゝろいふ貴族の生命および財産すらも、ムアタは無制限に左右してゐるのである。この暴君が不機嫌な場合には、たとへば一つの命令をよく分からずに聞きかへす者があれば、「よく聞くことを教へてやるため」即座にその人間の耳を切り落させてしまふ。王の財産を一寸でも盜めば、耳と手を切り落され、王の妻女のうちの何人とも會つたり話したりする者は、殺されるか、手足を切り落されるかする。王は迷信的な人民の間に極度の尊崇を受け、人民は王に觸れた者は王の魔術で死ぬと信じてゐる。ところがこゝろいふ接觸は必ずしもつねに避けるわけに行かぬので、人民は魔術にかゝつて死ぬことを防ぐ手段を案出した。即ち主君に觸れた者はその前にひれ伏すと、王は自分の掌を神祕的な身振りで、平伏せる人間の掌の上に置き、それで以て死の魔術を解いてやる。*

* 『スタンレイおよびキヤメロン、アフリカ横断紀行』。ライプチヒ、オットー・シュネバーメル出版、一八七九年刊 第六八頁

これがあらゆる原始共同體の本源的な基礎から、即ち平等と民主主義とから、著しく外れてゐる一社會の圖景である。この場合この政治的專制主義の形態の下に、マルク組合的關係、土地の共有、勞働の共同組織が存續してゐなかつたとは、もちろん斷定さるべきではない。このポルトガル人は服裝や謁見の外面的光景には極めて精密に注意を拂つたにも拘らず、すべてのヨーロッパ人と同じく、經濟關係、殊にヨーロッパ流の私有制度に反するものには、何等視線を向けず、何等の興味も、何等の判斷の標準をも有してゐなかつたのである。しかしいづれにもせよ原始的社會の社會的不平等の專制は、文明社會に行はれてゐるところの、そして文明社會から初めて原始的社會に移植されたものとは本質的に異つてゐる。原始的貴族なる等級の擡頭、原始的酋長の專制的權力は、爾餘のすべての生活條件と同じく社會の自然發生的產物である。これらのものは、周圍の自然界や自己の社會的關係に對する、社會の無援無力の状態が、別な形を取つて現はれたものに外ならぬ。そしてこの無援無力の状態は、矢張り同じく宗教的禮拜の魔術となつても現はれ、週期的に起る飢饉となつても現はれるものであつて、後者の場合には、專制的酋長はその臣下の大衆と一緒に半ば餓死し、乃至は全然餓死するのである。従つてこの貴族支配または酋長支配は、社會の爾餘の物質的および精神的な生活形態と完全に調和してゐるものであつて、この事情は、原始的支配者の政治的權力が、つねに原始的自然宗教と、死者に對する禮拜と密接に纏れ合つてをり、そつといふ自然宗教によつて支へられてゐるといふ、特色ある事實の中にも窺ふことができる。こつといふ見地からすれば、十四人の妻女を生きながらに墓穴に伴つてゆくチュワ族の酋

長も、自分で萬能の魔術者であることを信じ、且つその人民からも固く信ぜられてゐるが故に、その計るべからざる機嫌次第で臣下の生死を左右してゐる國王ムアマタ・カゼンベも、或はまたそれから四十年後に、婦人服を着て猿の皮を身にまとひ、汚ないハンケチを頭に巻きつけ、二人の裸の娘と一緒に、貴族や人民の中にあつて、イギリス人キャメロンの歡迎のために威風堂々として跳ねダンスを踊つて見せたところの、ロマミ河邊の專制的「カゾンゴ侯」も——義理にも魔術者であるとは言へない一人の人間が、カント、ヘルムホルツ、ゲーテを生んだ一民族の六千七百萬人の人間に對して行つてゐる「神權政治」と較べれば、——馬鹿々々しい氣狂じみた程度の遙かに少ない現象だと言はねばならぬ。

原始共產社會はそれ自身の内的發展によつて、不平等と專制との形成を誘致する。しかしながら原始共產社會はそこで滅びるものでなく、むしろ數千年に亙つてこつといふ原生的關係の下に存續することを得るのである。しかし普通にはこつといふ社會は、早晚外人からの侵略の餌食となり、そこで多かれ少かれ手廣い社會的改造を蒙る。特にこの場合回教徒外人支配は歴史的に重大なものである。こつといふのはこの支配は、アジアおよびアフリカの廣大なる地域に亙つて、ヨーロッパ外人支配に先立つて行はれてゐたからである。回教徒遊牧民族——モンゴリア民族でもアラビア民族でも——が、征服國にその外人支配を樹立し且つ固めた場合は、ヘンリー・メーンおよびマキシム・コヴァレフスキイが國土の封建化と呼んでゐるところの、或る社會的過程がいたるところに始まる。征服者は土地を自分の所有にすることはせずに、二つの目標に注意を向けた。

即ち公課を徴収すること、その國の支配を軍事的に固めることである。そしてこの兩目的のためには、或る一定の行政的軍事的組織が役立つ。即ち國を幾多の管劃區に分け、收税者にして同時に軍事行政者たる回教徒官吏をこれに封ずる組織である。それにまた未耕共同地の大部分が、軍隊屯營地の創立に宛てられた。これらの制度は回教の弘布と共に、たしかに原始的社會の一般的存立條件に深甚なる變革を行つた。しかしその社會の經濟的條件は、それによつて僅かしか變化されなかつた。生産の基礎および組織は、依然として元のまゝであつて、——搾取と軍事的壓迫とも拘らず——幾世紀の長きに亘つて存続したのである。尤も回教徒の支配は、土人の生活條件に對して、どこでもそう思慮深かつたわけではない。たとへばアラビ人はアフリカ東岸で、ザンジバル領から一世紀に亘つて大規模な黒人奴隸貿易を営み、その結果アフリカ内地における正式の奴隸狩りを誘致し、黒人村落全體の人口絶滅と破壊とを誘致し、土人酋長の專制的權力の増大を誘致し、そして酋長は自分の臣下や征服せる近隣の種族をアラビ人に賣ることに、誘惑的な仕事を見出した。しかもアフリカ社會の運命にとつて、こゝろいふ根本的な事情の變化も、矢張りヨーロッパ的影響の結果として初めて行はれたのであつて、黒人奴隸貿易は、十六世紀におけるヨーロッパ人の諸大陸の發見および侵略後、ヨーロッパ人によつて搾取されたアメリカおよびアジアの栽培地や鑛山に役立てるために、初めて隆盛となつたものである。

このようにあらゆる點において、ヨーロッパ文明の侵入が初めて原始的社會關係にとつて呪はしい運命をもたらすのである。ヨーロッパ人征服者こそは土人を壓迫し、經濟的に搾取するだけ

にとゞまらず、生産手段そのもの、土地を上人の手から強奪する最初の征服者である。これによつてヨーロッパ資本主義は、原始的社會秩序からその土臺を取り去るのである。あらゆる壓迫および搾取よりも、もつと悪いもの、完全な無秩序と、ヨーロッパの特殊現象たる社會的存在の不安定とが発生する。生産手段から引離された被征服人口は、ヨーロッパ資本主義からは只勞働力と見做され、そして勞働力として資本の目的のために役立つ場合は奴隸にされ、役立たぬ場合は剿滅される。吾々はこゝろいふ方法をスペインや、イギリスや、フランスの植民地に見てきたのであつて、資本主義の前進の前には、これまで幾多の歴史的段階を通過して存続してきた原始的社會秩序も屈服する。そしてこの社會の最後の遺物は大地に併呑され、この社會の要素——勞働力と生産手段——は資本主義のために吸収され終る。かくて原始共產社會はいたるところにおいて——結局は經濟的進歩に追越されたために——崩壊して、新しい發展の展望に座をゆづるのである。この發展とこの進歩とは、久しい期間に亘つて、階級社會の賤しむべき方法によつて代表されねばならぬ運命にあるが、これもやがては追越されて、ヨリ一層の進歩によつて排除されてしまふであらう。強力は矢張りこゝでも經濟的發展の單なるに従僕にすぎぬ。

第四章 商品生産

吾々に課せられた任務は、社會といふものは共同労働なくしては、言ひかへれば計劃と組織とを有する労働なくしては存立し得ないといふことを證明することである。吾々はまたすべての時代にかゝる共同労働の種々様々な形式があることを發見した。しかるに今日の社會においては實に何等かゝる形式を見出し得ない。支配もなければ法則も、民主主義もなく、計劃と組織の痕跡だになく、そこにあるものは——無秩序である。しからは如何にして資本主義社會の存立が可能だらうか？

資本主義のバベルの塔の構造を調べるために、まづ暫らくの間、労働の計劃的組織を有する一つの社會をこゝに再び思ひ浮べて見よう。この社會は高度に發達した分業を伴つた社會であつて、こゝでは農業と工業とが分れてゐるばかりでなく、兩部門の内部においても各々特殊の分科が、労働する人々の特殊群の専門となつてゐるとしよう。だからこの社會には、農夫も木樵も、漁夫も植木師も、靴工も仕立工も、錠前工も、鍛冶工も、紡工も織工も、その他いろいろ存在してゐる。故にこの社會は全體として見て、あらゆる種類の労働、あらゆる種類の生産物を供給せられ

てゐる。そしてこれらの生産物は、その量の多いと少ないとを問はず社會の全成員の手に入る。けだしこの場合労働は共同のものであつて、何等かの權力——政府の專制的法律であると、農奴制度であると、或ひはまた何等かの他の形態の組織であるとを問はず——によつて、前以て計劃的に分たれ、且つ組織されてゐるからである。だが簡單を期して、この社會は吾々がすでにインドの例に見てきたような、共有財産を伴つた共產體であると想像しよう。そして暫らくこの共產體内部の分業は、歴史上の實際に照應するよりもづつと盛んであると假定し、そしてその成員の一部は農業にばかり従事し、他の各種類の労働は特殊の手工業者によつて行はれると見做さう。この共同體の經濟は吾々にとつて全く明瞭である。即ち共同體の成員全體が、すべての土地、すべての生産手段を共有してゐるのであつて、何を、何時、どれだけ生産すべきかは矢張り成員全體の共同意志によつて決定されるのである。ところでまた出來上つた生産物の集團も、矢張り悉く全員に屬するのであるから、従つて必要の割合に應じて全員の間に分配される。ところが今度、こゝにいふ性質の共同體に、ある朝突然共有制度の存立が止み、それと共に共同労働も、生産を規定する共同意志も無くなつたと想像しよう。一旦その發展が高度の域に達した分業が、この場合依然として残つてゐることは言ふまでもない。靴工は依然として自分の靴型の前に坐し、パン焼職人は自分の焼籠より外何も持つてゐないし、それ以外のことは分らず、また鍛冶工は金床を持つてゐるだけで、ハンマーを振ることしか知らないといふ風である。ところがこれまですべてこれらの特殊労働を結合して、一つの共同労働たらしめ、社會的經濟たらしめてきたところの

鎖が絶ち切れてしまった。今や農夫も靴工も、パン焼職人も錠前工も織工も、その他の者も皆それぞれ獨り立ちとなつた。各人は完全に自由獨立の人間となつたのである。共同體はもはや彼れに向つて言ふべきことがなくなつたし、何人も彼れに向つて全體のために勞働せよと命ずることはできないし、それかといつて何人も彼れの欲望についてかれこれ言はない。全一體をなしてゐた共同體は、恰かも一つの鏡がこはれて無數の破片になつたように個々の分子に、個々の小片に破碎した。各人は今や謂はゞ空中に飛散せる埃のように浮動し、その結果はどうなるかは知るべきのみである。さて一夜のうちにこんな激發の行はれた共同體は、どうなるであらうか？ 一人立ちにされた人々は、その翌朝どういふことを始めるだらうか？ 先づ第一に次ぎの一事は確かである。即ち彼れらはその翌朝何よりも先づ——勞働するだらう、これまでしてきたと同じように。何故なら勞働なくしては人類の欲望が充たされ得ない限りは、どんな人間社會でも勞働しなければならぬのだから。社會にどんな變革、どんな變化が行はれようと、勞働は一瞬間も休止することはできぬ。だから共產體の舊成員は、彼れ等の間をつなく紐帶を斷たれて、全く一人立ちにされてしまつた後にも、何よりもまづ勞働を續けてゆくに相違ない。しかも吾々は各勞働がすでに専門化されてゐるものと假定したのだから、各人は、すでに自分の専門となつてゐるところの、そしてその生産手段を自分が所有してゐるところの勞働のみを續けてゆくに相違ない——靴工は靴をつくるだらうし、パン焼職人はパンを焼き、織工は織物を仕上げ、農夫は穀物をつくるだらうし、その他各自の勞働を續けるだらう。ところがすぐさま次ぎの如き難點が生ずる。これらの

生産者各自はいかにも極めて重要缺くべからざる消費資料を拵らへてゐるのであつて、靴工でも、パン焼職人でも、鍛冶工でも、織工でも、専門家はいづれも昨日までは皆ひとしく尊重され、共同體の有用な成員だつたのであつて、彼れ等がなければ共同體はやつて行けなかつた。各々は全一體の中に重要な地位を占めてゐたのであつた。しかるに今は全一體はもはや存立せず、各人は一人立ちになつて存在してゐるのである。しかしながら誰れも自己の勞働の生産物だけによつて、自分だけで生活して行けるものではない。靴工は靴を食つてゆけないし、パン焼職人はパンだけで自分の欲望をすべて充たすことはできないし、農夫だつて穀物より外何も持つて居ないとしたら、穀倉がどんなにいっぱいになつてゐても飢や寒さを避けることはできない。各人はさまざまの欲望を有し、自分だけではそのうちの唯一つの欲望を充たし得るだけにすぎぬ。だから各人はすべて他人の生産物の一定量を必要とする。彼れ等は皆互に頼り合つてゐるのである。ところが吾々は各生産者の間にもはや何等の關係も紐帶もないことを知つてゐる。それなら如何にしてその事柄が運ばれるだらうか。靴工はパン焼職人からパンが欲しくて堪らない。しかし自分でそのパンを作る手段も持つてゐないし、それにまた靴工もパン焼職人も共に等しく自由獨立の人間なのだから、パンを供給せよとパン焼職人に強要することもできない。彼れがパン焼職人の勞働の成果を手に入れたと思ふなら、それは交互關係に立つてのみ、即ち彼れの方からもパン焼職人に有用な生産物を供給する場合にのみ行はれ得ることは明らかである。ところがパン焼職人も矢張り靴工の生産物を必要とし、そして靴工と丁度同じ状態にある。これで交互關係の根據が與

へられたのである。靴工はパン焼職人からパンを得るために彼れに靴を與へる。靴工とパン焼職人とはその生産物を交換する。そして今や兩者の欲望が充たされ得るのである。かくて分業が高度に發展をとげ、各生産者が互ひに全く獨立してをり、そして彼れ等の間に何等の組織も存しない場合、各種労働の生産物をすべての人々に行き渡らせる唯一の道は——交換であるといふことになる。靴工も、パン焼職人も、農夫も、紡工も、織工も、鍛冶工も——皆互ひにその生産物を交換し、かくして彼れ等のあらゆる方面の欲望を充たすのである。交換はこうして、分散し、孤立し、互ひに離れ／＼になつてゐる私的生産者の間に新しい紐帶を作り出したのであつて、労働と消費、崩壊した共同體の生活は再びやつて行けるようになる。何故なら交換が、皆互ひのために労働し得る可能性を共同體に再び與へたからである。言ひかへれば交換は社會的協力労働、社會的生產を、分散せる私的生產の形式の下においても可能ならしめたのである。

しかしこれこそ社會的協力労働の全然新しい一種獨特の方法であつて、吾々はこれを一層仔細に觀察しなければならぬ。各個人は今や獨力で労働し、自分自身の費用で、自分自身の意志、見積りに従つて生産する。彼れは今や生きるためには、自分が必要なだけでなく他人が必要な生産物を生産しなければならぬ。各人はこうして他人のために労働するのである。このことはそれ自身何等特別なことでも、新しいことでもない。共產體にあつても皆互ひのために労働した。しかし異なる點は、今は各人が自分の生産物を交換によつてのみ他人に渡し、そして他人の生産物を交換によつてのみ手に入れることができるといふ點である。故に今や各人は、自分の必要と

する生産物を得んがためには、交換しようとした生産物を、自分の労働によつて生産しなければならぬ。靴工は絶えず靴を生産しなければならぬ。その靴は彼れ自身は全く必要としないものであつて、彼れにとつては全く無用であり無駄な労働である。彼れにとつて靴は、自分の必要とする他人の生産物と交換し得るといふ効用と目的を持つてゐるだけである。そこで彼れは前以つて靴を交換のために生産する。言ひかへれば彼れはそれを商品として生産するのである。今や各人は他人が必要とするところの、そしてこの目的のために自分自身の労働でこしらへたところの生産物をもつて臨む場合にのみ、自分の欲望を充たすことができる。即ち他人が拵へた生産物を得ることができる。言ひかへれば各人は自分の商品を携へて臨む場合に、すべての他人の生産物即ち社會的生產物に對する分け前に與かるのである。彼れ自身によつて交換のために仕上げられた生産物は、今や社會的總生産物の一部に對する請求權なのである。今では社會的生產物もは、や共產體の場合におけるような、舊來の形態を取つては存しない。共產體では社會的總生産物は、直接にそれだけの嵩、その全體のまゝで共產體の富となり、それからやがて初めて分配された。言ひかへれば共產體の費用で、共產體の指揮の下に、全員によつて共同に労働を加へられたのであつて、従つて生産された物は初めから社會的生產物としてこの世に現はれた。その次ぎに初めて各個人に對して共同生産物の分配が行はれ、それから初めて生産物が個々の團體員の私的消費に入り込んだ。ところがそれが今は逆に行はれてゐる。即ち各人は個々の私人として獨力で生産し、そして仕上つた生産物が交換によつて初めて合體して、社會的富と見做され得る總額を形成

するのである。社會的勞働に對する各人の分け前にしろ、社會的富に對する各人の分け前にしろ、今では各人が自分の勞働でつくり上げて他人と交換するために差出した特殊の商品によつて代表されてゐる。故に今では社會的協力勞働に對する各人の參與は、もはや前以て各人に割當てられた勞働の一定量を以つて表はされるのでなく、各人が自分の自由な見積りに従つて供給した既製生産物、商品で表はされる。そこで若し彼れが勞働しようとも思はないし、全然そうする必要もないときは、散歩に行つたつて、共產體の不從順な成員の場合のように誰れも彼れを叱りもしなければ罰しもしないであらう。共產體では怠け者はおそらく「首腦住民」即ち共產體の頭首によつてきびしく戒告せられるか、或はまた集會で公けの侮蔑に供せられた。しかるに今では、共同體が權威として存在してゐるのでなく、各人は何人にも拘束されぬ自分の自由な主人である。だが、彼れが勞働しないなら、交換によつて他人の勞働の生産物を少しでも手に入れることもできぬ。ところが他方においては、各個人がいくら懸命に働いても、必要な生活資料を手に入れるに至るかどうかは今日では全然不確かである。けだし何人と雖も、そういふ生活資料を——靴工の生産物と引きかへにすらも——靴工に與へることを強いられてはゐないからである。交換は相互的欲望が存する時にのみ生じてくる。共同體の内では一時靴が不用であるとしても、靴工は懸命に勞働し、立派な商品を仕上げて差支へないのだが、しかし何人も彼れから靴を求めてその代りにパンや肉等を與へることはしないだらうから、従つて彼れは依然として生活に最も必要なもの無しであることは元通りである。この點にもまた共同體における従前の共產的關係に比較して確然

たる區別が現はれてゐる。共同體が靴工を持つてゐたのは、共同體において一般に靴を必要としたからである。靴をどれだけ拵へたらよいかといふことは、共同體の役場が靴工に言つてくれたのであつて、靴工は謂はゞ單に共同體の召使として、共同體の役員として勞働した。そして靴工と限らず各人いづれもこれと同じ状態にあつた。ところで共同體が一人の靴工をかゝへてゐるとしたら、同時にまた共同體はこの靴工を養はなければならなかつたのは自明のことである。彼れは自分の分け前を他の各人と同じく共同の富から貰ふのであつて、彼れのこの分け前は勞働に對する彼れの持分とは何等直接の關係がなかつた。勿論彼れは勞働しなければならなかつたのだし、また彼れが養はれてゐたのは、勞働したから、そして彼れが共同體の有用な成員だつたからには相違なかつた。しかしながら彼れは今月靴を多く作つたと少なく作つたとに拘らず、時には全然作らなかつたにせよ、それでも自分の生活資料を、即ち共同體の資料の分け前を同じだけ得てゐたのである。しかるに今は彼れの勞働が必要とされた分量だけ、即ち彼れの生産物が交換によつて他人の手に入つた分量だけ、一々引き換へに入手するのみである。故に各人は一途に自分の欲する方法により、自分の欲するだけの分量で、自分の欲するものを作るのである。彼れが適當なもの、即ち社會が必要とするものを生産したといふこと、實際上に社會的に必要な勞働を行つたといふことを確認する唯一のものは、彼れの生産物が他人に受取られるといふ事實だけである。従つて如何に勤勉にして立派な勞働と雖も、必ずしもその悉くが前以つて社會的立場から見た目的および價值をもつてゐるのでなく、交換され得る生産物のみが價值をもつてゐるのであつて、

何人によつても交換されない生産物は、たとへそれが立派なものにせよ價値の無いものであり、浪費された労働である。

故に今は各人は社會的生產の成果に參與するためには、従つてまた社會的労働に參與するためには商品を生産しなければならぬ。しかし彼れの労働が實際上に社會的に必要な労働と認められてゐるといふことを誰れも言つて聞かせるのでなく、彼れは自分の商品が交換されてゐるといふこと、その商品が交換性を有してゐるといふことから、右の事實を経験するのである。故に社會全體の労働および生産物に對する彼れの分け前は、彼れの生産物に社會的必要労働の刻印、交換價値の刻印が捺されることによつてのみ保證される。若し彼れの生産物が交換され得ないで残つてゐるならば、その時は彼れは價値の無い生産物をつくつたのであり、彼れの労働は社會的に餘計なものだつたのである。そしてまたその時は彼れは、自分の暇つぶしのために革を切り、靴をでつち上げた私的靴工、謂はゞ社會の外に立つてゐる一個の私的靴工にすぎない。けだし社會は彼れの生産物について何等知らうともしないし、従つてまたそのために社會の生産物が彼れの手に渡らないからである。そこでこの靴工が今日幸運にもその靴を交換して、その代りとして生活資料を手に入れたとしたら、彼れは腹を充たし着物を着ることができらばかりでなく、意氣揚々と家に歸ることができる。即ち彼れは社會の有用な一員と認められ、彼れの労働が必要労働と認められたからである。ところが誰れも彼れから靴を買はうとしなかつたために靴を携へて戻つて來たとしたら、その時は彼れは憂鬱になる理由がある。けだし彼れはスニブなしでゐなければな

らず、同時にまたこのことによつて、冷やかな沈黙を以てゞはあるが、謂はゞ次ぎの如き宣告を受けなければならぬ。社會は君なんかいらぬのだ、君の労働はちつとも必要ではなかつたのだ、だから君は餘計な人間だ、安心して首をくくつて死んで差支へないと。故にこの靴工が社會へくつついてゐられるのは、たゞ一足の交換され得る靴、一般的に言へば交換價値をもつた商品のおかげに外ならぬ。ところがパン焼職人も織工も農夫も——誰れでも皆この靴工と全然同じ状態にあるのだ。靴工を認めたり、輕蔑して冷酷に突放したりするこの社會は、その實、相互に交換のために労働するこれらの個々の商品生産者の全部を合せたものにすぎない。従つて今こゝいふ風にして成立せる社會的労働および社會的生產物の總和は、以前の共產主義共同經濟の場合とは違つて、個々の成員のすべての労働および生産物の總和と少しも一致しない。何故なら今では誰れも彼れも熱心に労働したつて差支へないが、しかも交換するための買手が見つからなければ、その人間の生産物は無駄なものであり、一文にもならないからである。どんな労働とどんな生産物とが必要だつたか、従つてまた社會的に支拂はれるかといふことは、たゞ交換だけが決定するのである。謂はゞ各人すべてが初めにまづ自分の家で盲滅法に労働し、それから今度は仕上つた生産物が或る一つの場所に寄せ集められて、こゝで擇り分けられるようなものであつて、そこで初めて、これとこれは社會的必要労働だつた、だから交換に供される、あれとあれは必要労働ではなかつた、だから一文にもならぬといふ刻印が捺される。そしてこの刻印はこゝ告げるのである——これとこれは價値がある、あれとあれは價値がない、従つてそれは當事者の個人的な

満足或は災難に止まるものであると。

そこで色々な個々の事柄を總括するならば、他からの干渉または統制がない場合は、商品交換といふ單なる事實に依つて、次ぎの三つの重要な關係が規定されるといふ結果が生ずる。

一、社會的勞働に對する社會の各員の持分。この持分は、その種類も分量も、最早前以つて共同體から各人に割當てられるのではなくて、仕上つた生産物が受け入れられるか受け入れられないかで後から定まるのである。以前には、靴工がこしらへた靴は、直接に且つ前以て、製造中にすでに社會的勞働であつた。今は靴工のこしらへた靴は、最初は何人にも交渉のない私的勞働である。それから今度は交換市場で初めて擇り分けられ、そして交換に供せられた場合だけ、靴に費やされた靴工の勞働が社會的勞働と認められる。そうでない場合は、どこまでも私的勞働であり無價値である。

二、社會的富に對する各員の持分。以前には靴工は、共同體の中で仕上げられた生産物の分け前を分配の際に受けた。この分け前は次ぎの標準によつて計られる。第一に、一般的富裕状態、その場合の共同體の能力状態によつて。第二に、各員の欲望によつて。多人數の家族は少人數のものよりも多くを受けたのは當然である。ゲルマン種族が民族移動時代にヨーロッパへやつて来て、ローマ帝國の廢墟の上に居を定めた時に、この種族の間に占領した地所が分配された際には、矢張り家族の大きさが或る役割を演じた。八〇年代になつても所々で共有地の割替を行つてゐたロシアの共同體は、その際に人頭數、即ち各家族の「口」の數を考慮に入れてゐた。しかるに交

換が一般に行はれてゐる場合は、社會の各員の欲望と、富に對するその人間の持分との間の關係も、この持分と社會の總體的富の大きさとの間の關係も、いづれも消え失せてしまふ。今は各員によつて商品市場に持出された生産物だけが、それも社會的に必要なものとして交換される様になつた時だけ、社會的富に對する彼れの持分に對して標準となる。

三、最後に矢張り交換の機構そのものによつて社會的分業が規制される。以前にはいくらくの作男が必要だとか、又いくらくの靴工、パン焼職人、錠前工、鍛冶工が要るとかいふことは共同體が決めた。個々の職業の間の正しい割合を定めたり、すべて必要な勞働部門が運用されるかどうかを注意したりすることは、共同體とその選出された役員との役目となつてゐた。昔、或る村落の代表者が、死刑を宣告された錠前工は放免して、それよりも村に二人ある鍛冶工のうち一人を代りに絞殺せよと命じた有名な場合を、この共同體の役員もよく心得てゐる。これは共同體の内部に分業が正しく行はれるよう公けの配慮が行はれる顯著な例である。(其他、中世においてカロロ大帝がその料地のため手工業者の種類および數を規定したことはすでに述べた通りである。また中世の都市において、ギルドの規約は個々の職業が正しい割合で營まれるように配慮して作られ、缺けてゐる手工業者を他からその都市に連れて來た例もあつた。)しかるに自由且つ無制限の交換が行はれてゐる場合は、そつういふ事柄は交換そのものによつて調節されるのである。いま靴工に誰れも靴を誂へないとする。そこで靴工は自分がやらうと思へば石鹼玉や紙扇を製造しても差支ないし、また氣に入れば靴を造る代りに、織つたり、紡いだり、或ひはまた金細

工に従事したりしても差支ない。社會が一般に彼れといふものを必要としてゐるとか、特に靴工としての彼れを必要としてゐるとか、彼れに向つて告げる者は誰れもないのである。もちろん社會は一般的には製靴業を必要とする。しかし靴工が幾人あればこの欲望が充され得るかといふことを定めるものは誰れもないのである。故に特定の靴工が必要とされてゐるかどうか、或ひはかへつて織工や鍛冶工が不足してはゐるかといふことを、靴工に向つて話して聞かせる者はない。だが誰れも彼れにそのことを話して聞かせなくても、彼れは矢張りこれを商品市場において自分一人で經驗から知る。彼れの靴が交換されれば、社會が彼れを靴工として必要としてゐるのだといふことを知る。そして逆にも言へる。極上等の商品を拵へることができて、他の靴工によつて需要が充たされてしまへば、彼れの商品は無駄なのである。こんなことが繰り返へされれば、彼れは自分の職業を止めてしまはねばならぬ。必要數以上の靴工は、恰かも餘計な物が動物の體內から排出されると同じ機械的方法によつて社會から排除される。彼れの勞働は社會的勞働として受け入れられないのだから、そのために彼れは瀕死の状態におかれる。靴工をして、交換され得る生産物を、自己の生存條件として他人のために生産せしめるところの強制力は、結局落伍したこの靴工を驅つて、ヨリ強い需要が存在してゐても充分に充たされてゐない職業、たとへば織物業とか荷車製造業とかに赴かせるだらう。そしてこの職業において勞働力の不足額が充たされるのである。こゝにいふ具合にして職業間の正しい比例が維持されるのみならず、職業そのものが廢止されたり、新たに創立されたりする。社會における或る一つの欲望が止むとして

も、或は他の生産物でこれ迄通りに充たされるとしても、以前の共產體の場合と違つて社會の成員によつて確立されるのではなく、またそれに應じて勞働者が或る職業から引きぬかれて他の職業へ向けられるのではない。これは單に時代おくれとなつた生産物が交換され得なくなるといふ事實となつて表面に現はれるだけである。十七世紀には未だ鬻師はいかなる都市においても無くてはならぬ手工業を成してゐた。しかし風習が變つて鬻をつけないようになつた後には、この職業は單に鬻が賣れなくなつたといふことのために自然と滅びてしまつた。近代都市における運河開設と、各戸に機械的に給水する水道の設備の擴張と共に、水運びの職業、ウインでは水屋と言はれてゐる職業は段々消滅した。今度は逆の場合を見よう。こゝに一人の靴工があつて、自分の商品が組織的に社會から排斥されるために、自分は社會的に必要とされてゐないといふことを明瞭に感ずるに至つたとする。しかし彼れは教育があるので、それにも拘らず自分は人類の必要に欠くべからざる一人であると思つて、そして是非とも生きて行かうと思つてゐる。生きるためには吾々も知り、彼れも知つてゐるように商品を生産しなければならぬ。そこで今度彼れは全然新しい生産物、たとへば靴紐とか驚くべき靴墨とかを發明する。これによつて彼れは社會的に必要な新勞働部門を創設したのであらうか？ それとも多くの偉大なる發明の天才がそつであつたように、依然として認められずにゐるのだらうか？ 言つてくれる人間は矢張り誰れもないのであつて、彼れは商品市場においてのみこれを體驗するのである。彼れの新しい生産物が引き續いて交換されるなら、その時は新生産部門が社會的に必要なりと認められたのであり、社會的分業が

新たに擴張を見たのである。(木綿は十九世紀に麻を追ひのけた。)

かくてわが共同体に共產主義的統制、共有制度が崩壊し、經濟生活におけるあらゆる公權力、勞働におけるあらゆる組織および計劃、個々の成員間におけるあらゆる紐帯が消滅したとき、この大激變の翌朝には全く望みを失つたように見えたのが、次第々々に或る聯絡、或る秩序が、しかも全く機械的な方法で再び成立するに至つたのを諸君は見るであらう。個々の成員間に何等の了解もなく、何等高級の權力の干渉もなくして、今やバラバラな破片がどうにかこうにかくつついて全一體となつた。今は交換といふものが、謂はゞ一種のポンプ仕掛のように機械的な方法で全經濟を規制してゐる。即ち交換は個々の生産者間に紐帯をつくり、彼れ等を強制して勞働せしめ、彼れ等間の分業を規制し、彼れ等の富とその富の分配とを規定する。交換が社會を統治してゐるのである。いま吾々の眼の前に生じてゐるものは、いかにも奇妙な秩序である。今や社會は以前に共產體の制度の下にあつた時とは完全に異つて見える。當時は社會は堅固な全一體であり、その成員のすべてが互ひに混交し、しつかりと結び付いてゐたところの一種の大家族であり、また鞏固な有機體であつた。それどころか、骨ばつた、動きのない、硬化した有機體であつた。しかるに今は非常に弛い構造であつて、個々の成員がその中で瞬間毎に分離したり結合したりしてゐる。實際先きにも述べたように、靴工に向つて勞働しなくてはいけないとか、何をつくれとか、どれだけの分量を作れとか話してくれるものは誰れもない。それかといつて靴工に向つて、生活資料が要るかどうか、どんなものが要るか、いくら要るかと問ふ者もゐない。誰れも靴工の

ために心配しないし、靴工も社會のために存在してゐるのではない。彼れは自分の勞働の生産物を以つて商品市場に姿を現はすことに依つて、社會に自分の存在を告げるのである。彼れの存在は彼れの商品が受け容れられた場合に認められる。彼れの靴が交換される場合にのみ、彼れの勞働は社會にとつて必要になり、従つて彼れも勞働する一員として認められる。靴が商品として受取られる場合にのみ、彼れは社會の富の内から自分の生活資料を受けとる。だから一人としては彼れは社會の成員ではなく、同様に私的勞働としての彼れの勞働は、それだけではまだ社會的勞働ではないのである。彼れが社會の一員となるのは、交換され得る生産物、商品をこしらへる場合だけ、そしてその商品を所有してゐて手放すことができる場合だけである。靴が一足交換される毎に、それだけ彼れは社會の一員となり、賣れなければその都度社會から再び追ひ出される。故に靴工は、靴工として、人間としては社會と何等連絡を有するのではなく、彼れの靴が初めて彼れを社會に加盟せしめるのであつて、これとても靴が交換價值を有し、商品として賣られる場合のみである。故にこれは常時の加入ではなく、絶えず更新され、絶えず交代されるものである。しかしこれはこの靴工に限らず、あらゆる他の生産者もこれと同じ状態にある。そして社會には商品生産者以外には誰れもゐないのである。何故なら交換によつてのみ人々は生活資料を手に入れ、そしてこれを手に入れるためには、誰れでも商品を以つて臨まなければならぬからである。商品生産が生活條件である。かくてすべての人間が全く分離せる個人として單獨生活を営んでゐるところの或る社會状態が生ずる。これらの分離せる個人はお互ひのために存在してゐるのでな

く、單に各自の商品によつて絶えず社會全體に連絡したり、この連絡から排除されたりしてゐるのである。これは非常に弛やかで可動的な、且つ個々の分子の間斷なき渦卷の中にあるところの社會である。

かくて吾々は計劃的經濟の廢止と交換の實施とが、人間の社會的關係に全體的變化をもたらし、社會を頭の先から足の先まで變へてしまつたのを見る。

二

しかしながら社會の成員の間の唯一の經濟的連鎖としての交換は、大きな難點をもつてゐるのであつて、吾々がこれまで假定してきたように、直ちにそう圓滑に行はれるものではない。そこでこの事柄をもつと仔細に觀察しよう。

たゞ二人だけの生産者間の交換、即ち靴工とパン焼職人との間の交換を觀察してゐる間は事柄は全く簡單であつた。靴工は靴だけでは生きて行けないのでパンを必要とする。パン焼職人はすでに聖書に言はれてゐるように、パンのみにて生きることができないのだが、但し必要なのは神様の言葉ではなくて、この場合は靴が必要なのである。この場合は相ひ互ひがあるから交換はすらくと成立する。即ちパンはそれを必要としないパン屋の手から靴屋の手へ舞ひ込み、靴は靴店からパン屋の店へ移つて行く。兩人ともその欲望は満たされ、そして兩人の私的勞働は社會的に必要なものと確認されるのである。だがこれと同じことが靴屋とパン屋の間だけでなく、社

會のすべての成員の間に、即ちすべての商品生産者の間に一度に起きるものと假定しよう。そしてこう假定するのは正しいことであり、また實際こう假定する必要がある。何故なら社會の成員はすべて生きて行かなければならず、いろ／＼な欲望を満たさなければならぬからである、社會の生産は、消費が寸時も停止しないのであるから、寸時も停止することはできぬ——と吾々は前に言つた。今はこうつけ加へなければならぬ。生産は今の場合は個々の獨立した私的勞働に分裂してゐて、その内の一つだけでは一人の人間を満足せしめることができないのだから、——社會の消費が停止しないとすれば——交換は寸時たりとも停止することはできぬと。故に萬人が絶えず萬人とその生産物を交換する。どうしてそういふことになるのか？ また先きの例に戻らう。靴屋はパン屋の生産物ばかりを必要とするのではなく、その外の商品もそれぞれいくらかづゝ得たいと思つてゐる。彼れはパンの外に、屠牛者から肉を、仕立屋から服を、リンネル織匠からシャツにする布地を、帽子屋からシルクハットなどを欲しいのである。彼れはすべてこれ等の商品を手に入れるには交換といふ方法によらなければならぬ。だが、彼れの方から提供し得るものはいつでも靴だけである。従つて靴屋にとつては、彼れが自分の生活のために必要とするすべての生産品が、まづ最初には靴の形態をとるのである。若しパンが入用なら彼れはまづ靴を一足造り、シャツが入用でも靴を造り、帽子か煙草が欲しい場合にもつねにまづ靴を造るだけである。靴屋といふ専門的勞働においては、その手元に來るすべての社會的富は、彼れ個人に對しては靴の形をとる。商品市場における交換によつて、初めて彼れの勞働は靴といふ狭い形態から、彼れの必

要とする生活資料の種々の形態に變ぜられ得るのである。しかしこの變化が實際上に起きるためには、即ち靴屋がいろ／＼と生の悦びをもたらしめてくれることを期待してゐる、彼れの勤勉な労働が、靴の形態の儘に止つてゐないがためには、或る一つの重要な條件が必要なのである。その條件といふのはすでに吾々の知つてゐるものであつて、即ち靴屋の必要とする労働生産物をつくる場所の、他のすべての生産者が、同じくまた靴を必要として交換したがつてゐるといふことである。靴屋はその生産物即ち靴が、すべて他の生産者によつて欲しがらるる場合だけ、すべて他の生産物を受取り得るのである。靴屋の作る靴が何時でも誰れからも欲しがらるる商品、即ち無制限に欲しがらるる商品であるならば、靴屋は自分の労働によつて交換し得る分量だけ、いつでも他の商品をすべて手に入れることができる。しかしながら靴といふ特殊商品が人類にとつて絶対無制限に必要缺くべからざるものであるなどと考へるのは、可なり妄想であり根據のない樂觀であることは、すでに靴屋の例だけでも明らかであらう。ところが他の個々の生産者、即ち鏡前屋、織匠、肉屋、帽子屋、百姓等がみな各々靴屋と全く同じ状態にあるのだから事柄がこみ入つて来る。彼れ等はいづれも色々な生産物を欲しがつてゐるのだが、自分の方からはそれに對してたゞ一種類の生産物を提供し得るだけである。各自の特殊生産物が何時でも社會のすべての人々から欲せられ、交換されるとした場合にのみ、各人が完全にその欲望を満たすことができよう。だが一寸考へればこんなことは全然不可能だといふことが分る。各人はいつでも同様にすべての生産物を欲しがらるわけではない、だから誰れでも靴だのバンドの着物だの鏡前だ

の着物だの、シャツ、帽子、靴紐だのを、いつでも無制限に買ひ得るものではない。ところがそうでないとすれば、すべての生産物が、いつでもすべての生産物と交換されることはできない。しかるに常住的にすべての方面に關係を與へるものとしての交換が不可能であるとすれば、その時は社會のすべての欲望を充たすことが不可能となり、社會におけるすべての方面の労働が不可能となり、社會の存立が不可能となつてしまふ。そうすれば吾々は再び進退兩難に陥つて、さきに吾々に課せられた問題を解くことができなくならう。即ちその問題とは、何等の共同労働計劃、何等の組織、何等の紐帶等に依つても結合されてゐない、個々のばら／＼になつた私的生産者から、如何にして社會的協力労働と經濟とが出て来るかを説明することである。ところが交換はすべてこれ等のものを、奇妙な方法に依つてではあるが規整し得る手段たることを吾々に示した。しかしながら交換が規則正しい機械としてはたつき得るためには、まづ初めに交換が一般に成立してゐなければならぬ。ところが吾々はいま第一歩を踏み入れたばかりなのに、すでに交換そのものゝ中に難點を發見したのであつて、すべての方面に互る不斷の營みとして、交換を一體どう扱つてよいか、吾々には全く判断がつかないのである。

ところがこの困難に打ち勝つて社會的交換を可能ならしめるところの手段がすでに見出されてゐるのである。それを發見したのはコロンブスでもなんでもない、社會的經驗と習慣とが知らず知らずの間に交換そのものゝ中に手段を見出したのである。即ちよく言はれてゐる文句でいへば、「生活」そのものが問題を解決したのである。それなら一體どうして社會的生活が、こゝろいふ難

點を持ちながら同時に難點を解決する手段をつくり出したか。勿論すべての商品が、いつでもあらゆる人々によつて、即ち無制限の量において欲しがられるといふことはあり得ない。しかし、どの時代にも、どの社會にも、各人にとつては生存の根幹として重要であり、必要であり、有用であつたところの、そしてそれがために各人がいつでも欲しがつてゐたところの、或る一つの商品があつた。しかしさういふ商品はたしかに靴ではなかつたに違ひない。人間はそれほど見え坊ではないのだから。しかしさういふ生産物は、たとへば家畜であつたかも知れない。人間は靴だけではやつて行けないし、また着物や帽子や穀物だけではやつて行けない。ところが家畜は經濟の基礎として、如何なる場合でも社會の生存を保證する。それは肉、乳、勞働力等を供給する。實に多數の遊牧民族にあつては、富全體が家畜群より成るのである。またアフリカの黒人種族は、殆んど家畜の飼養だけで今もなほ生活してゐる。或は少くともごく最近まではそれで生活してゐた。さて家畜はわが共同體において最も欲しがられてゐる富の部分であると假定しよう。家畜は社會において生産される唯一のもので、行かずとも、その中の一つであるとして差支へない。こゝでは家畜飼養者は、靴屋が靴に、織匠が布に對する如く、彼れの私的勞働を家畜の生産に向ける。我々の假定に従へば、家畜飼養者の生産物のみが、すべて外の人々によつて一般に無制限に好まれる。何故ならそれはすべての人々に最も必要不可欠からざる重要なものと思はれてゐるからである。故に家畜は誰れにとつても喜ばれる富である。吾々の社會においては交換の方法によらずしては何物をも且つ何人からも得られないといふことになつてゐるから、多くの人から欲

しがられてゐる家畜を家畜飼養者の手から得るには、言ふまでもなく他の勞働生産物と交換する外はない。しかし先きに假定したように、誰れでも喜んで家畜を欲しがつてゐるのだから、従つて誰れでも常に喜んで家畜に對して自分の生産物と與へるに相違ないといふことになる。そこで逆に、人は家畜を以てすれば何時でもどんな種類の生産物でも得ることが出来る。故に家畜を有するものは何んでも皆自分の意のままになるのだから、たゞ好きなものを選択すればよい。だから今度は逆に、取りも直さずさういふわけで、各人は自分の特殊勞働生産物を家畜より外のものに對してはもはや交換しなくなる。けだし家畜を持つてゐれば、家畜と引きかへに何時でもすべてのものが手に入るのだから、すべての物を持つてゐることになるのである。時を経るにつれてさういふことが一般に明らかになり、そして習慣になつてきて、次第に家畜は一般的商品となつた。即ち無制限に且つ一般的に欲しがられる唯一の交換商品となつた。そこでもういふ一般的な商品として、家畜がすべて他の特殊商品の交換を媒介する。今は靴屋は靴と引きかへにパン屋からすぐさまパンを受取らずに家畜を受取る。何故なら家畜があれば、自分の思ひの儘の時にパンでも何んでも買ふことができるからである。今は矢張りパン屋も靴の代を家畜で支拂ふことができる。けだし彼れは彼れ自身の生産物、即ちパンと引きかへに他の人間から、錠前屋からも家畜飼養者からも肉屋からも、矢張り家畜を受取るからである。各人は自分自身の生産物と引きかへに他人から家畜を受取り、また他人の生産物が欲しい時にはその家畜を以つて支拂ふ。このように家畜は一人の手より他の人の手に渡り、あらゆる交換を媒介する。それは個々の商品生産

者を結ぶ精神的紐帯である。(そして家畜が交換の媒介者として一人の手より他人の手に移ることが頻繁であればある程、家畜の一般的、無制限な愛好性が益々強固なものとなり、益々それはいつでも欲しがられてゐる唯一の交換商品、即ち一般的商品となるのである。)

共同的労働計画を伴はぬ分散的な私的生産者の社會においては、労働生産物はいづれも最初は私的労働であることは、先きに吾々の見た通りである。この労働が社會的に必要であるかどうか、従つてこの労働の生産物は價值を有してゐて、労働した人間に社會全體の生産物に對する分け前を保證するかどうか、それともそれは浪費された労働であつたかどうかといふことは、この生産物が交換されるといふ事實によつてのみ専ら示されるのである。しかるに今やすべての生産物は家畜とだけ交換される。故に今では生産物が家畜と交換される場合にのみ、その生産物は社會的に必要なものと見做されるのである。生産物が家畜と交換され得ること、家畜とその價值が等しいといふことが、初めて各私的生産物に社會的必要労働の刻印を與へる。吾々は更らに、商品交換によつて初めて、且つ商品交換に依つてのみ、個々に分立せる私人が社會の一員といふ刻印を擦されるのだといふことを見てきた。今はもつと正確に、家畜との交換によつてそうなるのだ、と言はなければならぬ。今より家畜は社會的労働の體現と見做され、かくて家畜は今や人間の唯一の社會的紐帯となつてゐるのである。

こゝで諸君は、吾々は今筋道を誤つたのではないかといふ感情を内心いさぐであらう。これまでのことは皆幾分合點のゆくことであり、耳を傾けるに足りた。ところが結論はといへば、一般

的商品としての家畜、社會的労働の體現としての家畜、それどころか人間社會の唯一の紐帯としての家畜——これはすでに馬鹿げ切つた妄想であり、おまけに人類を侮辱する妄想である！ しかも諸君はこんなことを考へるさへ、故なくして侮辱されたと感ずるであらう。諸君は輕蔑の眼を以て家畜を見下すかも知れないが、しかも家畜は人間に近く、しかもかなり似てゐて、しかも土中から發掘された石灰石の塊りや、硅石や、ひとかけらの鐵に比すれば、くらべものにならない程人間に似てゐることは何といつても明白である。家畜の方が生なき金屬のかけらより、はるかに人間間の社會的紐帯を表現するに相應しいものであることを諸君は認めなければならぬ。しかも人間はこの場合に、外ならぬ金屬の方を擇んできたのである。思ふに先きに述べたような交換における家畜の意義および役割から見れば、家畜はまさしく——貨幣以外の何ものでもない。諸君は鑄造された金片や銀片、或は紙で出來た銀行券の形以外には貨幣といふものを考へることができないとすれば、そしてこれらの金屬または紙で出來た貨幣が、人間間の交易の一般的媒介物として社會的權力を有するのは當然であると考え、これに反して家畜がこれと同じ役割をするといふ私の説明を以て狂氣の沙汰であると考え、それは諸君の頭が如何に甚しく今日の資本主義世界の觀念に捕はれてゐるかを示すものに外ならぬ。それだから幾分なりとも合理的に見える社會關係の圖景が、諸君の眼には全然狂氣の沙汰に見え、完全に狂氣の沙汰になつてゐるの

が自明の理のように見えるのである。事實上は家畜の形態を取つた貨幣は金屬貨幣と丁度同じ職能を有してゐるのであつて、吾々が金屬を以て貨幣を造るようになったのは便宜の點を慮つた結

果に外ならぬのである。なるほど家畜は同質の金屬板のようにはうまく取りかへることもできないけれど、正確に價値を測ることもできないし、それにまた家畜貨幣を保管するには、家畜小屋に似た、とても大きな財布を持たなければならぬ。しかしながら人類が貨幣を金屬で造ることを考へつくに至つた以前も、貨幣は交換の必要缺くべからざる媒介者として早くから出來上つてゐたのである。けれど貨幣即ち一般的商品は實に必要缺くべからざる要具であつて、それがなければ一般の交換がちつとも取り運ばれず、またそれがなければ個々の生産者から成立してゐる無計劃な社會的經濟は存在し得るものではないからである。

現に交換における家畜の多面的な役割を観察してみよう。家畜は何によつて今まで研究してきた社會において貨幣となつたか？ あらゆる方面からあらゆる時に欲しがられてゐる勞働生産物だつたといふ事實によつてである。しからば何故に家畜はあらゆる時にあらゆる方面から欲しがられたのか？ 多方面に互る生活資料として、人間の生存を安全ならしめる極めて有用な生産物だつたからだといふことは、すでに言つた通りである。初めはまことにその通りである。しかしその後、家畜が媒介物として一般の交換に用ゐられ、ば用ひられる程、家畜を生活資料として直接に消費することは影をひそめて行つた。いまは家畜を自分の生産物と交換して手に入れた者は、殺して食つたり、耕作に使用したりすることを避けるであらう。家畜は今や彼れに取つては、何時でもどんな他の商品でも買ふことのできる要具として、一層價値の多いものとなつたのである。故に家畜を受取つた者は、いまそれを生活資料として消費しないで、交換要具として今後の

交換用として保管しておくだらう。この社會に假定したように分業が高度に發達してゐる場合には、家畜の直接消費はうまく行くものではないといふことは諸君も認めるであらう。たとへば靴屋にこうした家畜で何を初めたらよいのか？ また農業をやらぬ錠前屋や織匠や帽子屋はどうしたらよいのか？ こういふわけで生活資料として家畜を直接に使ふことはますます度外視されるようになり、そうすればもはや家畜は屠殺、搾乳、耕作に有用だからといふ理由でいつでも萬人から欲しがられるのではなく、いつでも任意の商品と交換し得る可能性を與へてくれるから私しがられるのだ。交換を可能ならしめること、即ち任意の時に私的生産物を社會的生産物に、私的勞働を社會的勞働に變化せしめるに役立つことが益々家畜の特殊な効用または使命になる。かくて家畜は人間に生産手段として役立つといふその私的な用途を益々棄て、遂に社會の個々の成員間の不斷の媒介といふ職能に向けられるから、漸次にそれはまた他の各生産物の如く私的生産物であることを止めて、前以つて、奥底から、謂はゞ納屋の奥から、社會的生産物となる。そこで家畜飼養者の勞働は、今やすべて他の勞働と區別され唯一の直接社會的勞働となる。もちろん家畜は最早や生活手段として消費するためのみ生産されるのではなく、それと並んで直接に社會的生産物として、一般的商品として、貨幣としてはたらく目的のために飼養される。もちろん家畜はそこごく僅かな部分はなほ屠殺されたり、耕作に使はれたりする。しかしこの謂はゞ家畜の私的用途、私的性質は、その貨幣としての公的性質に對してだんだん消えて無くなる。かくて家畜はかゝる性質のものとして、社會の生活の中に顯著な多面的な役割を演ずるのであ

る。

一、家畜は結局において一般的な、公けに認められた交換手段となる。最早や今は何人といへども靴とパンとを交換したり、シャツと蹄鐵とを交換したりしない。そうしようと思つてもはねつけられるであらう。家畜と引きかへにだけ物を手に入れることができるのである。ところがこれによつて以前に二重的性質を持つてゐた交換は、二つの分離した取引、即ち賣ることゝ買ふことゝに分れる。以前に錠前屋とパン屋がその生産物を交換してゐた時には、各々は持手を替へることによつて各自の商品を賣ると同時に相手の商品を買つたのであつた。買ふことゝ賣ることゝは同一の仕事であつた。ところが今は靴屋が自分の靴を賣る場合は、彼れはそれに對して家畜だけを受取る。彼れはまづ初めに自分自身の生産物を賣つたのであつた。同じく彼れが何かを買ふ場合は、何を買はふとも、或は買つても買はなくとも、どこまでもそれは別の事柄である。とにかくこゝでは靴屋は自分の生産物を手放したのであつて、これで彼れは自分の労働を靴の形態から家畜形態に變へたのだ。しかるに家畜形態はといへば、先きに述べたように労働の公けの社會的形態であつて、この形態においてのみ靴屋は自分の欲するだけの間この労働を保存することができる。何故なら彼れはいつでも自分の労働生産物を再び家畜形態から別種の任意の形態のものに取換へる、即ちものを購買することができる位置にあるといふことを知つてゐるからである。

二、ところが取りも直さずこれによつてまた家畜は今や富を蓄へ、集める手段となる。即ち蓄藏手段となる。靴屋が彼れの生産物を直接に生活手段と交換してゐる間は、彼れは、彼れの日々

の欲望を満たすに必要なだけしか労働しなかつた。一體靴を溜め込むために労働したり、パンや肉やシャツ、帽子なんかをウンと澤山溜め込んだりすることが、彼れにとつて何の役に立つたらうか？ 日々の使用の對象物は、多くは長く保存したりしまつて置いたりすると、損害を蒙るか、全く使用することができなくなつてしまふ。しかるに今や靴屋は自分の労働生産物と引きかへに手に入れた家畜を、將來のための手段として保存しておくことができる。そこでまたこの親方の胸の中に貯蓄の考へが起つてくる。彼れはできるだけ多くを賣らうと試みるが、すべて手に入れた家畜は再び支出しないように心がける。それどころか彼れはそれを集めようと試みる。けれど家畜はいつでもすべての人にとっての利になるものであるから、彼れはそれを將來のために蓄積し、そして自分の労働の結果を子供等に遺産として残すのである。

三、家畜は同時にまたすべての價値および労働の尺度となる。靴屋は一足の靴が交換の場合にいくらのものを齎らすか、自分の生産物の價値はいくらであるかを知らうとする場合は、たとへば次ぎのようによつて。私は一足につき牛半分を得る。故に私の靴一足は、牛半分に値ひすると。四、最後に家畜はこゝにいふ風にして富の總和となる。誰れそれは澤山の穀物、畜群、衣類、嗜好品、從者を持つてゐるから富んでゐるとは言はずに、家畜を澤山持つてゐるから富んでゐると言はれる。あの人にお辭儀をなさい、あの方は牛一萬匹の財産を持つてゐると言はれたり、或は貧乏人め、あいつは一匹も持つてゐないと、いふ風に言はれる。

御覽の通り一般的交換手段として家畜が擯まるにつれて、社會は家畜形態においてのみ考へ得

るようになる。人はいつでも家畜のことを語つたり、夢みたりする。儀式はつた家畜崇拜や家畜讚美が行はれてくる。乙女の魅力が持参金としての家畜の大群で増すときは、求婚者が豚飼ひでなくて教授や坊さんや詩人であつたにしても、その乙女は最も氣に入られて嫁に貰はれる。家畜が人間の幸福の總計である。家畜とその驚くべき力とが詩に謳はれ、家畜のために犯罪や殺人が行はれる。そして人間は首を振り振り「家畜が世界を統治する」と繰り返して言ふ。若しもこの格言が諸君に御存じないものに思はれるなら、これをラテン語に譯して御覽なさい。古代ローマのベクニア⁽¹⁾貨幣といふ言葉は、ベクス⁽²⁾「家畜」から來てゐるのである。古代ローマ

(使用價値の脱皮は金屬貨幣となるに至つて完了する。)

三

共同財産と共同労働計劃との急激な崩壊後、共產體内部の關係が如何に變つて行くかといふことに關するこれ迄の研究は、諸君には純理論的な妄想と見え、また雲を掴むような話に見えたらう。だが實際においては、これは商品經濟の歴史的發展を要約し簡単に叙述したものに外ならない。そしてこの叙述はその根本的特徴において嚴密に歴史的真實と照應してゐるのである。

しかしながら右の叙述には二三の訂正を加へなければならぬ。

一、共產體を一夜の内に崩壊せしめて自由な私的生産者の社會に變へた突發的の大事變として描いたこの出來事は、現實においては數千年を要した。もちろん突發的な激しい大事變としてかゝ

る變化を想像する事も決して空想ばかりとは言へない。この想像は、原始的共產主義に據つてゐる民族が、すでに高度の資本主義發展段階にある他民族と接觸するようになった場合、至るところで現實と一致する。ヨーロッパ人による謂はゆる野蠻、半開の國々の發見、征服は大ていこういふ場合である。スペイン人によるアメリカ發見、オランダ人によるインドの征服、イギリス人による東インドの征服の際にも、また、イギリス人、オランダ人、ドイツ人等のアフリカ占領の際にもこうであつた。これらの大多數の場合には、ヨーロッパ人が急にこれ等の國々に侵入したために、その原始民族の生活に大激變が引きおこされた。吾々が二十四時間の出來事として假定したものは、實際においては往々二三十年を要したのみであつた。ヨーロッパの一國家による國土の征服、或はまた單にこれらの地方にヨーロッパ人の二三の商業植民地ができただけでも、忽ちその結果として土地共有の暴力的廢止、土地を細分寸斷して私有財産にすること、家畜群の沒收、社會の全傳統的關係の粉碎等が現はれる。たゞその結果がこの場合大抵、吾々が假定したように共產體が商品交換を伴へる自由な私的生産者の社會に變じないだけのことである。何故なら解體した共有財産は土人の私有にはならないで、ヨーロッパ人の侵入者によつて盜まれ強奪されてその財産となつてしまひ、そして舊來の生存形態と生存手段とを奪はれた土人自身は、賃銀奴隸になるか、それとも單にヨーロッパ商人の奴隸にされるか、乃至はどちらにもならない場合は直接に絶滅されるからである。このように植民地におけるすべての原始的民族にとつては、原始共產主義狀態から近代的資本主義狀態への移り行きは、事實上急激な破局として、極めて恐ろ

しい苦惱に充ちた、言語に絶した不幸として行はれたのである。ところがヨーロッパ住民の場合には、この移り行きは破局ではなく、ゆるやかな、漸進的な、目に見えない過程として數百年に亙つて續いたのである。ギリシヤ人やローマ人が史上に姿を現はした時はまだ共有財産をもつてゐた。キリストの生後間もなく北から南へ殺到した古代ゲルマン人は、ローマ帝國を崩壊せしめ、そしてヨーロッパに定住したが、まだ共產的原始團體をとまなひ、それをかなりの間維持してゐた。しかしヨーロッパ民族に初めて商品經濟が形成されたのは、すでに述べたように漸やく中世の末期、即ち十五、十六世紀のことである。

二、吾々の叙述に加へなければならぬ第二の訂正は、第一のものから出て来る。吾々はさきに、共產體の胎内に、すでにありとあらゆる生産部門が専門化されてゐたと假定した。即ち分業が社會の内部に非常に高い程度まで發達してゐたので、共產制度を廢して交換を伴ふ私的生產を生ぜしめるような大事變が起きた際には、分業は交換の基礎としてすでに出來上つてゐたと見做した。この假定は歴史的には正鵠を得てゐない。原始的社會狀態の内にあつては共有財産が存立してゐる限り、分業はごく僅かしか發達してゐないで、漸やく萌芽状態にあつたにすぎなかつた。吾々はこれをインドの村落體の例に見た。僅かに十二人の人間が共同體の住民から區別されて、特別な職業を授けられてゐたが、その中で本統の手工業者といへるものは僅か六人、即ち鍛冶屋、大工、製陶工、床屋、洗濯屋、銀細工師だけであつた。紡ぐこと、織ること、衣類をつくること、パンを焼くこと、屠殺、腸詰の製造等、大抵の手工労働は、すべて各家族によつて本業の農業勞

働と並んで副業として家で行はれた。ロシアの多くの村々においても、人民がすでに交換、商業に引き入れられてゐるのでない限り、今でもなほこういふ風である。分業、即ち各個の労働部門を獨立的専門職業として分離させることは、私有財産と交換とがすでに存在してゐる場合に初めて正當に發展し得る。私有財産と交換とが初めて特殊専門職業の構成を可能ならしめるのである。けだし一生産者が自分の生産物を規則正しく他人の生産物と交換する意向を持つ場合に、初めて一般に特殊的生産に従事するといふことが彼れの目的となるからである。そして貨幣が初めて各生産者に對して、自分の勤勞の成果を保存し、累積する可能性を與へ、それによつてまた市場のためにできるだけ手びろく規則正しい生産をする衝動を與へる。しかるに他方においては、市場のために生産すること、貨幣を貯へることは、彼れの生産物とその生産物の収益とが私有財産である場合にのみ、生産者にとつて一つの目的となるであらう。ところが原始共產體においては取りも直さずこういふ私有財産は拒否されてゐた。そして歴史は私有財産は交換および労働の専門化の結果初めて成立したといふことを示してゐる。そうすると、特殊職業の構成、即ち高度に發展した分業は、私有財産と發達した交換とが存する場合にのみ可能であるといふことが推論される。しかるに他方においては、交換そのものは分業がすでに存在してゐる場合にのみ可能であるといふことが明らかになつてゐる。けだし萬人がすべて同一のものを生産してゐる場合には、生産者間の交換にはどんな目的があるのか。たとへば甲が靴だけを生産し、乙はパンだけを焼いてゐる場合にこそ、初めて両者がその生産物を交換するといふことに意義があり、目的がある。か

くて吾々は奇妙な矛盾にぶつかる。——交換は私有財産と發達せる分業とが存在する場合にのみ可能である。しかるにまた分業は交換の結果として初めて私有財産の基礎の上に成立することができる。ところが私有財産はと言へば、これは交換によつて初めて成立し得るのである。加之、これを一層仔細に見るときは、この矛盾は更らに二重の矛盾である。即ち分業は交換の以前に存在してゐなければならぬ、そして交換は分業と同時に存在してゐなければならぬ。更らに、私有財産は分業および交換に對する前提であるが、それ自體は、初め分業および交換からより以外には發達しようがない。どうしてこんな纏れが出てくるのか？ 吾々は明らかに一つの環をぐるぐる廻つてゐるのだ。それで原始共產體から一步踏み出すことすらが不可能のように見えるのである。そのとき人間社會は明らかに一つの矛盾の中に陥つてゐたのであつて、これが解決は、一に進化の一層の發展に俟たねばならなかつたのである。今やこの出口のないのは見かけだけのものである。いかにも矛盾といふものは個人個人にとつて、普通の生活においては打ち勝つことのできぬものではあるが、全體としての社會の生活においては、人間はそれを一層仔細に觀察することによつて、こゝろいふ矛盾の眞相を一步一步見出して行く。今日一つの他の現象の原因として現はれたものは、明日はその結果となり、或は結果が原因となるのであつて、社會生活の關係の中にこゝろいふ不斷の變遷は止むことがない。しかるにこれと反對に、個人が私的生活において矛盾に當面する場合は一步も進むことができない。おまけに日常生活のことでは、矛盾とはあり得べからざるものであるとさへ見做されてゐるのであつて、裁判官の前で矛盾に陥つた被告は、

そのことによつて虚偽を證明したことになる。そして矛盾のために場合によつては彼れは監獄に送られるか或は實に絞首臺にまでも送られる。しかるに人類社會は全體としては絶えず矛盾に陥るが、社會はそのために滅亡してしまふことはなく、反對に矛盾に陥るとき初めて運動し始める。即ち社會の生活における矛盾は絶えず發展となつて消え失せ、文化の新たな進歩となる。大哲學者ヘーゲルは言ふ、「矛盾は進歩を導くものである」と。そして明らかに矛盾における運動が取りも直さず人類史の發展の現實の様式である。吾々がこゝに論じてゐる場合、即ち共產社會から分業および交換を伴ふ私有財産へ移行行く場合においても、吾々が見出した矛盾は、特別な發展と長い歴史的出來事となつて消え失せてしまふ。しかもこの出來事は、吾々の加へた訂正を除けば、本質において先きに吾々の述べてきたことに一致してゐた。

まづ第一に交換はすでに事實上において、共有財産を伴ふ原始状態の中に始まつてゐる。しかもこれもまた先きに假定したように、交易の形式、即ち生産物と生産物を直接に交易する形式を以つて始まつてゐるのである。吾々は人類のごく初期の文化段階においてすでに交易を見る。しかし上述の如く交換者双方の私有財産が交換されるものであり、しかもこゝろいふものは原始共產體の内部には知られてゐないのであるから、最初の交易も共同體または種族の内部でなく、外部で行はれ、同一種族または同一共同體の成員の間においてはではなく、互ひに接觸するに至つた色の種族や共同體の間に行はれた。しかもこの場合他の種族の者と交易するのは、種族の個々の成員ではなくして、種族の共同體が全體として互ひに交易を行ふのであつて、その場合それらは

首長を通じて行ふのである。故に、人類文化の曙光時代において、アメリカの原始林の中で互ひにその魚と野獣とを交換する原始的狩獵者と原始的漁夫といふ、經濟學者の間に行はれてゐる想像は、二重の歴史的妄想である。既に述べたように太古の時代には、自分一人で生活し勞働する孤立した個人は存在してゐないばかりか、個人と個人との交易もそれから數千年経つて初めて現はれてきたのである。最初のうちは歴史は、相互に交易する種族と民族とを知つてゐただけである。アメリカの野蠻人に關する著書の中にラフィット¹は言ふ、「野蠻民族は絶えずお互ひ同志交換を行つてゐる。彼らの商業は生産物と生産物との直接交換を表はしてゐる點で、古代の商業と共通の點をもつてゐる。これらの民族の各々は、他民族の持つてゐない物を所持してゐて、商業がこれらの物を一民族から他民族に移轉せしめる。穀物、陶器、毛皮、煙草、獨木舟、野牛、家具、護符、木綿等、一言で言へば人間生活の維持に必要な物はすべて商業の中に入る。……彼れ等の商業は民族全體を代表する種族首長に依つて行はれる。」*

加ふるに吾々が前の叙述のときに、交換を始めるに當つて一つの單獨の場合——即ち靴屋とパン屋との交換——を以つてして、これを偶然的なものとして取扱つたとすれば、これもまた嚴密に歴史的眞實に照應するものである。初めは個々の野蠻種族または民族間の交換は、純粹に偶然的な、獨立的なものであつて、それも彼れ等が極はめて偶然に出會つたり接觸したりする場合で

*『古代の風俗と比較せるアメリカ野蠻人の風俗』一七二四年刊、第二卷、第三二二—三頁（シープ、第二四五頁）。

ある。従つて規則的な交易が遊牧民族に最も早く現はれるのは、彼れ等が屢々場所を變へることによつて最も頻繁に他の民族と接觸するようになったからである。交換が偶然である限り、矢張り生産物の剩餘だけが、即ち種族または共同體にあつて自家需要を満たした後に残つたもののみが、他のものと交換に供せられる。しかし時を経るにつれて、偶然の交換が屢々繰返されれば繰返される程、これがいよいよ習慣となり、ついで常則となり、そして段々と生産物を交換のために直接に生産し始める。かくして種族や民族は、交換のために或る若干の勞働部門を専門化するようになる。種族や共同體の間に分業が發達する。しかしこの場合は商業は未だ長いこと純然たる交易、即ち生産物と生産物との直接交換に止まつてゐる。合衆國の多くの地方においては、十世紀の終りになつてもなほ交易が擴まつてゐた。メリーランドにおいては立法議會が、煙草、油、豚肉、パン等が互ひに交換されるべき比例を制定した。コリエンテスではまだ一八一五年にも行商の小僧が「鹽を脂と交換！ 煙草をパンと交換！」と叫んで街上を走り廻つてゐた。ロシアの村々では九〇年代に至るまでも、そして一部分は今でもなほ、廻つて歩く行商人、謂はゆるプテソルスによつて農民と單純交易が行はれてゐる。針、指ぬき、リボン、釦、パイプ、石鹼等いろ／＼の小間物を彼れ等は豚毛、羽毛、兔皮といふようなものと交換してゐる。ロシアでは外にこれと同じような商賣が、車を引いて歩き廻つてゐる陶器商や鑄掛屋などによつて行はれてゐる。彼れ等は自己の生産物を、穀物、亞麻、大麻、麻などと交換するのである。（シープ、第二四六頁。）しかるに交換の機會が度び重なつて規則的になるにつれて、最も容易に生産され得る商品、従つ

て最も頻繁に交換に供せられ得る商品か、或は反對に最も缺乏してゐる商品、従つて一般に欲しがられてゐる商品か、既に極めて早くから、あらゆる地方において、あらゆる種族の場合に、おのづから分け出されるようになる。たとへばサハラ沙漠では鹽や大棗、英領西インドでは砂糖、ヴァージニアやメリトランドでは煙草、シベリアでは謂はゆる瓦茶（茶の葉に脂を混じて煉瓦状に固めたもの）、アフリカ黑人の間では象牙、古メキシコではコ、アの實等がかゝる役目を演ずる。かくていろいろな地方の氣候風土の特殊性によつてだけでも、全商業の基礎、並びにあらゆる交換業務の媒介者たるはたらしきをするに適當な、或る一つの「一般的商品」が分け出されるに至る。その後時代の發展につれて、各種族の特殊な仕事からもこれと同じことが生ずる。狩獵民族の場合には野獸が、あらゆる生産物に對して提供される「一般的商品」となることは言ふまでもない。ハドソン・ベーク會社の商賣においては海狸の皮がこの役割を務めた。漁撈民族の場合には魚がすべての交換業務の當然の媒介者である。フランスの旅行家の話によれば、シュエトランド島では、芝居の切符を買ふ際にもおつりは魚でくれる。こういふ一般に好まれる商品を一時的交換媒介物とする必要は、屢々目に見えて感じられる。たとへば有名なアメリカ旅行家サミュエル・ペーカ―は、アフリカ内地の黑人種族と交易した具合を記して曰く、「自分で食料を調達することはますます困難となる。土人は穀粉を肉と交換するのでなければ賣らない。だから吾々は次ぎのようにしてこれを調達する。まづトルコ商人のところへ、著物や靴と交換して鐵の「槌」（鋤）を買ひ、次ぎにこれで牛を買ふ。それから牛を遠方の村に連れて行つて屠殺し、その肉を約百切れに分け

る。この肉と三つの大籠を持つて、私の従者が地上に坐つてゐると、土人がやつて来て、肉一切れに對して小籠一杯の穀粉を右の大籠へあけて行く。これが面倒なアフリカの穀粉取引の一例である。」（『ナイル河源紀行』（第二二―二頁））

家畜飼養に移り行くにつれて、家畜が交易において一般的商品となり、一般的な價值尺度となる。ホーマーが吾々に書き残してゐるように、古代ギリシャの場合にはまさしくそうであつた。たとへばホーマーは英雄の武裝を精密に描寫し評價して曰く、グラウクスの鎧は牛百匹に値ひし、ディオメデスのそれは牛九匹に値ひすると。しかしまた當時ギリシャにおいては家畜の外にはほ二三の生産物が貨幣の役目をつとめてゐた。同じホーマーが言ふ、トロヤの包圍の際にはレムノスから來た酒に對して或は毛皮、或は牛、或は銅、或は鐵が支拂はれたと。古代ローマにおいては、先きに述べたように「貨幣」といふ概念は家畜と同一であつた。同じく古代ゲルマン人の場合も、家畜が一般的商品と見做されてゐた。それが農業へ移つてゆくにつれて、今度は鐵とか銅とかの金屬が、經濟において優越した地位を占めてきた。一部分は武器を造る材料としてだが、大部分は農業上の勞働手段をつくる材料としてである。金屬はその生産額が増加し、その使用が擴まるにつれて一般的商品となつて、家畜の地位を奪つてしまふ。金屬が一般的商品となるのは、最初はその自然的用途のため——いろいろの道具の材料として——一般に有用であり、欲しがられるからである。この段階においては金屬は原料として、塊りのまゝで、そしてその重さに従つてのみ商業に用ゐられる。ギリシヤ人の場合は鐵、ローマ人の場合は銅、支那人の場合は銅と鉛

の合金が一般的に使用された。謂はゆる貴金屬、即ち金銀が使用されたり、商取引の中に入り込んできたのは、ずつと後になつてのことである。しかしこれとても、ずつと永らくの間生地のみまで、鑄造されずに重さによつて商業に用ゐられたのである。故にその點にも矢張り一般的商品即ち貨幣商品が、何等かの用途に役立つ或る生産物から由來してゐることを認め得る。今日取引に當つて穀物と引きかへに與へられた一片の銀は、明日は直接に騎士のびか／＼光る楯を拵へるために使用されるかも知れない。貴金屬を専ら貨幣として使用すること、即ち貨幣の鑄造は古代インド人の間にも、エジプト人の間にも、また支那人の間にも知られてゐなかつたのである。古代ユダヤ人も初めは重量を以てする金屬片の用途を漸やく知つてゐただけであつた。たとへばアブラハムは、舊約聖書に言つてあるように、エフロンでスラのために墓地を買つた時に、たつぷり秤にかけて四百シルクの貿易銀を支拂つた。貨幣鑄造は紀元前十世紀乃至八世紀頃に初めて起つたものと見做されてをり、しかも最初にギリシヤ人によつて採用されたものである。ローマ人はこれから學んで、紀元前三世紀に初めて銀や金の鑄貨を造り上げた。數千年に亙る交換發達史は、茲に金銀を以てする貨幣の鑄造を以て、その最も完成せる究極の形態に達したのである。

貨幣即ち一般的商品は、一般に金屬が貨幣製造に用ゐられない以前に、すでに全然形づくられてゐたことはすでに述べた通りである。たとへば貨幣は家畜の形態を取つてゐる場合ですら、今日金貨が有してゐると全然同一の機能を事實上に有してゐる。交換の媒介物、價値の尺度、蓄藏手段、富の體現たる機能が即ちそれである。たとへば金屬貨幣の形態においてのみ、貨幣の使命が初

めて外面に現はれてくるのである。交換は二つの任意な生産物の單純な取換へを以て始まるといふことを吾々は知つた。交換が生ずるのは、一方の生産者——共同体または種族——が、他のものゝ労働生産物無しではうまくやつて行けないからである。彼れ等は各自労働生産物を交換することによつて互ひにそれを融通し合ふ。かゝる交換が重なり規則的になつてゆくにつれて、或る一つの生産物が、一般に欲しがられてゐるために特に擢き出たものと考へられ、これがすべて交換の媒介物となり、一般的商品となる。どんな労働生産物でも、それ自體としてはこゝろいふ商品即ち貨幣になることができよう。靴でも帽子でも、麻でも羊毛でも、家畜でも穀物でも。そしてまた種々様々の商品が一時はこゝろいふ役目を演じたのである。如何なる商品が擇び出されるかは、單に民族の特殊の欲望または特殊の仕事によつて定まるだけである。家畜は最初のうちには有用な生産物として、生活資料として一般に好まれる。しかし時を経るにつれて主として貨幣として欲しがられ、授受されるようになる。何故なら貨幣として見た家畜は、各人にとつて労働の成果を、いつでも社會の任意の生産物に交換することのできる形で保存しておくに役立つからである。家畜はいつでも故障なしに交換され得る生産物であるから、他のすべての生産物と違つて唯一の直接の社會的生産物となると先きに述べた。とはいへ家畜には貨幣商品の二重性がまた強く現はれてゐる。——家畜を一目見れば、それは一般的商品であり社會的生産物であるにも拘らず、同時にまた屠殺して消費することのできる單なる生活資料であり、人間労働の、即ち遊牧民族の労働の、普通の生産物であることが分かる。これに反して金貨においては、既に貨幣が單な

る生産物より由來したことを思出させるようなものは消えてしまつてゐる。刻印打つた金の小さい圓形物はそれ自身としては、交換手段として、一般的商品として役立つ外は何にも役に立たないし、それ以外に何の用途をもたぬ。それは他の如何なる商品とも同じように、人間労働の生産物であり、採金者や金細工師の労働である限りにおいて一般になほ商品ではあるが、生活資料としての私的用途をすべて失つてしまつたのであつて、まさしく私的生活にとつて有益にして必要な形態を伴はないところの人間労働の一片にすぎない。それはもはや私的生活資料として、食物、衣服、裝飾品として、或はその他如何なるものとして、も何等用途を有せず、單に他の商品との交換における媒介物として役立つといふ、純社會的用途を目的としてゐるにすぎぬ。そして取りも直さずこの故にこそ、金貨といふそれ自身無意味、無目的のものの中に、貨幣即ち一般的商品の純社會的性質が、最も純粹に最も完全に表はれるのである。

貨幣が金屬形態で究極的に完成された結果は、商業の非常な擴張となり、これまで商業を目指さず自己消費を目指してゐたすべての社會關係の没落となつた。舊來の共產體は商業によつて破壊された。何故なら商業は共產體の成員間の所有の不平等を促進し、共有財産の崩壊を促進し、ついに共同體そのもの、没落を促進するからである。最初小自由農は自分のためにのみすべての物を生産して、餘つたものだけを賣つて貨幣を靴下の中に貯めこんでゐたのが、次第次第に、そして特に貨幣租税が實施されるにつれて、終には生産物を全部賣り拂ふようになり、その後で食物、衣類、家具、おまけに播種用の穀物までも買ふことを餘儀なくされる。こういふ風にして農

民經濟が自己のための生産から、市場のための生産に轉化し、そのために全く亡んでしまふ實例を、吾々は最近十年ばかりのうちにロシアにおいて目撃した。商業は古代奴隸制に根本的な變革をもたらしした。奴隸が家内經濟のためにのみ使用され、主人やその家族の欲望のために農業労働や手工労働に使用されてゐた間は、奴隸制もなほ家長的な穩和な性質を帯びてゐた。ギリシヤ人や後にはローマ人が貨幣を愛好して、商業のために生産せしむるに至つて初めて奴隸の非人間的虐使が始まり、終にこれが奴隸の大衆的反亂を誘致するに至つた。この反亂はそれ自身は全く盲目的なものではあつたが、奴隸制が餘命を終つて維持し難き制度となつたことの前兆であり明瞭な徴候だつたのである。丁度同じようなことが中世の徭役制度にも繰返された。この制度は最初は一の保護關係だつたのであつて、この保護に對して農民は貴族領主に、現物を以てする一定の貢納または勞役を課せられ、その貢物は領主自身の需要を充たす。後になつて貴族が貨幣の便宜をさとるに至ると、勞役や貢納は商業の目的のために段々増加されるようになつて、徭役制度は農奴制度となり、農民は極度まで虐使された。『資本論』第一卷、第一九八—二〇〇頁。そして終には同じく商業の擴張、貨幣の支配が農奴の現物貢納を貨幣貢納に變ぜしめるに至つた。だがこれと共に餘命を終つた徭役制度の弔鐘が鳴つたのである。最後に、中世における商業は自由都市をして權力と富を得せしめ、舊ギルド手工業の没落をもたらしした。金屬貨幣の出現によつて、特に世界商業は非常に早くから行はれてゐたのであつて、既に古代においてフェニキア人の如き特殊な民族が、諸民族の間に商人の役目をつとめ、この方法で貨幣を澤山自分の所へ持つてきて、

富を貨幣形態で集めてゐた。中世においてはこの役目は都市、多くはイタリアの都市の手に落ちた。十五世紀の終りにおけるアメリカの発見および東インドへの航路の発見後、世界商業は急に大擴張をした。新らしい國々は商業に新らしい生産物を供給したのみならず、新らしい金坑即ち貨幣材料を提供した。十六世紀にアメリカから巨額の金が輸入されてからは、北ドイツ都市、主としてハンザ同盟の都市は、世界商業によつて巨富を得た。それからオランダとイギリスがその跡を追つた。これと共にヨーロッパの諸都市において、また田舎においても大部分、商品經濟即ち交換のための生産が經濟生活の支配形態となつた。かくて交換は蒼古に既に共産的種族の境目のところに、靜かに誰れも氣附かぬように端を發し、段々頭をあげて、自由單純な農民經濟、東洋の專制君主制、古代の奴隸制、中世の徭役制、都市のギルド制といふ風に相次いで起つた計劃的經濟組織と相並んで生長し、順々にそれらのものを悉く喰ひつくして破滅するに至らしめ、終には孤立した私的生産者の全く無秩序的、無計劃的な經濟を、唯一の一般的經濟形態として支配せしめるに至らしめたのである。

四

商品經濟が少くとも都市においてヨーロッパにおける生産の支配的形態となつて以來、十八世紀において學者連はこの經濟即ち一般的交換が何を基礎としてゐるかの問題を研究し始めた。ところで交換は貨幣によつて媒介され、そして交換におけるすべての商品の價值は一個の貨幣表章

を有してゐる。そこでこの貨幣表章とは何を意味し、また取引における各商品の價值は何を基礎としてゐるか？これが經濟學の研究した最初の問題であつた。十八世紀の後半および十九世紀の初めにおいて、イギリス人アダム・スミスおよびデビッド・リカルドによつて偉大なる發見が行はれた。即ち商品の價值はいづれもそれに含まれる人間労働に外ならぬものであり、従つて商品が交換される場合には種々なる労働の等量^レが交換されるといふことである。そこでこの場合は貨幣は媒介物であつて、各商品の中に含まれてゐる相當量の労働を價格で表現してゐるに外ならぬ。こんなことを大發見と言へるのは不思議なことに見えるかも知れない。けれど商品の交換はその中に含まれる労働に基いて行はれるといふことより明白な分り切つたこととはないと考へられるからである。ところがしかし商品價值を金で表現することが専ら一般的習慣となつてゐることが、そつういふ當り前の事實を覆ひかくしてゐる。靴屋とパン屋とがその生産物を互ひに交換すると私が言へば、その場合は、用途が異つてゐるにも拘らず一方が他方と同じ量の労働を費やされたから、即ち兩者が同時に要求される限り一方は他方と價值が同じだから、そつういふ交換が成り立つのだといふことは、いかにも一目瞭然である。ところが靴一足は十マルクかゝると私が言つたとすれば、まづこの言ひ現はしをよく考へて見ると、それは何だか全く謎のようなものである。一體一足の靴は十マルクと何が共通なのか？この二つのものは何處に等しいところがあるので互ひに交換されるのか？一體こんなに違つた物が、どうして互ひに比較され得るのか？そしてどうして靴のような有用な生産物が、何の効用も意味もない刻印打つた金銀の一小片と交換さ

れるのか？ 最後に一體どうしてこんな効用のない金屬片が、世の中のあらゆるものを交換によつて獲得するといふ魔力をもつようになったのか？ いまこれらのすべての問題に答へることは、經濟學の偉大なる創始者、スミスおよびリカルドにはできなかった。各商品の交換價值の中に、同じくまた貨幣の中に、單なる人間労働が潜んでゐるといふこと、そしてそのために各商品の價值は、その商品の生産に多くの労働が要せられれば要せられる程大であり、反對の時には小であるといふこと——即ちそういふ發見は漸やく半面の眞理を語るものにすぎない。眞理の他の半面は、一體如何にして、また何故に、人間労働が交換價值といふ奇妙な形をとり、しかも貨幣といふ謎の如き形態をとるかといふ問題を説明することに存する。經濟學の創始者たる、かのイギリス人は、一度も後の方の問題を提出したことはなかつた。何故なら彼れ等は、人間労働が交換のための商品をつくり、貨幣をつくるといふことは、人間労働の生來の、自然に具はつた性質であるとして見たからである。といふのは、これを別の言葉でいへば、人間は食つたり飲んだりしなければならぬと同様に、また頭に毛があり顔に鼻があると同様に、生來自分の手で取引のための商品を生産しなければならぬものだ、彼れ等は見做してゐたからである。彼れ等はこのことを餘程固く信じてゐたのであつて、たとへばアダム・スミスの如きは、大眞面目で、動物がすでお互ひに取引をやつてゐないかどうかといふ問題を提出し、未だ動物間にはこゝろいふ例は認められないといふ理由だけでこのことを否定してゐる程である。彼れは言ふ「それ（分業）は非常に緩漫に且つ漸次に現はれたものではあるが、人間の天性に具はつてゐる或る性癖……即ち、交換

し、融通しあひ、一物を他物と取りかへる性癖の必然の結果である。この性癖が人間の天性——それについてはこれ以上述べないが——の根本的原則の一つであるかどうか、或ひは——この方が一層眞實らしく思はれるが——理性や言葉の能力の必然的結果であるかどうかといふことは、こゝで研究する事柄ではない。それはあらゆる人間に共通なものであり、動物の他の種類には見出し得ないものである。同じく動物はどんな種類の契約をも知らないように見える。*

しかしこの無邪氣な假定は次ぎのことを意味するに外ならぬ。即ち經濟學の偉大なる創始者、
 ちは、すべてのものが商品であり、すべてのものが取引のためにのみ生産されてゐるところの今日の資本主義社會制度は、人類がこの地上に生存する限り存続するところの唯一の社會制度であるといふ、岩のような堅固な觀念をいだいてゐたといふことを意味するだけのものである。社會主義者として、資本主義制度を永遠且つ唯一の可能な制度でなく、推移的歴史的社會形態であるとしたカール・マルクスが、初めて今日の關係と以前の他の時代における關係との比較を試みたのであつた。茲において、人類は數千年の間、貨幣や交換について多く知るところなしに生活し、労働してゐたことが明らかになつた。社會に共同的計劃的労働が止み、社會が私有財産を伴へる獨立自由の生産者の弛い無秩序的な塊りとなるにつれて、初めて交換は、分散せる個人とその勞

* アダム・スミス著『國富論』第二章より。（原稿にはこの引用の箇所が空けられてある。この引用は編者が推定してこゝに入れたのである。）

働とを一個の聯絡的な社會的經濟に糾合する唯一の手段となつた。生産から出發した共同的經濟計劃の代りに、今や貨幣が現はれて唯一直接の社會的結合手段となつた。しかもそれは何等特別の効用をもたぬ人間労働の一片として、幾多の異つた私的労働間の唯一の共通物を代表してゐるといふことによつて、従つて人間の私的生活における如何なる用途にも役立たぬ全く無意義な生産物だといふそのことによつて、貨幣が唯一の社會的結合手段となつたのである。それだからこの無意味な發明が一の必然なのであつて、これがなかつたなら交換が一般に不可能であり、原始共產主義の解體以來今日までの全文化史が不可能となつたであらう。なるほどブルジョア經濟學者も、貨幣を極めて重要にして缺くべからざるものと見做してはゐるが、それは單に商品交換の外見上の便宜といふ見地からだけである。實際貨幣のことをそう言へるのは、人類はたとへば宗教を便宜のために發明したと言へるほどの意味においてのみである。事實上貨幣と宗教とは人類の二大文化産物であるが、それは全く一定の推移的關係に根ざしてゐるものであつて、それが成立したときと同じように、矢張り時が經つにつれて無用のものになつてしまふ。金生産のための年々の莫大な支出も、宗教儀式のための支出も、監獄、軍國主義、公共慈善事業のための支出も———そういふものは今日社會的經濟の重荷となつてゐるが、こゝにいふ經濟形態が存立してゐる場合には必要なものである———すべてこれらの支出は、商品經濟の廢止と共にのおのづからなくなつてしまふであらう。

吾々は商品經濟の內的機構を學んできたが、今や商品經濟は不思議なほど調和的な、そして道

徳の最高原則の上に立つた經濟制度のように見える。何故なら第一に、實に完全な個人的自由が行はれてゐて、各人は自分の好みによつて、どういふ風にも、何に向つてでも、またどれだけでも好きなだけ自由に労働する。各人は自分自身の主人であつて、自己の利益を目指して行きさへすればよいのである。第二に、各人が自分の商品即ち自分の労働生産物を他人の労働生産物と交換し、労働が労働と交換される。しかも平均においては等量の労働が等量の労働と交換されてゐる。故にまた利益の完全なる平等と相互主義とが行はれてゐる。第三に、商品經濟の場合には商品は商品とのみ、労働生産物は労働生産物とのみ交換される。故に提供すべき労働生産物を何も持つてゐない人間、労働しない人間は、食ふものを何も手に入れることができないであらう。故に矢張りこれも最高の公平なのである。事實において、營業目的の完全な勝利のために戦ひ、ギルド制度や封建的農奴制度といふ舊支配關係の最後の遺物の廢止を主張した十八世紀の哲學者や政治家、かのフランス大革命の人士は、自由、平等、友愛が行はるべき地上の樂園を人類に約束したのである。

十九世紀前半における多くの顯著な社會主義者も、まだ矢張り同じような意見であつた。科學的經濟學が樹立され、すべての商品價値は人間労働に基礎を置くといふ、スミス、リカルドの偉大なる發見が行はれた時、たちどころに労働階級の二三の友は、商品交換が正當に行はれれば、社會には完全な平等と公平とが行はれるに相違ないといふ考へになつた。労働は常に等量の労働とのみ交換されるのだから、富の不平等が起きることは不可能であつて、高々よく働く者と怠け

者との間の報酬上の不平等があるにすぎない。そして社會の富は悉く勞働する人間、即ち勞働階級に屬しなければならぬ。従つてそれにも拘らず、今日の社會において人々の状態に大きな差異があり、富と並んで貧困があり、しかも働かない人間が富を擁し、すべての價値を勞働に依つて創造する人間に貧困があるのを見るならば、これは明らかに交換の際の不正から生ずるものであり、しかも勞働生産物の交換の際に貨幣が媒介者として介在してゐるといふ状態のおかげで生じたのに違ひない。貨幣はすべての富がまことは勞働に由來するといふことを掩ひかくし、絶えず價格の變動を引き起し、従つて勝手な價格の生ずる可能性を與へ、他人を犠牲にして富をかき集める可能性を與へる。だから貨幣をどうにかしてしまへ！ ころいふ貨幣の廢止を主張する社會主義は、最初イギリスに現はれたのであつて、十九世紀の二〇年代および三〇年代にトムソン、ブレイ等の非常に才能ある著述家によつて主張されてゐた。ついでこの同じ種類の社會主義は、プロシヤにおいて、ボメルンの保守的土地貴族にして異彩ある經濟學著述家ロドベルツスによつてもう一度發見され、更らに三度びフランスにおいて一八四九年にブルドーンによつて發見された。この主張に向つて實際上の試みさへ行はれた。上述のブレイの影響によつて、ロンドンやその他のイギリスの多くの都市に、謂はゆる「公平な勞働交換のための物品市場」が設立され、そこへ商品が持ち込まれて、貨幣の媒介によらずして嚴密に商品の中に含まれた勞働時間によつて交換された。ブルドーンもまたこの目的のために謂はゆる「庶民銀行」の設立を提案した。だが、そらいふ試みも、理論そのものも、間もなく破産するに至つた。貨幣によらない商品交換は事實

考へられない。そして彼れ等が廢止しようとした價格變動こそは、一商品の製出が少なすぎたか多すぎたか、その商品の製出に費やした勞働が必要よりも多かつたか少なかつたか、或は果して適當な商品をつたかどうかを、商品生産者に示す唯一の手段である。無秩序經濟における孤立的商品生産者間のこの唯一の了解手段がもしも撤廢されるときは、彼れ等は途方にくれてしまつて、曠どころか盲目にもなつてしまふ。そうしたら生産は停止し、資本主義のバベルの塔は崩壊して廢墟となつてしまふ。故に單に貨幣を廢止することによつて、資本家的商品生産から社會主義的商品生産をつくりださうとする社會主義者の計劃は全くの空想である。

しかしながら實際上において、商品生産の場合における自由、平等、友愛とは何ぞや。一般的商品生産の場合においては、各人が勞働生産物と引きかへにのみ他のものを手に入れることができ、等しい價格が等しい價格とのみ交換される、そらいふ場合に如何にして富の不平等が現はれ得るのだらうか？ しかるに今日の資本主義經濟こそは、誰れでも知つてゐる通り、人間の物質的地位に甚だしい不平等のあること、一方には少數者の手に巨富が集積され、他方には大衆の貧困が増大して行くといふことをその最も著しい特徴としてゐるのである。今までのことから論理的に生ずる今後の問題は、従つて次ぎの如き形をとる。曰く、商品經濟と價値通りの商品交換とが行はれる場合に如何にして資本主義が可能であるか？

第五章 貨銀法則

商品はすべてその價值に従つて、即ち商品に含まれてゐる社會的に必要な勞働に従つて、相互に交換される。貨幣が媒介者の役をつとめても、商品交換のこの基礎は少しも變らない。貨幣そのものが社會的勞働の赤裸々な表現にすぎないのであつて、各商品に含まれてゐる價值の量は、その商品を賣つて得た貨幣の量によつて表現される。この價值法則に基いて、市場における商品の間には完全な平等が支配する。そしてまた市場において至るところで交換に供せられる幾百萬といふ商品の種類の中で、全く特殊の性質をもつた或る一つの商品——勞働力といふ商品さへなかつたなら、商品の賣手の間には完全な平等が行はれたに相違ない。勞働力といふ商品は、他の商品を生産するための生産手段を自分では所有してゐない人々に依つて、市場に持ち出される。何人も知つてゐるように、専ら商品交換を基礎としてゐる社會においては、交換といふ方法によらずしては何物をも手に入れられない。市場に何等商品を提供しない人間は、何等生活資料を手に入れることはできないのである。商品は、その人間が社會的生產物に對して分け前を要求し得る唯一の證券であり、同時にこの分け前の尺度であることを吾々は知つた。各人は自分が社會的

に必要な勞働を、或る何等かの商品の形で供給したと丁度同じ量だけ、社會に給付された勞働を、擇り取り任意の商品で受取る。されば生活し得るが爲めには、何人も商品を提供し、それを賣らなければならぬ。商品を生産してそれを賣ることは、人間にとつて生存條件となつた。しかるに或る商品を生産するためには、勞働手段、即ち道具その他を要し、更らに原料や助成材料等、それから工場や職場、それに伴つてたとへば燈火設備といふような勞働の必要條件を要し、最後に生産の繼續中並びに商品の賣却まで持ち耐えて行くための、一定量の生活資料を要する。生産手段のための出費なくして生産されるのは、二三の微々たる商品だけである。たとへば森の中で採つた茸や果物、海濱の住人が磯邊で採つた貝殻等。しかしなほそれにも糞といふような一定の生産手段が必要だし、またどんな場合でも、そらういふ勞働の間生存を可能ならしめる生活資料が必要である。然しながらいづれも商品生産の發達した社會においては、大多數の種類の商品は、生産手段のために著しい出費を必要とし、或るものにあつては巨額の出費を必要とする。従つてこらういふ生産手段をもたない人間は、何等商品を生産することはできず、たゞ剩すところは自分自身を、即ち自分の勞働力を、商品として市場に持ち出すことだけである。

他のすべての商品と同じく、勞働力なる商品も矢張り一定の價值を有する。吾々の知つてゐるやうにすべての商品の價值は、その生産に要する勞働量に依つて決定される。勞働力なる商品を拵へるためには、矢張り同様に一定量の勞働、即ち勞働者のために生計即ち衣食等をつくり出す勞働が必要である。従つてまた人間を働けるようにするために必要な、即ちその勞働力を維持す

るために必要な労働の量が、彼れの労働力の價值に當るのである。故に労働力なる商品の價值は、労働者の生活資料の生産に必要な労働量によつて代表される。更らにまた、他のあらゆる商品の場合と同じく、労働力の價值は、市場において價格で、即ち貨幣で計量される。労働力なる商品の貨幣表現即ち價格を賃銀といふ。他のあらゆる商品の場合には、需要が供給よりも急速に増大した時にその價格は騰貴し、これに反して商品の供給が需要よりも大なる時は下落する。労働力なる商品に關してもまた同様である。即ち賃銀は、労働者に對する需要が増大した時に一般に騰貴する傾向を有し、需要が減退するか、労働市場が新ら手の商品を以て横溢するかした時は下落する傾向を示す。最後に、他のあらゆる商品の場合と同様に、労働力の價值、從つて結局はその價格は、労働力の生産に要する労働量が増大した時に騰貴する——即ちこの場合は、労働者の生活資料が、その生産にヨリ多くの労働を必要とする時である。そして逆に、労働者の生活資料の生産に必要な労働の節約は、いづれも労働力の價值の下落を誘致し、從つてその價格即ち賃銀の下落に導く。一八一七年にダビッド・リカルドは記して曰く、「帽子の生産費が減少すれば、たとへ需要が二倍三倍または四倍するとも、帽子の價格は結局は新たな自然價格まで低下するであらう。人間の生活費が、その生活に必要な衣食の自然價格の下落によつて減少すれば、たとへ労働者に對する需要が著しく増大した場合でも、賃銀が下落するのを見るであらう。」

されば労働力なる商品が、市場において他の商品と區別される點は、差し當つてまづ次ぎの點以外にはない。即ち労働力はその賣手即ち労働者と不可分のものであるといふ點、他の大多數の

商品は、多かれ少かれ、賣れるまでの期間を仲々よく持ち耐えて待つてゐることができるとに反して、労働力はそうしてゐては、生活資料の缺如のために、その持ち手である労働者と一緒に滅亡してしまふから、從つて長い間買手を持つてゐることはできないといふ點である。されば労働力なる商品の特殊性は、交換價值のみが役割を演ずるところの市場では、まだ現はれるものではない。その特殊性は別なところに、即ち労働力の使用價值の中に存してゐる。商品はすべて使用される時に効用をもたらし得るから買はれる。靴は足に穿くために買はれ、茶碗は茶を飲むために買はれる。買はれた労働力は何に役立ち得るか。言ふまでもなく労働のためである。然しそれだけではまだ一向何もわからない。人間社會が存在する限り、人間はすべての時代に働くことができたし、また働かねばならなかつた。しかもなほ賣買される商品としての労働力が全然知られずして數千年も經過してゐる。また他方において、人々がその全労働力を以てして、漸やく自分だけの生計を維持し得るものと假定するなら、そういふ労働力を買ふこと、即ち商品としての労働力は意味をなさないであらう。何故なら或る人が労働力を買ひ、それに金を拂ひ、彼れ自身の所有する生産手段を用ゐて働かせ、最後にその結果、彼れの買つた商品の持ち手即ち労働者のための生計だけしか得られないとすれば、労働者はその労働力を賣ることによつて、他人の生産手段を借りて自分のために働くといふことになるからである。商品交換の見地からすれば、それは恰かも靴を買つて、後に改めてそれを靴屋に贈物として返却するのと同じ無意味な取引である。人間の労働力が他人の使用を許さないなら、それは買手にとつて何の効用をも有しないだらうし、

従つて商品として市場に現はれ得ないだらう。何故なら一定の効用を有する生産物のみが、商品としての役目を演ずることが出来るからである。故に労働力が一般に商品として現はれるためには、人間が生産手段を與へられた場合に労働し得るといふだけでは充分ではなく、彼れ自身の生活資料の生産に要するよりも餘計に働き得るといふことが必要である。その人間は單に自己の生計のためばかりでなく、その労働力の買主のためにも労働し得るのでなければならぬ。故に労働力なる商品は、その使用即ち労働の際に、單に労働力自身の價格即ち賃銀を補償し得るばかりでなく、それ以上になほ剩餘労働を相手に供給しなければならぬ。そして労働力なる商品は、事實上にまたこゝにいふ結構な性質をもつてゐるのである。しかしそれはどういふことを意味するの
か？ 労働者が剩餘労働を給付し得るといふのは、人間の、または労働者の生來の性質なのだらうか？ いま人間が數年かゝつて石で斧を造つたり、たつた一つの弓を造り上げるのに數ヶ月も要したり、また二つの木片を何時間も擦り合せて火をおこしたりするような時代には、如何に狡猾な向ふ見ずの企業家と雖も、一個の人間から剩餘労働を搾り出すことはできまい。故に人間が一般に剩餘労働を給付することが出来るためには、人間の労働生産性が一定の高さに達してゐることが必要である。言ひかへれば、人間の力が自己のための生活資料だけでなく、それ以上のものをつくり出すことができるためには、従つてまた必要とあらば他人のためにも生産することが出来るためには、人間の道具、熟練、知識、自然力に對する支配が、すでに充分な程度に達してゐなければならぬ。そしてそゝいふ道具の完成、知識、自然に對する或る程度の支配は、數千年

に互る人類社會の苦しい經驗によつて初めて得られる。最初の粗末な石器や火の發見から、今日の蒸氣機械等にいたる距離は、人類の全社會的發展道程を意味するものであつて、この發展こそは社會の内部においてのみ、即ち人類の社會的共存と協働によつてのみ可能であつた。故に今日の賃銀労働者の労働力に、剩餘労働を給付するといふ結構な性質を賦與するところの労働生産性なるものは、自然から賦與された人間の生理的特性ではなくて、社會的現象であり、長い發展史の成果である。労働力といふ商品の剩餘労働なるものは、一人の人間の労働によつて多數の人間を養ふことのできる社會的労働の生産性の、別個の現はれにすぎぬ。

しかしながら労働の生産性は、必ずしも常に、且つあらゆる場合に、労働力の賣却や労働力の資本家的搾取を誘致するわけではない。特に都合のよい自然條件によつて、労働の生産性が既に原始的な文化段階において可能になつてゐる場合でもそうである。しばらく天惠豊かな中央アメリカや南アメリカの熱帯地方に身を置いて見よう。そこはアメリカ發見後、十九世紀の初めまでスペイン領であつて、どの地方も熱い氣候と豊饒な土地とをもつてゐて、住民はバナ、を主要食物としてゐる。フンボルトは記して曰く、「地球上に、こんな狭い地面でこんなに多量に食糧を産出する植物が、バナ、以外にあるだらうか」と。なほ彼れは計算して曰く、「大きな種屬のバナ、を植ゑた半ヘクターの地面は、五十人以上の人に食糧を供給する。然るにヨーロッパにおいては、同じ半ヘクターの地面が、大豊作の時でも一年に漸やく五七六キログラムの麥粉を供給するにすぎぬ。それは二人分の生計にも不十分な量である」。それにバナ、は極く世話が要らず、たゞ根

の周りを簡単に一二度掘り返せばよいのである。フンボルトはなほ續けて言ふ、「コルデイレル山の麓ヴェラクルツ、ヴァラドリッド、ガダラクタラ等の潤澤な谷地では、一人が一週三日の無造作な労働で、全家族の生活資料をととのへてゐる」と。こゝでは労働の生産性が、それ自體としては搾取を可能ならしむることは明らかであつて、マルサスのように生粋の資本家的根性をもつた學者は、この地上の樂園を記述するに當つて、眼に涙さへ浮べて、「無限の富を生産するため何とすばらしい手段だらう！」と叫ぶのである。即ちこれを別な言葉でいへば、こゝにいふ意匠者を眞面目に働かせることができたなら、これらのバナ、大食家の労働から、抜目のない企業家のために如何に見事に澤山の金が打ち出されることだらうといふ意味である。しかし實際上に吾々が目撃するところは如何。この恵まれた地方の住民は、金を積むために辛勞しようなどとは考へず、一寸そこいらの木を探して、バナ、を食つて、長い自由な時間を日向に寝ころんで生を楽しんでゐた。フンボルトはまた極めて注意すべきことを述べてゐる、「スペインの植民地では往々こゝにいふことを耳にする。熱帯の住民はバナ、の木が國王の命令によつて根絶されるまでは、何百年経つてもこゝにいふ無關心の状態を脱するものではない」と。このヨーロッパ人的な資本家的見地から見た「無關心」なるものは、取りも直さず、人間の自然的欲望の満足のみが人間労働の目的であつて、富の集積がその目的としてまだ現はれてゐない原始共產主義の事情の下に生活してゐるすべての民族の精神状態である。ところでこゝにいふ事情が行はれてゐる限りは、労働の生産性が如何に大きくあつても、一人の人間を他人が搾取するといふこと、人間の労働力を、剩

餘労働の生産に利用するといふことは考へられない。

とはいへ近世の企業家が、人間労働力のこの結構な性質を最初に発見したのではなかつた。事實吾々はすでに古代において、労働しない人間が剩餘労働の搾取を行つてゐるのを見る。古代の奴隸も、中世における徭役制度や農奴制度も、いづれも既に或る程度に發達した生産性に立脚してゐる。即ち人間労働の能力が一人の人間以上を養ひ得るといふことがその基礎となつてゐる。またこの兩者は、社會の一階級がこの労働の生産性を利用して、他の階級から養はれてゐたといふ點では同じであつて、たゞその形態を異にしてゐるだけである。この意味において古代の奴隸も、中世の農奴も、等しく現今の賃銀労働者の直接の先驅である。しかしながら古代においても、中世においても、そゝにいふ生産があつたにも拘らず、また搾取されてゐたにも拘らず、労働力が商品にはならなかつた。今日における賃銀労働者の企業家に對する關係が、奴隸制度や農奴制度と異つてゐる點は、何よりもまづ労働者が人身的に自由であるといふ點である。商品を買うといふことは、言ふまでもなく人間の完全なる人身的自由を基いた任意的な私的取引である。自由でない人間はその労働力を賣ることではできぬ。だがそれには更らにもう一つ條件として、労働者が何等生産手段を所有してゐないといふことが必要である。生産手段を所有してゐたら自ら商品を生産し、自分の労働力を商品として賣り渡しはしない。従つて労働力が生産手段から引き離されてゐるといふことは、人身的自由と相俟つて、今日労働力を商品たらしめるものである。奴隸經濟にあつては、労働力は生産手段から引き離されてゐないばかりか、却つて労働力そのものが一

個の生産手段を成してゐて、道具や原料などと並んで私有財産としてその主人に屬してゐる。即ち奴隷はそれ自身奴隷所有者の澤山の生産手段の一部をなしてゐて、他の生産手段と何等區別がない。また徭役制度においては、労働力は法律で直接に生産手段即ち土地に繋かれ、全然それに隷屬してゐて、農奴自身が生産手段の一部にすぎぬ。徭役や納貢は實に人間が行ふのでなく、土地が行ふのである。土地が遺産や何かとして他の労働する人間の手に移る時は、納貢もその際に繋がる。然るに現今では労働者は人身的に自由であつて、何人の財産でもなければ、生産手段に繋かれてもゐない。反對に生産手段は一方の手に、労働力は他方の手にあり、しかもこの所有者二人は、獨立な自由な人として、賣手および買手——資本家が労働力の買手、労働者がその賣手——として對立してゐる。

しかし人身的自由があつても、労働力が生産手段より分離してゐても、また労働の生産性が高度に進んでゐても、必ずしも常に賃銀労働、労働力の賣却を誘致するわけではない。奴隷經濟を伴つた大貴族所有地が形成されたために、自由小農の集團が自分の土地から驅逐された時の古代ローマにこの例を見る。彼れ等は依然人身的には自由であつたが、土地即ち生産手段をもたなかつたので、田舎からローマへ、自由なプロレタリアとして群をなして入つて來た。それにも拘らず、彼れ等はその時に自分の労働力を賣ることはできなかつた。何故なら買手を發見することができなかつたからである。富裕な地主や資本家は、奴隷に養はせてゐたので、自由な労働力を買ふ必要がなかつた。奴隷労働は當時完全に地主の生活欲望を充たしてゐた。地主はできること

は何でも奴隷の手でやらせてゐたのである。しかし奴隷に生産させる目的は、自分自身の消費だけで、商品を賣ることではなかつたので、彼れ自身の生活と奢侈のため以上には奴隷の労働力を使用することはできなかつた。そこでローマのプロレタリアは、自分自身の労働に對してあらゆる生活の源泉を塞がれ、乞食となつて路傍で食を乞ひ、時々の生活資料の分配によつて生きる外はなかつた。かくして古代ローマにおいては、賃銀労働が生まれずに、國家の費用を以てする無産自由民の大仕掛の救済が行はれるに至つたのである。それ故にフランスの經濟學者シスモンチは曰く、古代ローマにおいては、社會がそのプロレタリアを養つてゐた、今日ではプロレタリアが社會を養つてゐると。しかし今日プロレタリアが、自己および他人を維持するために労働することができ、その労働力を賣ることが可能であるのは、今日自由労働が生産の唯一の形態だからであり、商品生産としての労働が直接の消費に向けられてゐるのでなく、賣るための生産物の生産に向けられてゐるからである。奴隷所有者は奴隷を自分の安逸および奢侈のために買ひ、封建領主はそれと同じ目的のために、即ちその一族と共に驕奢な生活をするために、徭役農民から労働や租税を搾つた。然るに近世の企業家は、労働者をして、食糧、衣服、奢侈品等を彼れ自身の使用のために生産させるのでなく、賣つて貨幣を得るために商品を生産させるのである。そしてまさしくこの仕事こそ、労働者を賃銀労働者たらしめると同様に、彼れを資本家たらしめるのである。

されば労働力を賣るといふ單なる事實は、或る一定の社會的および歴史的關係のひとつつながり

を示唆してゐることを知る。即ち労働力が商品として市場に現はれるといふ單なる事實が、次ぎの諸點を示してゐる。一、労働者が人身的に自由であること、二、労働者が生産手段から離れてゐること、並びに労働しない者の手中に生産手段が集まつてゐること、三、労働の生産性が高度であること、即ち剩餘労働を行ふ可能性があること、四、商品經濟が一般的に行はれてゐること、即ち賣るための商品形態において剩餘労働をつくり出す目的で、労働力の購買が行はれてゐること。

市場から外部的に見れば、労働力なる商品の賣買は、靴や懷中時計を買ふと同じく、毎瞬間幾千となく行はれてゐるところの、全くありふれた取引である。商品の價值とその變化、商品の價格とその變動、市場における買手と賣手との平等と獨立、取引の自由——すべてがあらゆる他の商品の場合と全く同じである。しかしながらこの労働力といふ商品の特殊な使用價值によつて、またこの使用價值を初めてつくり出すところの特殊な事情によつて、商品世界のこの日常の市場取引が、全く特殊な新しい社會的關係となる。吾々は次ぎにこの市場取引から如何なるものが發露するかを見よう。

二

企業家は労働力を買ひ、すべての買手と同じく労働力の價值、即ち労働力をつくり出す費用を支拂ふ。即ち労働者の生計を充たす或る價值を賃銀として支拂ふのである。しかしながら買はれ

た労働力は、社會において平均的に使用される生産手段を以て、單なる自己の生計費以上のものをつくり出すことができる。このことは既に吾々の知る如く、すべて労働力の取引の前提となつてゐるのであつて、そうでなかつたらこの取引は無意味である。この點に労働力なる商品の使用價值がある。然るに労働力の生計の價值は、他のすべての商品の價值と同じく、それをつくり出すに必要な労働の量によつて決定されるのであるから、吾々は労働者を日々労働し得る状態に維持してゆくに必要な食物、衣服等が、その生産に、たとへば六時間の労働を要すると假定することが出来る。そうすると労働力なる商品の價格、即ち賃銀は、普通に六時間の労働を貨幣の形にしたものでなければならぬ。然るに労働者は企業家のために、六時間働くのでなく、もつと長くたとへば十一時間働くものである。そうすると彼れはこの十一時間のうち、まづ初めに六時間で以て受取つただけの賃銀を企業家に償却し、その上になほ五時間分だけ無料で働いて企業家に捧げたことになる。故にすべて労働者の労働日は、必然的に且つ普通に二つの部分から成る。一つは支拂はれた部分であつて、即ち労働者が自分自身の生計の價值を償ふだけのもの、謂はゞ自分のために働く部分と、もう一つは支拂はれざる部分、即ち資本案のために贈物の労働、即ち剩餘労働を行ふ部分とである。

往時の社會的搾取の形態にあつても、これと同様な事情にあつた。農奴時代には農奴の労働は、自分のための労働と領主のための労働とに、しかも時間的にも空間的にも分れてゐた。何時、どれだけ自分のために働き、何時、どれだけ慈悲深い領主の貴族や僧侶を養ふために働くのかを、

農民は極く精密に知つてゐた。即ち農民は最初に數日自分の畑で働き、次に二三日領主の畑で働くか、または午前中自分の畑で働き、午後領主の畑で働くか、それとも數週間續けて自分の畑でのみ働き、それから數週間を領主の畑で働くかしてゐた。たとへばエルザス州マウルスミュンスター寺領の一村では、十二世紀中頃の徭役労働は次ぎのように定められてゐた。即ち四月半ばより五月半ばまでは、各農家が一人づゝの男子を一週に三日間差出し、五月より夏至までは一週午後半日、夏至より七月までは一週三日、收穫時には一週午後半日づゝ三日、聖マルチン祭（十一月十一日）よりクリスマスまでは一週三日。尤も中世の後期になると、奴隸制度の發達と共に領主のための労働が漸次増大してきて、間もなく一週間のうち殆んど毎日、また一年のうち殆んど毎週徭役に宛てられるようになり、農民は自分の畑を耕やす時間が殆んどなかつた。しかしその時でも農民は、自分のために働いてゐるのでなく、他人のために働いてゐるのだといふことをハッキリと意識してゐた。これはどんな愚昧な農民でも瞞され得なかつた。

然るに近世の賃銀労働の場合は様子がまるで違ふ。労働者はまづ労働日の初めの部分で、自分が使ふ物、即ち自分の食糧衣服等をつくつて、それから後に企業家のために別のものを生産するのではない。反對に工場や仕事場における労働者は、終日たゞ一つのもの、たとへば鋼鐵發條だとか護謨帶だとか、絹布だとか鐵管だとか、自分の個人的消費に極く僅かしか使用しないか、或は全然使用しないものばかりを生産してゐる。終日かゝつて造り出したひと山の鋼鐵發條だとか護謨帶だとか織物だとかは、どの一片を取つて見てもどれも寸分違はないものに見えて、どの部

分が支拂はれた分、どの部分が支拂はれない労働だか、どの部分が労働者のためのもので、どの部分が企業家のためのものか、それを見ただけでは少しも區別がつかない。同様に、労働者が労働を加へた生産物は、彼れにとつては全然効用のないものであるばかりか、その中の一片でも労働者のものではなく、労働者が生産するものはすべて企業家のものである。この點において賃銀労働と徭役との間には大きな外面上の差異がある。農奴は普通の事情の下では、自分の畑で働くため無條件に幾らかの時間をもつてゐなければならなかつたし、そして自分のために働いた分は矢張り自分のものであつた。ところが近世の賃銀労働者の場合は、その全生産物は企業家に屬し、従つて工場でした労働は、自分の生計とは少しも關係がないかのように見える。労働者は賃銀を受取つたのだから、それを何にでも使へる。その代り企業家の言ひ付け通りに労働しなければならぬし、従つて生産したものはすべて企業家のものだといふ風に考へられる。しかしこの差異は労働者にとつて認めにくくとも、後になつて企業家が労働者の生産から収益を勘定するときに、その勘定の上に明らかに現はれてくる。これは資本家にとつては、生産物の賣却後に受取る貨幣額と、生産手段並びに労働者の賃銀に對する支出との差額である。そこで企業家に利潤として残るものは、まさに不拂労働でつくられた價值、即ち労働者がつくつた剩餘價值である。故にすべて労働者は、護謨帶だとか絹布だとか鐵管だとかばかりを生産してゐる場合にも、最初に自分の賃銀を生産し、それから資本家のために捧げる價值を生産するのである。たとへば彼れが十一時間で絹布十一メートルを織るとすれば、そのうち六メートルは彼れの賃銀の價值を含み、

そして五メートルは企業家のための剰餘價值である。

しかし賃銀労働と奴隷労働または徭役労働との差別は、もつと重大な結果を有してゐる。奴隷も徭役農民も、主として主人自身の個人的欲求のため、主人の消費のために労働を提供した。即ち主人のために食糧、衣服、什器、奢侈品等をつくつた。とにかくこれが、商業の影響で奴隷制度と徭役制度とが頽廢して滅亡するに至る以前の常態だつたのである。しかし人間の消費能力も私的生活における奢侈も、いかなる時代にも或る一定の限界をもつてゐる。幾棟かの穀倉、既、豊富な衣服、自分自身並びに館全體のための豪華な生活、立派に飾つた部屋——古代の奴隷所有者や中世の貴族はこれ以上のものを必要とし得なかつた。然るにそういふ日用品は、悪くなつてしまふから一時に澤山蓄へて置くわけには行かぬ。穀物はぢきに腐朽したり、鼠に食はれたり、乾草や藁はぢきに腐蝕し、衣服は破損したりしてしまふ。乳や果物や野菜は一般に貯藏に耐えない。故に奴隷經濟や徭役經濟における消費には、どんな豪華な生活でもなほ自然的限界があり、従つて普通は奴隷や農民を搾取するにも制限があつた。然るに商品生産のために労働力を買ふ近世の企業家にあつてはそうではない。労働者が工場または仕事場で生産するものは、たいてい彼れ自身にとつて全く無用のものであるが、同じく企業家にとつても矢張りそうである。企業家は買つた労働力に自分の衣食を拵へさせないで、何か自分には少しも用のない商品を生産させる。絹布や鐵管や棺桶を生産させるのは、できるだけ早くそれを手離すため、賣るためである。それ賣つて貨幣を得んために生産させるのである。そして企業家は自分の支出を取り戻すばかりで

なく、労働者の捧げた剰餘労働をも貨幣の形で受取る。労働者の不拂労働を貨幣に代へるといふたゞその目的のために企業家は取引を行ひ、労働力を買ふのである。然るに貨幣は吾々の知るやうに、富を無制限に堆積する手段である。貨幣の形を取れば、富はどんなに長く貯藏してゐても價值を少しも減じないのみか、却つて後に説くやうに、單に貯藏するだけで増大するやうにさへ見える。それに貨幣の形を取れば、富はその限界を知らず、無限に増大し得る。それに應じてまた剰餘労働に對する近世資本家の貪慾もその限界を知らぬ。労働者から不拂労働が引き出せれば引き出せる程よい。剰餘労働を搾り出すこと、しかも無制限に搾り出すこと——これが労働力を買ふ本來の目的であり、任務である。

この労働者から搾り出す剰餘價值を増大させようとする資本家の性來の動機は、何よりもまづ二つの簡單な方法を見付け出してゐるのであつて、これは労働日の組立てを見ると謂はゞ自然と姿を出してくるものである。各賃銀労働者の労働日は、普通二つの部分から成り立つてゐること、即ち労働者が自分の賃銀を償ふ部分と、不拂労働即ち剰餘労働を提供する部分とから成り立つてゐることを吾々は知つた。故にこの第二の部分でできるだけ大きくするには、企業家は二つの方面から取りかゝることができる。即ち労働日全體を延長するか、それとも労働日の第一の支拂部分を短縮するか、つまり労働者の賃銀を引下げるかである。事實上資本家はこの二つの方法を同時に持つてゐる。従つて賃銀労働制度には不斷に二様の傾向、即ち労働時間を延長する傾向と、賃銀を切詰める傾向とが生じてゐる。

資本家が労働力なる商品を買ふのは、すべての商品におけると同じく、そこから或る効用を引出すためである。たとへば吾々が靴を買ふ場合には、できるだけ長くそれを用ひようとする。その商品の充分な使用、すべての効用は商品の買手のものである。故に労働力を買つた資本家が、その商品が自分にとつてできるだけ長く、またできるだけ多く役立つことを欲するのは、商品交換といふ見地から見ると全く正當なことである。資本家が労働力に對して一週間だけ支拂つたとすれば、一週間分の使用は資本家の勝手次第であつて、買手としての立場から、一週間の間は労働者を、できれば毎日二十四時間の倍も働かせる権利をもつてゐる。然るに他方においては労働者は、商品の賣手として全く反對の立場にある。労働力の使用は如何にも資本家の勝手次第ではあるが、資本家は労働者の肉體的並びに精神的給付力に使用の限度を見出すのである。馬は毎日毎日八時間以上働かされれば倒れてしまふ。人間も矢張り労働に費やした力を恢復するためには、衣食や休養等に或る一定の時間を必要とする。労働者にそれがなければ、労働力は用に立たぬばかりでなく減却してしまふ。過度の労働のために労働力は弱り、労働者の生命が短くなる。故に資本家が労働力を無制限に使用して、一週間毎に七週間分づゝ労働者の生命を短縮するならば、それは恰も資本家が一週間の賃銀で三週間分をわが物としてゐるのと同じことである。故に商品取引といふ同じ立場から見ると、これは資本家が労働者から掠奪したことを意味する。されば資本家と労働者とは、共に商品市場といふ土臺に立つて、労働日の長さに關して二つの全く相反した立場を代表してゐるのであつて、労働日の實際上の長さは、資本階級と労働階級との闘争を通じ

て、力の問題として決せられる。故に労働日はそれ自體としては何等一定の制限を伴ふものではなく、時と處によつて、八時間、十時間、十二時間、十四時間、十六時間、十八時間等の労働日がある。そして全體として見れば、これは労働日の長さに關する幾百年に亘る闘争である。この闘争には二つの重要な區切りを見る。その第一は、すでに中世の終り、即ち資本主義が漸やくその最初の一步を踏み出し、ギルド支配の堅城がゆるぎ初めた頃の十四世紀から始まる。手工業の隆盛時代には、普通習慣になつてゐた労働時間はまづ十時間で、食事、睡眠、休養等の時間や、日曜、祭日の休息は極めて愉快に且つ几帳面に行はれてゐた。だが労働方法の緩慢な舊手工業にはそれでよかつたが、漸やく始まりつゝあつた工場企業には、それではいけなかつた。そこで最初に資本家が政府から贏ち得たものは、労働時間延長の強制法律だつたのである。十四世紀から十七世紀末までは、イギリスでもフランスでもドイツでも、専ら最短労働日に關する法律しかなかつた。即ち労働者や職人に對して、一定の労働時間——しかも多くは日に十二時間——より少く働くことを禁じた法律を見るだけである。労働者の怠惰に對する闘争——これが中世以來十八世紀に入るまでの大きな叫び聲であつた。ところが舊來のギルド手工業の力が破れ、全く労働手段をもたぬプロレタリア大衆が、唯だその労働力を賣る外に頼るところがなくなり、他方には熱病的な大量生産を以てする大マヌファクチュアが發生して以來、即ち十八世紀以後は局面が一轉した。こゝに年齢、性別を問はざる労働者の急激な、無制限の併呑が始まり、全労働人口が僅々數年のうちに恰かも疫病に罹つたやうに斃された。一八六三年イギリス下院の一代議士が

述べた言葉に、「木綿工業が始まつて九十年になる。……イギリス人種三代の間に、木綿労働者九代を食ひ盡してしまつた。」*またイギリスのブルジョア著述家ジョン・ウェードは、その著『中産階級および労働階級史』の中にこう述べてゐる、「工場主の貪慾と、利潤を追求する場合のその暴行とは、金をあさつてゐた場合のスペイン人のアメリカ銅色人に對する暴行に劣らなかつた。」** イギリスではなほ十九世紀の六〇年代においても、或る工業部門、たとへばレース工場では、九歳から十歳の小さな子どもが朝の二時、三時、四時から夜の十時、十一時、十二時まで働かされてゐた。ドイツにおいては、鏡裏箔業やパン焼業には最近まで、また出来合洋服業や家内工業には現在でも、上述のような状態が一貫して行はれてゐることは周知の通りである。近世の資本主義工業が、初めて従来知られなかつた夜業の發見をしたのである。従來のあらゆる社會状態を通じて、夜といふものは、天然自然から人間に休息のために與へられた時間と見做されてゐた。然るに資本家的經營は、夜間に労働者から搾取した剩餘價值も、晝間搾取したものと同様に變りがないことを發見して、晝夜業を實施したのである。同様に、中世にはギルド手工業が嚴格に守つてゐた日曜日も、資本家の剩餘價值慾の犠牲にされて、他の一般の労働日の中に繰込まれてしまつた。なほそれに加へて、労働時間延長のための十數の小發見が行はれた——休みなし

*『資本論』第一卷、第二二九頁。「第三篇第八章第五節。」

** 同上第二〇四頁。「第三篇第八章第三節、註六四。」

に労働中に食事をとることや、機械の掃除を規定の労働時間中でなく、労働時間が終つてから、即ち労働者の休憩時間中に行はれることなどである。

最初の數十年間全く自由に無制限に行はれてゐた資本家のこゝろいふ遣り方は、やがて労働日に關する一連の法律を新たに必要とした。こんどは労働時間の強制的延長のためではなくて、その短縮のためであつた。しかも最長労働日に關する最初の法規は、労働者の壓迫によつて強制されたよりも、むしろ資本家社會の單なる自己保存の動機によるものであつた。放肆無制限な大工業經濟の最初の二三十年は、労働大衆の健康と生活状態とに破滅的な影響をおよぼし、驚くべき死亡、疾病、肉體的不具、精神的頹廢、流行病、軍隊の素質低下を惹起し、社會の存立そのものが徹底的に脅やかされたように見えた。* 剩餘價值に對する資本の自生的迫進が國家から制御されなかつたら、遅かれ早かれ全國を労働者の骨だけで埋つた大墓地と化するに至ることは明白であつた。だが労働者がゐなければ労働者の搾取はない。そこで資本は自分の利益から見て、將來も

* 國民皆兵制が布かれて以來、成人の平均的身長が次第に低くなり、それに伴つて徵兵法定身長も段々低くなつて行つた。フランスでは大革命以前は歩兵の最低身長は一六五センチメートルであつた。それが一八一八年の法律では一五七センチメートル、一八五二年以後は一五六センチメートルとなつた。フランスでは平均過半数は大きさが足りないのと盧福のためにはねられてゐる。サクソニーでは軍隊の標準身長は、一七八〇年には一七八センチメートル、一八六〇年代には僅か一五五センチメートル、またプロシヤでは一五七センチメートルであつた。ペルリンでは一八五八年には一五六人の兵士が不足だつたが補充兵の額當をすることができなかつた。

搾取を可能ならしむるためには、現在において搾取に幾らかの制限を設けたければならなかつた。民力は將來の搾取を保證するために、少しはいたはる必要があつた。不經濟的な掠奪經濟から合理的な搾取に移る必要があつた。最長労働日に關する最初の法律が、その他すべての社會改良と同じく發生するに至つたのは、そういふわけからである。これに匹敵する例を狩獵法に見る。鹿類を合理的に増殖させ、規則正しく狩獵の對象として役立たせ得るようにするために、これに一定の禁獵期を法律によつて保證してゐると同様に、社會改良は資本の合理的な搾取を可能ならしめるために、プロレタリアートの労働力に或る種の禁獵期を保證するのである。またはマルクスの言葉で言へば、工場労働の制限は農夫が畑に肥料を與へると同様な必要から強要されたものである。工場法は個々の資本家の抵抗に對する數十年間の惡戰苦闘を通じて、初めて婦人および小兒のために、それから個々の産業に對して一つ一つ行はれてきた。それに續いてフランスでは、一八四八年の二月革命が、勝利を得たパリのプロレタリアートの最初の壓迫の下に、初めて十二時間労働を宣言し、これはあらゆる労働部門のあらゆる労働者——成人労働者も含む——の労働時間に關する最初の一般的法律であつた。合衆國では奴隷を廢止せる一八六一年の内亂直後に、八時間労働に對する労働者の一般的運動が起り、そしてこの運動はヨーロッパ大陸に波及して行つた。ロシアでは婦人および少年に對する最初の保護法が、一八八二年モスコイ工場地域の大工場騷擾から生まれ、成人労働者に對する十一時間半労働が、一八九六年と九七年とにおけるベテルスブルグの六萬の纖維工業労働者の最初の總同盟罷業から生まれた。ドイツは今日婦人と小兒

だけに對する保護法を以て、他のすべての近代的大國家のあとを、覺東ない足どりで追つてゐる。吾々は今まで賃銀労働のたゞ一つの方面だけ、即ち労働時間の點だけを述べてきたのだが、すでにこれだけの範圍においても、労働力の賣買といふ單純な商品取引が如何に一種獨特の現象を伴つてゐるか分かる。だがこゝでマルクスの言葉を以て語る必要がある。「吾々は労働者が生産過程に入り込んだ時とは、別なものになつてそこから出て來るといふことを認めなければならぬ。市場においては、労働者は「労働力」なる商品の所有者として他の商品所有者と對立した、即ち商品所有者が商品所有者と對立したのである。彼れが契約によつて資本家に労働力を賣つたといふことは、彼れが自分自身のことを好きにできるものであることを、謂はゞ白地に黒く書いたやうにハッキリと證明したものである。然るに取引が結ばれた後になつて、彼れは決して「自由な契約當事者」でなかつたこと、彼れが一定期間その労働力を賣ることを自由にすることができたのは、その實その期間だけこれを賣ることを強制されたのであること、彼れの吸血者は「搾り取るべき一片の筋肉、一筋の腱、一滴の血のある間は」事實上離れないものであることが發見される。労働者は苦惱の蛇から身を「保護」するためには、互ひに結束して、階級として國家の法律を強取し、資本との自由契約によつて自分とそ一族とを死と奴隷に賣り込むことを、今後しな

労働者保護法なるものは、事實上、商品生産と商品交換との基礎となつてゐる形式的平等および自由は、労働力が商品として市場に現はれて以來すでに滅びてしまつて、不平等および不自由に化してゐるといふ事實に對する、現代社會の最初の公認である。

三

剩餘價值を増大するための資本家の第二の方法は、賃銀の引下げである。矢張り賃銀も労働日と同じく、それ自身としては何等一定の限界を伴つてゐるものではない。賃銀を論ずる場合は、何よりもまづ労働者が企業家から受取る貨幣と、彼れがその貨幣で以て手に入れる生活資料の量とを區別すべきである。労働者の賃銀について、たとへば一日二マルクだといふことだけ知つてゐても、それは何も知らないのと同じことである。けだし同じ二マルクでも、物價騰貴の時代には、物價の安い時代に比して極く少しの生活資料しか買へないからである。また或る一國ではこの同じ二マルク貨幣一個が、他の國におけるとは別の生活標準を意味する。否、一國の中でも殆んど各地方で異つてゐる。また労働者は以前よりも多額の貨幣を賃銀として受けながら、以前よりもよくないばかりか相變らずひどい生活をしてゐる。或は以前よりも一層ひどい生活をしてゐる場合もあり得る。故に貨幣賃銀は單なる名目上の賃銀であり、これに反して現實上の實質賃銀は、労働者が受取る生活資料の總量である。されば賃銀なるものは、労働力の價値の貨幣表現に外ならぬとすれば、この労働力の價値は、實際においては労働者に必要な生活資料に費やされた

労働量によつて代表される。だが「必要な生活資料」とは何か？ 一人の労働者と他の労働者と個人的區別は、この場合何の役にも立たないのだから、そういふものは度外に置くとして、國を異にし時代を異にするに従つて労働階級の暮らしが異つてゐるといふ、そのことがすでに、「必要な生活資料」といふ概念は極めて可變的な、伸縮的なものであることを立證してゐる。よい境遇の下にある今日のイギリス労働者は、ピフテキを毎日食ふことを生活に必要なだと思つてゐるし、支那の苦力は一握の米で生活してゐる。

このように「必要な生活資料」といふ概念が伸縮性をもつてゐるので、賃銀の大きさについて、労働日の長さについての闘争と同じ闘争が、資本家と労働者との間に發展してゐる。資本家は商品の買手としての彼れの立場に立つて言ふ、——労働力といふ商品に對して、すべての正直な買手と同じくその價値通りに支拂はなければならぬといふのは、如何にも正當なことだが、しかし労働力の價値とは何か？ 必要な生活資料とは何か？ よろしい、労働者に對して正確にその生活に必要なだけを與へよう。だが、人間一人の生命を保つために、どんなものが絶対に必要かといふことは、第一に科學、即ち生理學が教へ、次ぎに一般の經驗が教へてくれる。そして俺が寸分違はずその最低限だけを労働者に與へるのは言ふまでもないことだ。何故なら一文でも餘計に與へるとすれば、俺は正直な買手ではなく馬鹿者だといふことになり、買った商品の賣手に向つて、自分の財布から祝儀をくれてやる博愛者になるからだ。俺は、靴屋や煙草屋に對しても一文でも餘計に出さずに、その商品をできるだけ安く買はうとするのだ。矢張りそれと同様に俺は勞

働力をできるだけ安く買はうとするのだ。そして労働者に生きて行けるだけの最低限をカツキリ與へれば、それで俺も労働者も完全に五分五分なのだ。——資本家がこう言ふのは、商品生産の立場からすれば全く正當である。しかし労働者が商品の賣手として、これに答へて次ぎのように言ふのも、それに劣らず正當である。——如何にも吾々は労働力といふ商品の事實上の價值以上に何も要求しはしない。たゞ吾々は君がこの價值を充分に實際上にも吾々に支拂つてくれることを要求する。故に吾々は必要な生活資料以上のものは欲しないのだ。だが必要な生活資料とは何か？ 君は言ふ、それに對する答は、生理學といふ科學と經驗とが與へてくれる、そして人間一人の生命を維持するに最低限どれだけのものが必要かを教へてくれる。それで君は「必要な生活資料」といふ概念に、絶對的な、生理的な必要を置き換へてゐるのだ。これはしかし商品交換の原則に悖る。何故なら市場におけるすべての商品の價值は、その生産のために社會的に必要な労働を規準とするものであることは、吾々と同様に君も知つてゐることなのだ。靴屋が一足の靴を君に持つて來て、その製造に四日間労働したからといふ理由で二十マルクを要求したとすれば、君は靴屋に向つてこう言ふであらう、「こんな靴は工場から僅か十二マルクで買へる。工場では機械で以て一足を一日で造るからだ。だからお前の四日の労働は、機械を使用しないのだからお前には必要だらうが、——靴を機械で造ることはもう普通になつてゐるのだから——」社會的に考へると必要ではないのだ。だがそれは俺の知つたことぢやないのだから、俺は社會的に必要な労働だけに對して、即ち十二マルクだけをお前に支拂はう」と。君は靴を買ふ場合にそう振舞

ふに違ひないのだから、労働力といふ吾々の商品を買ふ場合にも、この労働力を維持するために社會的に必要な費用を吾々に支拂はなければならぬ。ところで吾々の生活にとつて社會的に必要なものは何かと言へば、この國でそして現在の時期で、吾々の階級の間一人の普通の暮らしと見做されてゐるすべてのものがそふなのだ。一言でいへば、君は、吾々の生命をやつと維持するだけの生理的に必要な最低限を、動物に與えてやるように吾々に與へるべきでなく、吾々の普通の暮らしを保證するだけの、社會的に普通な最低限を與へなければならぬのだ。それでこそ初めて君は正直な買手として、商品の價值を支拂つたのであつて、さもなければ商品の價值以下で買ふことなのだ。

かくて吾々は労働者が、純粹な商品の立場からして、少くとも資本家と同じ權利をもつてゐることを知る。しかし労働者はこの立場を、時が経つにつれて初めて主張し得るのである。けれど労働者がこの立場を主張し得るのは——社會的階級として、即ち全一體として、組織體としてのみだからである。労働組合と労働者黨との發生と共に、初めて労働者は自己の労働力をその價值で賣り始める。言ひかへれば社會的および文化的必要としての自己の生活標準を貫徹し始めるのである。しかしその國に労働組合が發生して、各個の産業部門には及ばないうちは、賃銀の形成にとつて規準となつてゐるものは、資本家が労働者の生活資料を、生理的な、謂はゞ動物的な最低限度に引下げんとする傾向、即ち絶えず労働力の價值以下に支拂はんとする傾向である。労働者の團結と組織とによる抵抗にまだ出合はなかつた資本の無拘束なる支配の時代は、工場法の實

施以前の労働時間の場合と同じように、賃銀に關する労働階級の野蠻的な退化を誘致した。それは労働者の生活から奢侈、安逸、快樂のあらゆる痕跡を無くしようとする資本の十字軍である。しかも往時の手工業や農業の時代から引續き習慣となつてゐたものに對してもそうであつた。即ちそれは家畜に飼草をやり、機械に油を注ぐと同じく、労働者の消費を、肉體に最少限度の飼料を注ぎ込むだけの、無味乾燥な行爲に低下させようとする努力である。かくて最も程度の低い、最も欲望のない労働者を以て、増長せる労働者に對して模範として、實例として説かれる。労働者の人間らしい生活に反對するこの十字軍は——資本家的工業と同じく——最初イギリスに始まつた。十八世紀に或るイギリスの著作家は歎いて曰く、「わが國の工場労働者が消費するあの澤山の無駄遣ひ。ブランデー・ジン酒、茶、砂糖、外國の果物、強いビール、形付きリンネル、喫煙草の驚くべき大量を見よ」と。當時イギリスの労働者には、フランス、オランダ、ドイツの労働者を儉約の模範として説かれてゐた。だから或るイギリスの工場主は次ぎの如く書いてゐる、「フランスでは労働がイギリスよりも三分の一安い。何故ならフランスの貧民（労働者はそう呼ばれてゐた）は、恐しく働き、ひどい衣食で我慢する。けれどその主なる消費は、パン、果物、野菜、根菜、乾魚であり、肉は極く稀れにしか食はず、それに小麦が高い時はパンを極く少量しか食はないから」と。十八世紀の初めに當つて、アメリカのグラフ・ラムフォードは、労働者の食物を廉くするための調理法を書いた労働者用料書を著した。この有名な書物は諸國のブルジョアジに非常な感激を以て歓迎されたものだが、その中の調理法の一つにこゝろいふのがあつた、「大麥

五ポンド、玉蜀黍五ポンド、餅三〇ペンニヒ、鹽一〇ペンニヒ、酢一〇ペンニヒ、胡椒と野菜二〇ペンニヒ——皆で二・〇八マルクで六十四人分のスープができる。それでも穀物の平均價格からして、一人當りの費用がなほ三ペンニヒ以下にはならない」と。南アメリカの鑛山労働者の日の労働は、おそらく世界で一番骨の折れるもので、一八〇ポンドから二〇〇ポンドの鑛石を擔いで、四五〇メートルの底から運び出すのがその仕事なのだが、ユスツス・リービヒの語るところによれば、彼れ等はパンと豆だけで生活してゐる。彼れ等は食糧としてまだしもパンだけを食べつてゐたかつたのだらうが、パンを食つてゐては激しく働けないと知つた雇主は、豆の方がパンよりも骨ごしらへにきよめがあるといふので、馬並みに無理やりに豆を食はせたのである。——フランスではすでに一八三一年に、労働者の最初の飢餓暴動があつた——リオンの絹織工の暴動である。しかし六〇年代の第二帝國の治世になつて、本統の機械工業がフランスに入り込んできた時には、資本は有頂天になつて賃銀を引下げた。企業家は廉い働き手を見出すために、都市から田舎へ趨つた。そして彼れ等はそこに日給一スウ（約二錢）、即ち約四ペンニヒで働く婦人のゐることを發見するに至つた。とはいへ、そゝいふ甘い汁は永くは續かなかつた。けれどそんな賃銀では、動物のような生活を營むにさへ足りなかつたからである。ドイツでは資本はそれに類似の状態を、まづ織維工業の中に移し入れた。そして生理的最低限度以下にさへ引下げられた賃銀は、一八四〇年代にシレジアやポヘミアにおける織工の飢餓暴動を惹起した。今日ドイツでは——農業労働者の間や出來合洋服業その他家内工業の種々の部門において——労働組合がその力を

生活標準に及ぼしてゐないところでは、いたるところ動物的最低限度の生活資料が賃銀の標準となつてゐる。

四

産業豫備軍の發生

労働の負擔をいやが上にも高め、労働者の生活標準をできる限りの動物的な程度に引下げ、部分的にはつとそれ以下に引下げるといふ點において、近世の資本家的搾取は、奴隸經濟と農奴制度とが極度に退化して崩壊に近づきつゝあつた場合の搾取に似てゐる。だが資本家的商品生産だけが専らもたらしたもので、以前の時代にはすべて全然知られてゐなかつたものは、労働者の部分的不就業、従つて労働者の不就業が不就業の現象となつてゐること、即ち謂はゆる労働者の産業豫備軍の發生である。資本家的生産は市場に依存するものであり、市場の需要に従はねばならぬ。然るに需要は絶えず變動し、謂はゆる好景氣、不景氣の年、季節、月を代る代る惹起する。資本は絶えずこの景氣の變動に順應しなければならぬ結果、時には多數の、時には少數の労働者を使用しなければならなくなる。従つて資本は、あらゆる瞬間において——市場で一番需要の多い時にも間に合ふように——必要な數だけの労働力を用意しておくためには、就業労働者の外に常に多數の不就業労働者を豫備としてもつてゐなければならぬ。不就業労働者はその限りでは何等賃銀を受けることなく、その労働力は買はれないで貯へられてゐるだけである。故に労働階級

の一部が使用されずにあることは、資本家的生産の賃銀法則を構成する本質的要素の一つである。そういふ失業者がどうして命を永らへて行くかといふことは、資本の關するところではないが、しかも資本はこの豫備軍を少しでも廢止せんとする企てがあれば、資本自身の生存の利益を脅やかすものとして排斥するのである。

この種の顯著な例を、一八六三年のイギリスの木綿恐慌に見る。アメリカの綿花の不足によつて、イギリスの紡績業と機業とが突然生産を中止しなければならなくなり、百萬人に近い失業者がパンに窮し、その一部は餓死の脅威を免れるためにオーストラリアに移住しようとした。そこで彼れ等は五萬の失業労働者の移住を可能ならしめるため、議會に向つて二百萬ポンドの協賛を要求した。ところが労働者のこの要求に對して、木綿工場主等は憤激の叫びを揚げて言つた、産業は機械なしにはやつて行けない、労働者は機械のようなものだ、だから労働者を貯へて置かなければならぬ。これらの餓ゑた失業者に突然去られては、「國」は四百萬ポンドの損害を蒙るのだと。そこで議會は移住基金を否決した。そして失業者は資本のための必要な豫備軍となるために、とどまつて餓死を待つた。——もう一つの際立つた例を、一八七一年にフランスの資本家が示してゐる。コンミュンの失敗後パリの労働者が、或は裁判の形式を伴つて、或は伴はずに途方もなく虐殺され、そのために一萬のプロレタリアが、しかも労働者中の最も有爲な精銳が殺された時、企業家連は一方に復讐を遂げた快感に浸りながら、一方に不安の念を起し、「人手」の貯へが不足になつたので、やがて資本が困るようになるだらうと心配し始めた。丁度その時は戦争

が終つた後なので、産業が活氣ある好景氣に面してゐる時であつた。そこで幾多のバリの企業家は、法廷を動かしてコンミュン戦士の告發を和らげ、労働の人手をサーベルの虐殺より救つて資本の腕たらしめようと奔走した。

産業豫備軍は、資本のために二つの機能をもつてゐる。第一に、事業が急激に活況を呈する毎にこれに労働力を供給すること、第二に、失業者の競争によつて就業者に絶えず壓迫を加へて、その賃銀を最低限度に引下げることである。

マルクスは豫備軍を、資本に對する機能と生活條件とをそれぞれ異にする四つの層に分けてゐる。

最上層。これは週期的に失業する工業労働者で、すべての職業に存在し、従つて最も條件のよい職業にも常に存在してゐる。各労働者は或る時には失業したり、或る時には就業したりしてゐるから、この層の成員は絶えず變化してゐる。その人数も事業の成行きと共に著しく動揺し、恐慌の時には極めて多數で好景氣の時には少數だが、しかし決してなくなつてしまふことはなく、一般に産業の發達が進むにつれて増大するものである。

第二層。これは田舎から都市へ流れ込む不熟練工プロレタリアで、最も程度の低い要求を以て市場に現はれ、且つ單純労働者として、或る一定の労働部門に固着することなく、すべての労働部門のための貯水池として仕事を待ち受けてゐるものである。

第三層。これは最も程度の低いプロレタリアで、何等正規の仕事をも有せず、常にあわやこれや

の臨時的仕事を搜してゐるものである。この層に見るものは最長の労働時間と最低の賃銀とである。従つてこの層は前記の諸層と同じく、資本のために有用であるばかりでなく、矢張り直接に缺くべからざるものである。この層は絶えず工業と農業との過剰人口で補充され、特に亡びゆく小手工業や死滅しつつある從屬的職業の中から補充される。この層は家内工業のための廣汎な基礎をなすものであつて、一般に謂はゞ産業の樂屋裏で働いてゐる。しかしこれは少しも消滅する傾向をもたないのみか、反對に都市や田舎で工業の活動が増してゆくためと、出生率の強大なためとで益々増大するものである。

最後に第四層。これはどんづまりの窮民であつて、この中に入るものは、労働能力のある者——即ち工業や商業の好況の時にはその一部は就業し、恐慌の時には第一番に外に突き出されるもの、次ぎに労働能力のない者——産業に最早や使用され得ない老衰せる労働者、プロレタリア寡婦、孤兒、細民兒童、並びに工鑛業等の犠牲になつた不具者、最後に、労働の習慣を失つた者——即ち浮浪人の類である。この層は直接にルンペン・プロレタリア——即ち犯罪者、淫賣婦等に流れ込むものである。マルクスは言ふ、被救恤窮民は労働階級の廢兵院たり、その豫備軍の死の重みたるものである。窮民の存在が豫備軍から必然的に生ずるのは、豫備軍が産業の發達から生ずると同じである。貧民とルンペン・プロレタリアとは資本主義の存立条件の一つであり、資本主義の發達に伴つて増大する。即ち社會の富、活動してゐる資本およびそれに使はれてゐる労働大衆が増大すればするほど、失業者の貯藏的層、即ち豫備軍もまた増大する。豫備軍が現役労働

大衆に比較して増大すればするほど、その最下層の貧困、窮乏、犯罪の層が増大する。故に資本および富と共に、不可避的に不就業者および解雇者も増大し、それに伴つて労働階級の苦惱者の層——官認の被救恤民も増大してくる。かくてマルクスは言ふ、これは資本主義發展の絶對的普遍法則である。

絶えず増大してゆくこの失業者の常備的層の形成は、前にも述べたように、すべて往時の社會形態には知られてゐなかつた。原始共產體においては、言ふまでもなく生計に必要な範圍内で——一部は直接の欲求から、一部は種族や共同體の道徳的または法律的權力の壓迫の下に——各人が労働してゐた。しかしまた社會のすべての成員に手近かな生活資料が備はつてゐた。もちろん原始共產群の生活標準はかなり低級な單純なものであり、生活上の樂しみ事も原始的なものである。しかし生活資料が存在してゐる限りは、すべてに對して平等に行き互つてゐて、今日の意味における貧困や、社會に存在する生活資料を奪はれてゐることなどは、その時代には知られてゐなかつた。原始的種族は不利な自然關係が起つた時には屢々飢ゑた。しかしこの窮乏は社會全體の窮乏なのであつて、社會の一部に餘分がありながら他の一部に窮乏があるといふことは考へ得られぬことであつた。けだし社會の生活資料が全體として保證されてゐる限り、個々の成員の生存も保證されてゐたからである。

東洋および古代の奴隸制度にも同一の事情を見る。エジプトの國有奴隸やギリシヤの私有奴隸は如何にもひどく搾取され虐使されてはゐるが、そして彼れ等の乏しい暮らしと主人の贅澤との

間の距離は如何にも大きなものではあるが、しかもなほ奴隸の生活標準は奴隸關係そのものによつて保證されてゐた。奴隸を窮乏のために死なせなかつたのは、今日自分の馬や牛を餓死させないのと同じである。中世の徭役關係においても事情は同一であつた。そこでは農民が土地に縛りつけられ、封建的隸屬制度が樹立されてゐて、社會のどんな人間でも、他の人間の主人となつてゐるか、主人の奴僕となつてゐるか、それともこの兩者を兼ねてゐるかしてゐて、この制度は各人に一定の位地を指定してゐた。そして農奴の搾取はどんなに苛酷だつたにしろ、地主は農奴を土地から追拂ふ權利はなかつた、言ひかへれば農奴から生活資料を奪ふ權利はなく、反對に、徭役關係は地主に對して、火事や洪水や降雹などの災厄の場合には、困窮に陥つた農民を救済する義務を負はせてゐたのである。謂はゆる農民追放が始まつたのは、漸やく中世の終りになつて、封建制度が崩壊し資本主義が入り込んだときであつた。しかも中世においては、労働する大衆の生存が一貫して保證されてゐた。なるほど當時と雖も度々重なる戦争や個人の財産喪失の結果、すでに一部には貧民や乞食の群が幾分形成されてゐたが、そらういふ貧民を養ふことは社會の義務と見做されてゐたのである。すでにカロロ大帝もその『カピツラール』(律令)の中に明白に規定してゐる、「國內を徘徊する乞食については、すべて予の家臣は、地面を呉れてやるなり家に置いてやるなりして彼れ等を養ひ、他所へ乞食に行かないように取計ふことを望む」と。後になつては、貧民に宿を貸すなり、働く能力がある者には仕事を世話してやるなりすることが、寺院の特別な務めの一つとなつた。故に中世においては窮乏者はどの家にも間違なしに接待され、食ふこ

とのできぬ人間を養ふことは單に義務と見做されてゐたのであつて、今日乞食に對する如き侮辱の念は誰れももつてゐなかつた。

過去の歴史の中で、人口のかなりの部分が仕事もなく食物もなくされた場合がたゞ一回だけある。即ちそれはすでに述べたように、古代ローマの農民が土地を逐はれてプロレタリアにされ、しかも何一つ仕事が無らへられてゐなかつた場合である。この農民のプロレタリア化は、如何にも巨大土地所有の成立と奴隷經濟の擴張との論理的必然的な結果であつた。しかも彼れ等は奴隷經濟および巨大土地所有の成立に何等必要ではなく、却つて仕事のないローマのプロレタリアは、社會にとつて單なる不幸、新らしき負擔にすぎなかつた。それにも拘らず社會は彼れ等に週期的に土地を分配したり、生活資料を分けてやつたり、穀物の大量を輸入して穀價を人為的に廉くしたりして、でき得る限りの手段を盡してプロレタリアとその貧困とを防止するにつとめたのである。要するに古代ローマのこのプロレタリア大衆は、ともかくにも國家から直接に養はれてゐたのである。

然るに資本家的商品生産においては、人口中の増大的な一大層の失業および無一物狀態と、同じく増大的な他の層のどんづまりの絶望的貧困とが、常に資本家的經濟の結果たるのみならず、その經濟の必要事であり存立條件である。故に資本家的商品生産は、人類歴史においてかゝる性質の最初の經濟形態である。勞働大衆全體の生存不安と慢性的窮乏、並びに部分的には一定の廣汎なる諸層のどんづまりの貧困が、こゝに初めて社會の常態的現象となつたのである。しかも今

日の社會的形態以外のものを想像し得ないブルジョア學者は、かゝる無一物の失業者の層の必然的存在を見飽きてゐるために、これを神の恩召す自然律だと説いてゐる。十九世紀初めにイギリス人マルサスは、これに基いて有名な人口論を組み立て、人類が生活資料の増加よりも急速に子供を殖やすといふ惡習慣をもつてゐるから貧困が発生するといふ説を立てた。

しかしながらかゝる現象を惹起するものは、前述の如く商品生産および商品交換の單なる作用に外ならぬものである。この商品法則は形式的には完全なる平等と自由とに立脚しながら、何等法律や強權の力をかりることなく全然機械的に、金剛不壞の必然性をもつて、かゝる赤裸々な社會的不平等——他人に對する一人の人間の直接支配に立脚せる從來のすべての社會には、全く知られなかつたような——を惹起してゐる。こゝに初めて直接の飢餓が、事實上勞働大衆の生活を鞭打つ刑杖となつた。そしてこれをしも人は自然律と説いてゐるのだ。アングリカン教會僧侶タウンセンドも、すでに一七八六年に次ぎの如く書いてゐる、「貧民が或る程度まで氣輕るであつて、そのために勢ひ、社會の最も奴隷的な、最も汚い、最も卑しい仕事を受持つために存在してゐるといふことは、自然律らしい。これによつて人類の幸福の基金が非常に増大し、優秀なる人士は卑賤な仕事から解放されて、安んじて高等な職業に赴くことができる。然るに救貧法は、神と自然とが折角この世に建設したこゝろいふ制度の調和と美、均整と秩序を亂す傾向をもつてゐる。」然るに他人の犠牲で生活する「優秀なる人士」は、從來とても搾取生活の悦びを自分に保證してくるあらゆる經濟形態の中に、いつでも神の御手と自然律とを認めてきたのである。如何な

る偉大な思想家と雖もこの歴史的錯覺を免れない。だからイギリスの僧侶よりも幾千年も前に、ギリシヤの大思想家アリストテレスは次ぎの如く書いてある、「奴隸制度を創造したものは自然そのものである。動物は雌雄に分れてゐる。牡は牝に比して完全な動物なので支配し、牝は不完全なので服従する。同様に人類の中にも、肉體が精神の下に位し動物が人類の下位に立つ如く、他に比して低級な個人がある。これはたゞ肉體的勞働のみ役立ち、何等高級な事柄を成就する能力のない人間である。この種の個人は、他人に服従する以上に何等長所をもたないから、自然によつて奴隸の運命を負はされてゐる。……最後に、一體奴隸と動物との間にそんなに大きな差異があるだらうか？ 兩者の仕事は似たものであつて、いづれもその肉體によつてのみ吾々に役立ち得る。故にこれらの原則から次ぎの結論を引き出すことができる。即ち自然は或る人間を自由のために、他の人間を奴隸のために創造したのであつて、従つて奴隸が服従することは必要且つ正常なことである」と。このようにあらゆる形式の搾取に責任を負はされてゐる「自然」は、どの道、時代と共にその趣味が甚しく墮落してきたに相違ない。何故なら「自然」が民衆の大多數を侮辱的な奴隸の地位に貶して、哲學的自由民とアリストテレスの如き天才とをその肩の上に載せることは、まだしも遣り甲斐があつたにしても、今日俗悪な工場主や肥つた坊主を飼養するために、幾百萬のプロレタリアを貶黜することなどはあまり氣のきいた仕事ではないのだから。

五

吾々は今まで資本主義經濟が、勞働階級とその種々なる層とに對して如何なる生活標準を保證してゐるかを見た。しかし吾々は勞働者のこの生活標準と、全體としての社會的富との關係については、まだ少しも精密なところを知つてゐない。けだし勞働者が、たとへば或る場合に以前よりも多くの生活資料、即ち一層豊富な食糧や一層上等な衣服を得てゐるとしても、その場合に他の階級の富がもつと迅速に増加してゐれば、社會的生産物に對するこの勞働者の分け前は以前よりも少くなつてゐるからである。故に勞働者の生活標準がそれ自體として、絶對的に見れば高上してゐる場合でも、他の階級と比較して相對的に見ればその分け前が低下してゐる場合がある。されば各人および各階級の生活標準は、その時代の事情並びに同一社會内の他の諸層と比較して評價した場合に、初めて正當に判斷し得る。アフリカの原始的な、半野蠻的な、または未開の黒人種族の王様は、ドイツにおける普通の工場勞働者よりも生活標準が低い。即ちそれよりも簡單な住居、劣つた衣服、粗末な食物で生活してゐる。しかもドイツの工場勞働者は、富めるブルジョアの奢侈や現代の一般的欲求に比すれば、まことに憐れむべき生活をしてゐるのに反して、この黒人種族の王様は、その種族の資料と要求とに比すれば「王様のような」生活をしてゐるのである。故に今日の社會における勞働者の地位を正しく判斷するためには、絶對賃銀、即ち勞賃そのものゝ大きさを研究するにとどめず、相對賃銀——即ち勞働者の賃銀がその勞働の生産物全體に對して有する分け前——を研究する必要がある。吾々は前の例で、勞働者は十一時間勞働において、最初の六時間で、自分の賃銀即ち生活資料を稼ぎ出し、次ぎにあとの五時間で資本家のた

めに剰餘價值をつくるものと見做した。故にこの例では、労働者のための生活資料の生産は六時間の労働を要するものと前提したのである。吾々はまた資本家が不拂労働、剰餘價值をでき得る限り大きくするために、あらゆる手段を講じて労働者の生活標準を引下げようとつとめてあることを知った。しかしこゝでは労働者の生活標準が變化しないものと假定する。即ち労働者は常に同一量の食物、衣服、下着、家具等を手に入れる位置にあるものと見做さう。故に賃銀が絶對的に見て低下しないものと假定するのである。然るにこれ等のすべての生活資料の製出が、生産上の進歩によつて廉價になり、そして今は以前よりも僅かな時間しか要しないとすれば、労働者はその賃銀を稼ぎ出すのに以前よりも短い時間で足りるようになるだらう。そこで労働者の日々に要する食物や衣服や家具等の分量が、もはや六時間の労働を要することなく、五時間だけで足りるようになったと假定しよう。そうすれば労働者は十一時間労働のうち、賃銀を稼ぎ出すために今まで六時間働いてゐたのが五時間働けばよいことになり、従つてまる六時間といふものが不拂労働として、資本家のための剰餘價值の生産のために残ることになる。即ち労働者の生産物に對する分け前が六分の一だけ減つて、資本家の分け前が五分の一だけ増したのである。しかしその際絶對賃銀は何等低下してゐないのである。それどころかこの場合に労働者の生活標準が高まることもあり得る。即ち絶對賃銀がたとへば一割だけ上り、しかも貨幣賃銀のみでなく労働者の實際上の生活資料が多くなる場合があり得る。しかし労働の生産性がそれと同時に、またはその後まもなく、一割五分だけ増したとすれば、生産物に對する労働者の分け前、即ち労働者の相對賃

銀は——絶對賃銀が騰貴してゐるにも拘らず——低落したのである。

このように生産物に對する労働者の分け前は、労働の生産性に依存してゐる。労働者の生活資料が僅かな労働で生産されれば、相對賃銀はそれだけ少なくなつてくる。労働者が着るシャツや靴や帽子が、製造業の進歩によつて以前よりも僅かな労働で製造されるなら、——労働者は賃銀で以前と同一分量のシャツや靴や帽子を手に入れることができるにしても——この場合労働者が受取る社會的富、社會的労働生産物の分け前は以前よりも少なくなつてゐるのである。ところがあらゆる生産物と、原料とが、何等かの分量において労働者の日々の消費の中に入つてゐる。それで單にシャツ製造業だけが労働者の暮らしを廉くするのではなく、シャツの原料を供給する木綿製造業も、ミシンを供給する機械製造業も、毛糸を供給する毛糸製造業も、いづれも労働者の暮らしを廉くするものである。同様にパン焼業の進歩だけが労働者の生活資料を廉くするのではなく穀物を大量的に供給するアメリカの農業も、穀物をアメリカからヨーロッパに運ぶ鐵道運輸、汽船運輸の進歩なども、同じはたらきをするのである。このように産業上の如何なる進歩も、労働生産性の如何なる高上も、すべて労働者の生活維持を絶えず少ない労働で事足りるようになる。かくして労働者が賃銀の補償のために費やす労働日の部分が絶えず減少するようになり、不拂労働即ち資本家のための剰餘價值をつくりだす労働日の部分が絶えず増大するようになる。

技術のこの常住不斷の進歩は、資本家にとつて必要事であり、生存條件である。個々の企業家間の競争は、各企業家を驅つて内心から生産物をできるだけ廉く、言ひかへれば人間労働をでき

るだけ節約して生産するようにさせる。そして或る資本家が自分の工場に改良された新方法を取り入れたとすれば、矢張り競争のために、同一部門の他のすべての企業家も、商品市場から驅逐されないために技術を改良せざるを得なくなる。手工業經營の代りに機械經營が一般に實施され、古い機械の代りに改良された新機械が絶えず急速に採用されつゝあるのは、かゝる事情の明白な現はれである。かくてあらゆる生産領域における技術上の發明が日常のこととなつた。されば本来の生産の方面たると交通機關におけるとを問はず、全産業の技術的變革は、資本家的商品生産の不斷の現象であり、その生活法則である。そして勞働生産性におけるあらゆる進歩は、勞働者の生活維持に必要な勞働量の減少となつて現はれる。言ひかへれば、資本家的生産は、社會的生産物に對する勞働者の分け前を減少することなしには進歩することはできないのである。技術に新發明が行はれる毎に、機械に改良が行はれる毎に、生産および交通に蒸氣や電氣が新たに應用される毎に、生産物に對する勞働者の分け前が益々小さくなり、資本家の分け前が益々大きくなる。かくて相對賃銀は常住不斷に低下してゆき、剩餘價值、即ち資本家が支拂はないで勞働者から搾取した富は、同じく常住不斷に増大してゆく。

吾々は矢張りこゝにも資本家的商品生産と、以前のすべての經濟形態との著しい差異を見る。原始共產主義社會においては、吾々の知る如く生産物は生産後にすべての勞働民、即ち社會の全成員——といふのは、當時勞働しない人間は存在してゐなかつたと言つて差支へないのだから——の間に均等に分配されてゐた。農奴制度の下においては、基準となつてゐるものは平等ではなく、

勞働民に對する非勞働民の搾取であつた。しかしそこでは、勞働の成果に對する勞働民即ち僱役農民の分け前が一定してゐるのでなく、逆に搾取者即ち僱役地主の分け前が、農民から受取るべき一定の僱役および貢税として、始めから確定してゐるのである。その後に残つた勞働時間や生産物は農民の持分なのだから、農奴制が極度に悪化しない以前の普通の事情の下にあつては、農民は勞働力を緊張することによつて或る範圍までは自分の持分を増大し得る可能性があつた。尤も中世の進むにつれて貴族と僧侶が貢税や僱役に對する要求を次第に増したので、農民のこの分け前は段々少なくなつては行つたが、それにしても生産物に對する僱役農民の分け前と、その封建的誅求者の分け前とを決定するものは、たとへ勝手に定められたにもせよ、つねに一定せる規範であり、人非人にもせよとにかく人間によつて規定された明白な規範である。それ故に中世の僱役農民や奴隷は、以前よりも大きな負擔を課せられて自分等の分け前を蠶食される場合は、それを正確に手にとるよう感じたのである。従つてこの分け前の縮小に對する闘争の可能性があり、そしてまた事實上、この闘争は少しでも可能の場合には、自己の勞働生産物に對する分け前の縮小に對する、被搾取農民の公然の闘争となつて現はれる。そしてまたこの闘争は或る一定の條件の下においては成功の榮冠を以て飾られもする。——都市の町人階級が自由を獲得したのは、初め隷屬的だつた手工業者が、種々様な僱役、納貢、借地權、その他幾千となき封建時代の吸血手段を次第に一つづつ拂ひのけて、最後に残つたもの——政治的權利——を公然の闘争によつて奪ひ取つたからに外ならぬ。

然るに賃銀制度にあつては、自己の生産物に對する労働者の分け前に關して、何等法律の規定もなければ習慣法による規定もなく、專斷的な勝手氣まゝな規定すらも存在してゐない。この分け前は、その時々々の労働生産性の程度によつて、技術の状態によつて決定されるのであつて、搾取者の專斷によつて、なく技術の進歩によつて、労働者の分け前が絶えず容赦なく引下げられてゐるのである。故に労働者からその生産物に對する分け前を益々多く奪つて、残る部分を益々少くするものは、全く眼に見えない力、自由競争および商品生産の單なる機械的な作用であつて、この力は靜かに氣附かれずに労働者の背後で作用を行ふものであるから、従つてそれに對して闘争することは全く不可能である。これが絶対賃銀即ち實質的生活標準の場合なら、搾取者の個人的役割をまだ明瞭に見ることが出来る。労働者の實質的生活標準の低下を誘致する賃銀引下げは、労働者に對する資本家の明白な謀殺であつて、労働組合が勢力を張つてゐるところでは、労働者は常則として直ちにこれに應戦し、有利な場合にはそれを防止することもできる。これに反して相對賃銀の低落は、明らかに資本家が少しも個人的に參與することなしに起り、これに對しては労働者は賃銀制度の圏内においては、即ち商品生産の基礎の上においては闘争や防禦の可能性がないのである。生産の技術的進歩に對しては、即ち發明や機械の採用や、蒸氣および電力や、交通機關の改良などに對しては、労働者は何等闘争することができない。労働者の相對賃銀に影響するすべてこれらの技術的進歩の作用は、全く機械的に商品生産と労働力の商品性から生ずるものである。従つて如何なる有力な労働組合も、この相對賃銀の急激な低落の傾向に對しては全

然無力である。従つてまたこの相對賃銀の低落に對する闘争は労働力の商品性に對する闘争、言ひかへれば資本家的生産全體に對する闘争をも意味する。故に相對賃銀の低落に對する闘争は、もはや商品經濟を基礎としての闘争ではなく、商品經濟の存立に對する×××攻撃であつて、即ちそれはプロレタリアートの社會主義運動である。

資本階級が今まで労働組合に對してあれほど猛烈に戦つて來ながら、ひとたび社會主義的闘争が始まつた後は、そして労働組合が社會主義に對立してゐる間は、この同じ労働組合に對して好意を持ち出すのはこの故である。フランスでは労働者の團結權獲得のための闘争は、一八七〇年代に至るまではすべて無駄であつた。そして労働組合は苛酷な刑罰を以て迫害されてゐた。然るにコンミュン暴動が全ブルジョアジーを赤き怪物の前に戰慄せしめて以來、間もなく輿論に急激な大變化が始まつた。ガンベッタ大統領の機關紙『レピュブリク・フランセーズ』や、『飽滿せる共和主義者』の支配黨は、労働組合運動を庇護し始めたばかりでなく、熱心にこれを宣傳さへもするようになった。十九世紀の初めには儉約なドイツ労働者が、イギリス労働者に對して模範として示されてゐたのに、今日では反對にイギリス労働者が、しかも儉約どころか「貪慾な」ピブテキ喰らひの組合主義者が、模範兒童として推奨され、これに見習ふように説かれてゐる。ブルジョアジーにとつては、労働者の絶対賃銀の引上げのための如何なる激烈な闘争と雖も、神聖犯すべからざるものに對する攻撃——相對賃銀を間斷なく低下させる資本主義の機械的法則に對する攻撃に比しては、無害な瑣事と見えたのは如何にも尤もなことであつた。

六

賃銀關係に關する上述のすべての結果を總括するとき初めて吾々は、労働者の物質的生活状態を決定するところの資本主義賃銀法則を如實に觀念することが出来る。故にその場合は何よりもまづ絶対賃銀と相對賃銀とを區別すべきである。そしてまた絶対賃銀は二重の姿をとつて現はれる。第一に、或る貨幣額として、即ち名目賃銀として現はれ、第二に、労働者がこの貨幣を以て獲得し得る生活資料の總量として、即ち實質賃銀として現はれる。労働者の貨幣賃銀がもとのまゝであり、或は高上しても、生活標準即ち實質賃銀が低下することがあり得る。さて實質賃銀は絶えず絶対的最低限度、生理的な生活最低限度に低下する傾向をもつてゐる。言ひかへれば、資本が労働力に對して絶えずその價值以下に支拂はうとする傾向が存在してゐる。資本のこの傾向に對しては、労働者の組織によつて初めて均勢がつけられる。労働組合の主要職分は、労働者の欲求を高めることによつて、生理的生活最低限の代りにこれを人倫的に向上させることによつて、初めて労働者の一定の文化的生活標準をつくり出し、そしてそれ以下に賃銀が低下すれば直ちに團結の闘争を起し、これを防衛することにある。同じく社會主義黨の大なる經濟的意義も、廣汎なる労働大衆を精神のおよび政治的に覺醒させることによつてその文化的水準を高め、またそれに依つて労働大衆の經濟的欲求を高めることにある。たとへば新聞の豫約、小冊子の購讀等が労働者の生活慣習となることによつて、精密にそれに應じて労働者の經濟的生活標準が向上し、

その結果賃銀も高まるのである。この點における社會主義黨の作用は——或る一國の労働組合が社會主義黨と公然の同盟をつゞけてゐる限りは——二重の効果を有してゐる。けだし社會主義黨に對する敵對はブルジョア諸層を驅つて競争的組合を創立せしめ、この組合はまた組合で、プロレタリアートの更らに廣い範圍に對して組織的教育的作用を及ぼし、その文化水準を高めるものだからである。かくてドイツにおいては社會民主黨と提携してゐる自由労働組合の外に、無数のキリスト教的、カトリック教的、自由主義的労働團體が活動してゐるのを見る。同じくフランスでは社會主義組合を征服するために謂はゆる黄色労働組合が設立され、またロシアでは、現今の×××大衆罷業の勃發は「黄色」御用労働組合から始まつたのである。これに反して労働組合が社會主義と遠ざかつてゐるイギリスでは、ブルジョアジーはプロレタリア諸層の中に團結思想を入れようとはしてゐない。

故に労働組合は近世賃銀制度の下に缺くべからざる有機的役割をつとめてゐる。即ち商品としての労働力は、労働組合の力によつてその價值で賣られるようになる。資本家的商品法則は労働力に關しては、ラサールが誤つて考へてゐたように労働組合によつて廢止されるものではなく、却つて労働組合によつてこの法則が實現されるものである。資本家は組織的に投資價格で労働力を買はうと努めてゐるが、この價格は組合活動のおかげで多かれ少なかれ實質價格に高められる。とはいへ労働組合はこゝろいふ職分を、資本家的生産の機械的法則の壓迫の下に行つてゐるのである。即ち第一に失業労働者の常設豫備軍の壓迫の下に、第二に好景氣不景氣の不斷の變動の壓

迫の下に。この二つの法則が労働組合の作用を、越ゆべからざる限界内に押し込めてゐる。産業景氣の間斷なき變動は、労働組合をして景氣の沈退する毎に資本の新たな攻撃に對して既得權を防衛させ、景氣のよくなる毎に鬭争によつて初めて、低下せる賃銀状態を有利な状態に相應する水準まで再び高上させる。かくて労働組合は常に守勢をとらざるを得なくなる。然るにまた失業者の産業豫備軍は、労働組合の作用を謂はゞ空間的に制限してゐる。即ち組織とその影響とが及ぶ範圍は、失業が週期的にのみ、マルタスの表現でいへば「流れ去るように」のみ起るところの、比較的よい地位にある工業労働者の上層に限られてゐる。これに反して、絶えず田舎から都市へ流れ込んでくる無知の農業プロレタリア、並びに煉瓦製造や土木労働の如きすべての半田舎的な不規則的職業にある下層のものは、そういふ種類の仕事の空間的および時間的條件や社會的環境から考へただけでも、すでに組合組織には著しく不適當である。最後に、豫備軍中の更らに下層の廣汎なる部分——即ち不規則な仕事や家内工業を職とする失業者や、更らに臨時にしか雇はれない貧民などは、全然組織から引き離されてゐる。概説すれば、プロレタリアの一つの層における困窮と壓迫が大きければ大きいほど、労働組合の影響の可能性は少くなる。故に労働組合の活動はプロレタリアートの深さに對しては極めて力弱いが、これに反して廣さに對しては力強い。即ち労働組合はプロレタリアートの最上層の一部を包含するにすぎないにしても、労働組合の贏ち得た條件は、それに該當する職業に従事してゐる労働者の全大衆に利益を與へるのだから、組合の影響はこの最上層の全體に及ぶのである。従つて労働組合の活動は、工業労働者中の組織

能力ある上層階級を貧困から引上げ、糾合し、結成することによつて、プロレタリア大衆の内部にますます著しい分化をひき起すのである。これによつて労働階級の上層と下層との懸隔がますます大きくなる。そしてこの懸隔は如何なる國もイギリスにおけるほど大きくはない。けだしイギリスでは社會主義の補充的な文化作用は、組織能力の少ない下層の方には及んでゐないのであつて、たとへばドイツでこの作用がこの方面に力強く行はれてゐるのは事情を異にしてゐるのである。

資本主義賃銀關係を述べる場合には、就業してゐる工業労働者の事實上に支拂はれてゐる賃銀だけを考慮するのは全然間違つてゐる。尤もそういふ考へ方は、大多數の場合に労働者自身の間においても、ブルジョアジーやその御用學者から、考へなしに受けついで習慣となつてゐるものではあるが。一時的に職を離れてゐる熟練労働者から、どん底の貧民や官認被救恤民にいたるまで、失業者の豫備軍全體が賃銀關係の決定に、同じ權利を有する要因として參與してゐる。極く僅かしか、或は全然、就業してゐない窮民および落伍者の最下層群は、ブルジョアジーが獨り合點で考へてゐるように「公けの社會」の中に算入されない廢物ではなく、豫備軍中のすべての成員の媒介を通じて、最もよい境遇にある工業労働者の最上層と内部的な生ける紐帯で結ばれてゐるのである。こういふ内部的聯絡が存在してゐることは、事業不振の時には豫備軍の下層がその都度急激に増大し、好景氣の時には縮小すること、更らに階級鬭争の發展につれて、またそれに伴ふプロレタリア大衆の間における自覺の向上につれて、公けの救恤を求める者の數が相對的に

減少しつゝあることによつて、數字的に示されてゐる。そして最後に、工業労働者のうちで労働中に不具になつたり、或は不運にも六十歳の老人となつてしまつた者は、百の場合五十までは極貧の下層に、即ちプロレタリア中の「苦惱者の層」に沈んでゆく。このようにプロレタリアートの最下層の生活状態は、資本主義生産の同じ法則によつて動かされ、自由自在にされてゐるのである。かくてプロレタリアートは農村労働者の廣汎なる層と、並びにプロレタリア失業者軍や最高より最低に至るすべての層とを併せて初めて、有機的な全一體、一つの社會的階級を形成するのであつて、全體としての資本主義賃銀法則は實にこの社會的階級の貧困および窮迫の種々様々の度合ひに鑑みて初めて正しく理解され得るのである。最後にしかしながら、絶対賃銀の變動のみを知つてゐるのは、單に賃銀法則の半分だけを擱んだことを意味するにすぎぬ。労働生産性の進歩に伴ふ相對賃銀の機械的低落の法則を理解した時に、初めて資本主義賃銀法則の本統の効力範圍を完全に知つたことになるのである。

平均的に労働者の賃銀は、必要な生活資料の最低限に落付く傾向を有してゐるといふ觀察は、すでに十八世紀において、フランスおよびイギリスのブルジョア經濟學創始者によつて行はれてゐた。しかし彼れ等は賃銀最低限度を決定するところの機構に、一種獨特な説明を與へた。即ちこれを説明するに求職労働力の供給の變動を以てしたのである。曰く、労働者が生存に絶対必要以上の賃銀を得るときは、労働者の結婚數が多くなり、澤山の子供が生まれてくる。その結果はまた労働市場が溢れて、資本家の需要を遙かに超えるようになる。そうならば資本は労働者間の

激しい競争を利用して、賃銀を著しく引下げる。これに反して賃銀が必要な生活維持に足りないときは、労働者は無數に斃れ、その隊伍は段々減つて、資本が使用し得るだけの人數が残るだけになり、その結果は賃銀は再び騰貴してくる。このように、労働階級における過度の増殖と過度の死亡との間を往來してゐるこの振り運動によつて、賃銀は絶えず生活資料の最低限度に引き戻されると。この學説は一八五〇年代に入るまで經濟學を風靡してゐたものであつて、ラサールもこの説を採用してこれを「無慈悲な鐵則」と呼んだ……

この學説の弱點は、資本主義生産が充分に發達してゐる今日にあつては、掌を指すが如く明白である。大産業は事業の熱病的發展があり競争がある今日、まづ労働者が生活の餘裕を得て結婚數が多くなり、多くの子供を生み、それからこの子供が大きくなつて労働市場に現はれてくるようになり、そこで資本家の希望してゐる以上に市場の過剰を惹起して賃銀が低下するようになるまで、悠長に待つてゐるわけには行かぬ。賃銀の變動は産業の脈膊に應ずるもので、一と振りに一代即ち二十五年もかゝるような、悠々たる振り運動をしてゐるのでなく、賃銀は間斷なく活潑な運動をつゞけてゐるのであつて、労働階級がその増殖で以て賃銀の高さを定めることもできないければ、産業がその需要で以て労働者の繁殖を待つこともできないのである。第二に、産業労働市場は一般に労働者の自然的増殖によつてその大きさを決定されるのでなく、新しいプロレタリア諸層が田舎から、手工業や小工業から、並びに労働者自身の妻子の中から絶えず流れ出てくることによつて決定される。労働市場の横溢こそは豫備軍の形をとつて現はれるところの、近代産

業の不斷の現象であり生活條件である。それ故に賃銀の高さを決定するものは、労働力の供給の變化、即ち労働階級の運動ではなく、資本の需要の變化、即ち資本の運動である。労働力は過剰に存する商品として絶えず棚晒しになつてゐるのであつて、資本が好景氣の際に労働力を多量に吸収するか、或は恐慌の二日酔いで多量に吐き出すかに従つて、賣れ方がよくなつたり悪くなつたりするのである。

されば賃銀法則の機構は、ブルジョア經濟學やラサールが考へてゐるのは全然別なものである。ところがその結果は、即ち實際上にそこから生ずる成態は、この舊來の學說による場合よりも一層困つたものである。資本主義賃銀法則は「鐵則」ではなく「伸縮的」法則であるために一層無慈悲な、一層怖るべきものである。けだしこの法則は、失業者の廣汎なる層全體に、脆弱な伸び縮みのする苦惱の繩を捲きつけて、彼れ等を生死の間に腕かせることによつて、同時に就業労働者の賃銀を生活資料の最低限度に引き下げるからである。

煽情的な革命的性質をもつた「賃銀鐵則」を樹立することは、ブルジョア經濟學の初期、少年期においてのみ可能であつた。ラサールがこの法則をドイツにおいて煽動の樞軸たらしめた瞬間から、ブルジョアジーのお雇ひ經濟學者どもは賃銀鐵則を否認し、それを間違つたもの、誤つた學說と説いて罵詈雑言するにとめた。ファウヒエル・シュルツェ・デーリッチ、マックス・ウィルトのような、工場主から金を貰つてゐる凡俗代理人の犬どもは、ラサールと賃銀鐵則とに對して十字軍を起し、かくて無分別にも自分等の祖先のアドム・スミスやリカルドその他のブル

ジョア經濟學の偉大な創始者を辱めた。だが一八六七年にマルクスが、産業豫備軍に影響せられる資本主義の伸縮的賃銀法則を闡明し立證して以來、遂にブルジョア經濟學者は鳴りを鎮めるに至つた。今日ではブルジョアジーの官認大學教授式學問は、一般に賃銀法則といふものを有せず、面倒な題目を回避して失業の不幸や穩健なる労働組合の効用について、まとまりのつかぬ空談を講義してゐるのである。

經濟學の他の根本問題、即ち資本家の利潤は如何にして形成され、どこから來るかといふ問題に關しても、これと同一の光景を呈する。社會の富に對する労働者の分け前の場合と同じく、資本家の分け前についても、最初の科學的解答を、すでに十八世紀に經濟學の創始者が與へてゐる。この學說に最も明白な形態を與へたのはダビッド・リカルドであつて、彼れは鋭く且つ論理的に、資本家の利潤をプロレタリアートの不拂労働であると説明したのである。

七

吾々は賃銀法則を觀察するに當つて、労働力なる商品の賣買より始めた。しかしそれには生産手段を有せざる賃銀労働者と、生産手段を有し、しかも近代的企業を始めるに充分な富だけ所有してゐる資本家とが必要である。彼れ等は何所から商品市場へ來たのだらうか？ 吾々は今までの説明では、商品生産者のみを眼界に置いてきた。言ひかへれば、自分で生産手段を有し、自分で商品を生産してそれを交換する人々のみを考慮に入れてゐた。同じ價値の商品が交換される場

合に、如何にして一方に資本、他方に完全な無資産が発生し得るのであらうか？ 吾々はいま労働力なる商品をとへ充分に價值通りに買つても、この商品を使用する場合に、不拂労働または剰餘價値の形成、即ち資本の形成を誘致するものであることを知つた。資本の形成と不平等の形成とは、なるほど賃銀労働とその作用とを觀察すれば明白にはなる。しかしながらそれには豫じめ資本とプロレタリアとがすでに存在してゐなければならぬ！ 故に問題は次ぎの如くなる――何處から、また如何にして最初のプロレタリアと資本家とが発生したか、如何にして單純商品生産から資本家的生産への最初の飛躍が行はれたか？ 別な言葉で言へば、如何にして中世小手工業から近代資本主義への推移が行はれたか？

最初の近代プロレタリアートの發生に關しては、封建制度の瓦解の歴史が解答を與へてくれる。労働する人間が賃銀労働者として市場に現はれ得るには、その人間がすでに人身的自由を獲てゐなければならぬ。故に第一の條件は奴隸制度とギルドの強制とからの解放であつた。しかしその人間はまたすべての生産手段をも失つてしまつてゐることが必要であつた。そしてこれは集團的「農民追放」によつて遂行されたのである。即ちこれによつて大地主貴族が、近世の初めに當つて今日の土地財産をつくりあげたのであつて、農民は數百年以來自分に屬してゐた土地から幾千人となく無造作に追拂はれ、共同農民地は地主地の中にぶち込まれた。たとへばイギリスの貴族は、中世における商業の擴張とフランダースの羊毛製造業の隆盛とによつて、羊毛工業のために羊を飼ふことが儲かる商賣だといふことが分つた時にそうしたのであつた。即ち耕地を牧羊場に

變ずるために、農民は無造作に住家と農場とから驅逐されたのである。この「農民追放」はイギリスでは十五世紀から十九世紀に入るまで續いた。たとへば一八一四―二〇年にもサザラント伯爵夫人の所有地では一萬五千人の住民が追ひ出され、その村は焼拂はれ、その耕地は牧地にされて、農民の代りに十三萬一千頭の羊が飼はれた。ドイツでは殊にプロシヤの貴族が、野放しにされた農民から「自由」なプロレタリアを強力的に製造するに當つて、どんなことを行つたかといふことは、ウォルフの小冊子『シュレジアの十億萬長者』を見ればその概略が分かる。生存するに道なく野放しにされた農民には、残るところは餓死する自由か、さもなければ、如何に自由な身とは言ひながら、飢餓賃銀で身を賣る自由か、二つのうちの一つであつた。

第六章 資本主義經濟の諸傾向

一定の計劃的な生産組織を伴つたすべての社會形態——原始共產社會、奴隸經濟、中世僑役經濟——が段々に崩壊して行つた後に、如何にして商品生産が生じたかを吾々は知つた。更らに吾々は、中世期末に單純商品經濟から、即ち都市手工業的生產から、如何にして今日の資本主義經濟が全然機械的に、即ち人間の意志および意識から離れて發生したかといふことを知つた。當初に吾々は、如何にして資本主義經濟が可能であるかといふ問題を提出したのであつた。これこそはまた科學としての經濟學の根本問題である。今やこの科學はこれに對して充分な解答を與へてゐる。即ちこの科學は吾々に次ぎのことを立證する。資本主義經濟は完全なる無計劃性のために、またあらゆる意識的組織の缺如のために、一見したところでは存立不可能の事物であり、解き難き謎のように見えるが、それにも拘らず全一體に結成してゐて存立し得るものである。しかもそれは次ぎの方法によつて存立し得るのである。——

商品交換と貨幣經濟によつて。——資本主義經濟はこれによつて、すべての個別的生產者並びに地上の最も隔つた地域を經濟的に結びつけ、かくして全世界に分業を實行してゐる

のである。

自由競争によつて。——これは技術的進歩を保證し、同時に小生産者を絶えずプロレタリアに變ずるものであり、これによつて、賣買される勞働力が資本のところに集められるのである。

資本主義賃銀法則によつて。——これは一面においては賃銀勞働者がプロレタリアの身分から決して向上しないように、そして資本の司令下にある勞働から身を引かないように、機械的に配慮するものであり、他面においては不拂勞働を益々多く資本に累積せしめ、それに伴つて生産手段の益々大なる集積と擴張とを可能ならしむるものである。

産業豫備軍によつて。——これは社會の欲求に應ずるように擴張し順應する能力を、資本主義生産に賦與するものである。

利潤率の平均化によつて。——これは一つの産業部門から他の産業部門へと移つてゆく資本の間斷なき運動を制約するものであり、かくして分業の平衡を調節するものである。そして最後に、

價格の變動と恐慌とによつて。——これは一部分は日々に、一部分は週期的に、盲目的混沌的生產と社會の欲求との間に或る均衡をもたらしものである。

資本主義經濟はこういふ具合にして、社會の意識的干與なしに全然自發的に發生した右の經濟的諸法則の機械的作用によつて、存立してゐるのである。言ひかへれば、個々の生産者間にあら

ゆる組織的な経済的聯絡が缺けてゐるにも拘らず、また人々の経済的努力に全然計劃が缺けてゐるにも拘らず、以上の如き方法によつて、社會的生産と、並びにそれと消費との循環とが行はれ、社會の大集團が勞働に縛りつけられ、社會の欲求がどうかこうにか充たされ、そしてすべての文化的進歩の基礎たる経済的進歩、即ち人類勞働の生産性の發展が保證されるようになり得るのである。

然るにこれらの事柄はあらゆる人間社會の存立の根本條件である。そして歴史的に成立せる經濟形態は、これらの條件を充分に果たす限りは存立し得るものであつて、その限りはその經濟形態は一個の歴史的必然なのである。

しかしながら社會關係は決して固定不動の形態ではない。社會關係は時代の経過につれて幾多の變化を示してきた、そして永久に變遷すべきものであつて、取りも直さずこの變遷のうちこそ人類文化の進歩、發展が道をひらくものであることを吾々は知つた。原始共產主義經濟は幾千年の久しきに亘つて、人類社會を、半獸的な存在の發端から文化發展の高級段階に導き、言語および宗教の形成に導き、牧畜と農耕とに導き、定住的生活様式と村落の形成とに導いたのだが、やがて原始共產主義も次第に瓦解し、それに續いて古代奴隸制度の形成となり、これはまたこれで社會的生活に新たに大進歩をもたらしたのだが、やがてまた古代世界の没落とともに終焉した。そして中歐におけるゲルマン人の共產社會から、古代世界の遺跡の上に或る一つの新しい形態——徭役經濟が生じ、その基礎の上に中世封建制度が建てられた。

進化は再びその間斷なき歩みをつゞける。——中世の封建社會の胎内において、都市の中に全然新たな經濟形態、社會形態の萌芽が生じ、ギルド手工業、商品生産並びに規則正しい商業が發生して、結局封建的徭役社會を瓦解させてしまつた。かくて徭役社會は資本主義生産に席を譲り、資本主義生産は世界貿易やアメリカ發見やインド航路の發見のおかげで、手工業的商品生産から生長した。

それでは資本主義生産様式はどうかといへば、これも當初から歴史的進歩の展望から見ても、決して不變永久のものではなく、矢張り從來のあらゆる社會的形態と同じく單なる過渡的段階であり、人類文化發展の巨大なる階梯中の一段にすぎぬ。そして仔細に見れば事實上資本主義そのものゝ發展が、資本主義自身を没落に導き、それを越へて進むものである。

今までは吾々は資本主義經濟を可能ならしめる諸々の事情を研究したのだが、今や資本主義經濟を不可能ならしめる事情を知るべき時期に達した。それには資本支配そのものゝ内的法則の爾後の作用を更らに引續いて研究すればよい。この内的法則こそは、進化の或る一定の高さに達すると、人類社會の存立に缺くべからざる一切の根本條件に反抗するようになるものである。資本主義生産様式が從來のすべての生産様式に比して、特に際立つてゐる點は、機械的に全地球上にひろがらうとする、そして他のすべての舊來の社會秩序を驅逐しようとする内的努力を有してゐるといふ點である。原始共產主義の時代には、歴史的研究所といつてゐる限りの全世界は、一樣に共產主義經濟に包まれてゐた。しかしながら個々の共產體や種族の間には、全然關係が存して

みなかつたか、またはたゞ近鄰の共同體の間にだけ微弱な關係が成り立つてゐたにすぎなかつた。こゝにいふ共同體や種族は、各自獨力に封鎖的生活を營んでゐたのであつて、たとへば中世ゲルマンの共產體と南アメリカの古代ベルの共產體とが殆んど同名で、前者は「マルク」、後者は「マルカ」と呼ばれてゐたといふような驚くべき事實を發見したとしても、この事情は單なる暗合でないとするれば、吾々にとつて今日まではまだ解き明されない謎である。また古代奴隸制度の普及時代にも、古代の個々の奴隸經濟や奴隸國家の組織および事情に多少の類似を見出すだけで、それらの間に經濟生活の共通を發見することはできぬ。同様にギルド手工業およびその解放の歴史も、中世のイタリア、ドイツ、フランス、オランダ、イギリス等の大多數の都市において、多少の一致を以て繰り返されたが、それも大抵はその都市の自分だけの歴史であつた。然るに資本主義生産はすべての國にひろがつてゐて、それらの國を經濟的に同種類のものに形づくるばかりでなく、それらの國を結びつけてたゞ一つだけの大資本主義世界經濟たらしめてゐるのである。

ヨーロッパの各産業國の内部において、資本主義生産は間斷なく小工業的生產や手工業的生產や小農的生產を驅逐してゐる。そして同時にヨーロッパのすべての後進國や、アメリカ、アジア、アフリカ、オーストラリアのすべての國々を世界經濟の中に引き入れてゐる。これは二つの方法によつて行はれる。即ち世界貿易によるものと植民地侵略によるものである。この兩者はすでに十五世紀初めのアメリカ發見以來相伴つて始まり、その後の數世紀中に擴がつたのだが、殊に十九世紀に目ざましい飛躍を遂げてますます擴がりつゝあるものである。兩者——世界貿易と

植民地侵略——は相伴つて次ぎのような作用をしてゐる。即ちこの兩者が初めてヨーロッパの資本主義産業國を、舊文化形態、經濟形態の上に立つてゐる他の諸大陸の幾多の社會形態と接觸させる。——即ち農民的奴隸經濟、封建的徭役經濟、そして特に原始共產主義經濟と接觸させる。そしてこれらの經濟は商業の中に引き込まれて急激に破壊され攪亂される。植民地貿易會社を他國の土地に設立することによつて、または直接に他國を占領することによつて、生産の最も重要な基礎たる土地と、それからそゝいふものがあれば家畜群とが、ヨーロッパの國家または貿易會社の手に歸してしまふ。かくして土着民の自生的社會關係と經濟様式とがいたるところに絶滅され、全民族が一部は剝滅され、残りの部分はプロレタリア化されて、或は奴隸の形で、或は賃銀労働者の形で商工業資本の司令の下に置かれる。十九世紀全體を貫いてゐる數十年間の植民戰爭の歴史——アフリカにおけるフランスやイタリアやイギリスやドイツに對する暴動、アジアにおけるフランスやイギリスやオランダや合衆國に對する暴動、アメリカにおけるスペインやフランスに對する暴動——これこそは土着の社會が近代資本によつて剝滅されプロレタリア化されることに對する、長期の且つ頑強なる抵抗であつて、この闘争において資本は結局いたるところに勝利者となつて現はれたのである。

このことは第一に、資本の支配圈の大擴張、世界市場および世界經濟の形成を意味するものであつて、この世界經濟内においては、地球上の人の住む國はすべて互ひに生産者であり、互ひに生産物の購買者であつて、互ひに手を携へて働き、地球を周る同じ一つの經濟に参加するよう

になる。

しかしこれは他面においては、地球上に人類の貧困化の範圍が益々大きくなり、人類の生存の不安定が益々増すことである。生産力は局限され福利は貧弱だつたが、萬人に對して保證された鞏固な生存條件を伴つてゐた往時の共產主義關係や農民經濟關係、徭役關係の代りに、資本主義的植民地關係、プロレタリア化と資銀奴隸制度とが入り込んできたために、アメリカ、アジア、アフリカ、オーストラリアのすべての植民地民族の間に、赤貧、不慣れの且つ堪え難き勞働負擔おまけに絶望的な生存の不安が現はれた。豊饒なるブラジルは、ヨーロッパおよび北アメリカの資本主義の欲求のために、巨大な荒地と單調なコーヒー栽培地とに變化され、土人の全大衆がプロレタリア化してこの栽培地に賃銀奴隸とされ、その後更らにこれらの賃銀奴隸は、或る純粹な資本主義的現象——謂はゆる「コーヒー恐慌」のために、突如として久しい期間に互つて失業とどん底の飢餓との餌食にされた。天富豊かな大國インドは、資本の支配に對する數十年に互る絶望的抵抗の後、イギリス植民政策によつて征服され、爾來一度に數百萬人を斃す飢饉と飢餓チブスとがガンヂス流域を週期的に見舞つてゐる。アフリカ内地ではイギリスおよびドイツの植民政策によつて、過去二十年間にあらゆる民族全體が、一部は賃銀奴隸に化せられ、一部は餓死せしめられてその骨をあらゆる地方に散らかされた。巨國支那における絶望的暴動と飢餓疫病とは、ヨーロッパ資本の侵入によつてこの國の舊來の農民のおよび手工業的經濟が粉碎された結果である。合衆國に對するヨーロッパ資本の侵入は、まづイギリス移民による土着アメリカ・インディ

アの削減と、その所有地の掠奪とを伴ひ、次いで十九世紀初頭イギリス産業のための資本主義的原料生産の確立を、次いで數百萬のアフリカ黒人の奴隸化を伴つた。この黒人は勞働力として、棉花、甘蔗、煙草栽培地において資本の司令下に置くために、ヨーロッパの奴隸貿易商によつてアメリカに賣られたものである。

このように各大陸が次ぎ次ぎに、また一大陸内では各地方が次ぎ次ぎに、また各種族が次ぎ次ぎに間斷なく資本の支配下に陥り、それに伴つて絶えず新たに幾百萬となき無数の人々がプロレタリアに、奴隸に、生存の不安に、一言でいへば貧困に陥つてゆく。他方では資本主義世界經濟の建設が、絶えず増大する貧困と、堪え難き勞働負擔と、次第に増大する生存不安とを地球上に波及させ、それに伴つて資本を少數の手に累積させてゆく。かくて資本主義世界經濟は、資本累積の目的のために全人類をして、無数の窮乏と苦痛との下に、生理的および精神的退化の下に、苛酷なる勞働に一生懸命にさせることを意味することとなる。既に明らかにしたように資本主義生産様式は次ぎの特徴を有してゐる。即ち舊來の各經濟形態においては人間の消費が目的だつたのが、資本主義經濟様式にとつては、その本來の目的——資本家利潤の累積——に役立つ單なる一手段にすぎないといふ事實である。資本の自己増大が全生産の首尾であり、自己目的であり、意義であるように見える。しかしながらこゝに事情が如何に氣狂じみたことであるかといふことは、資本主義生産が生長して世界的生産になるに至つて初めて明らかになる。こゝに世界經濟の土臺の上に立つて初めて資本主義經濟の馬鹿々々しさは、人類が自分で無意識に創造した盲目

的な社會的權力、即ち資本に束縛されて、怖るべき苦惱の下に呻吟してゐる光景となつて鮮やかに現はれるのである。人間のための生産でなく利潤のための生産が地球全體の上に法則となり、人類の大多數の消費不足、消費の持続的不安定、一時的の直接無消費が常則となつて、こゝに、労働を以てする社會の維持、社會の欲求の充足といふ、あらゆる社會的生產形態の根本目的が、世界經濟に至つて初めて完全に轉倒した姿を取るものである。

同時に世界經濟の發展は、なほ別の重大なる現象——しかも資本主義生産そのものにとつて重大なる現象を伴ふものである。ヨーロッパ以外の諸國に對するヨーロッパの資本專制の侵入は、右に述べたように二つの階梯を通過する。即ち第一に商業が侵入して土着民を商品交換の中に引き入れ、なほ部分的には土着民の從來の生産形態を商品生産に轉化させる。次いで土着民から何等かの形で土地を收奪し、従つてまた生産手段を收奪する。この生産手段はヨーロッパ人の手中にあつて資本に化し、同時に土着民はプロレタリアに變化するのである。しかしながら常則として前の階梯についで、早晚第三の階梯が現はれてくる。即ち移住したヨーロッパ人によつて行はれるか、富を積んだ土着民によつて行はれるか、いづれにもせよ植民國に土着の資本主義生産が創立されるようになる。北アメリカ合衆國は初め土着の銅色人種が長期に互る戦争で剝滅されて、イギリス人その他のヨーロッパ移民が定住したのだが、最初のうちは資本主義ヨーロッパの農業後援國をなしてゐて、棉花や穀物等の原料をイギリス産業に供給し、それと引きかへにヨーロッパから種々の工業品を買つてゐた。然るに十九世紀後半になつて合衆國に土着工業が起り、

ヨーロッパからの輸入を驅逐したのみならず、間もなく當のヨーロッパやその他の大陸で、ヨーロッパ資本主義に對して激烈な競争を向けるようになった。同じくインドでは土着織維工業その他の工業において、イギリス資本主義に對して危険な競争が起つた。オーストラリアも同じく植民國から資本主義工業國への轉化の道を辿つてゐる。日本ではすでに第一階梯において——世界商業の刺戟を受けて——自國工業が發達し、そのために日本はヨーロッパ植民地として分割される危険を防止したのであつた。支那ではヨーロッパ資本主義によつて國を分割され掠奪される過程は、この國が××の助力により、ヨーロッパ資本主義を防禦するために自國の資本主義生産を創設せんと努めてゐるために複雑なものとなり、それによつて國民もまた二重に複雑した苦痛を蒙つてゐる。

こゝにいふ具合に、世界市場の創立によつて資本の專制と司令とが全世界に擴がつてゐるばかりでなく、次第に資本主義生産様式も全地球上に普及しつゝある。しかしながらそれに伴つて、生産の擴張要求とその擴張範圍即ち販賣可能性とが、互ひにますます込み入つた關係を取つてくる。すでに説いたように、資本主義生産は安定をつゞけることが不可能であつて、次第に廣く、しかも次第に急激に自己を擴張することを餘儀なくされてゐる。言ひかへれば、益、勝れた技術的手段を以て、益、大きな經營において、益、巨量の商品を益、急速に生産することを餘儀なくされる。これが資本主義生産の最深の欲求であり生存法則である。資本主義生産のこの擴張可能性は、それ自體としては何等限界を知らぬ。けだし技術的進歩と従つてまた世界の生産力とに、何等限

界がないからである。しかしながらこの擴張要求は或る明確な障壁に突き當る。即ち資本の利潤關係にぶつかるのである。生産およびその擴張は、その際にくくとも「普通」の平均利潤が現はれてくる間だけ意味がある。しかしその場合がこれに相當する場合であるか否かは、市場次第である。言ひかへれば、消費者側の支拂能力ある需要と、生産された商品の量並びにその價格との關係によつて定まるものである。然るに資本の利潤關係は、一面において生産を益々急激に益々増大することを要求するものであるから、従つてこの利潤關係そのものが、生産の狂暴なる擴張態を抑止するところの市場限界を、一步毎に自からつくり出してゆくわけである。そこからすでに説いたように商工業恐慌が不可避免的に生ずるのであつて、即ちこの恐慌はそれ自身無拘束無制限の資本主義的生産慾と、資本主義的消費限界との關係を週期的に平衡ならしめて、資本の存続とヨリ一層の發展とを可能ならしめるのである。

しかしながら諸國にその國自身の資本主義工業が發達すればするほど、一方では生産の擴張要求と擴張可能性とが益々大きくなり、他方ではそれに比較して市場限界の擴張可能性がそれだけ少くなつてくる。イギリスがまだ世界市場における支配的資本主義國だつた時代、即ち六〇年代と七〇年代とにイギリス工業が行つた飛躍と、ドイツおよび合衆國が世界市場においてイギリスを著しく壓迫し出して以來、即ち最近二十年間における、イギリス工業の膨脹とを比較すれば、この膨脹は前者に比して遙かに緩慢だつたことが分かる。ところがイギリス工業自身の運命だつたものに、ドイツの工業も、合衆國の工業も、そして結局は世界の工業全體も、絶えず不可避的

に當面してゐるのである。資本主義生産は發展する毎に、その擴張と發展とが益々緩慢と益々困難となる時代に、否應なしに一步一步近付いてゆく。

なるほど資本主義發展そのものはまだ大きな前途を有してゐて、資本主義生産様式はそれ自身としてはまだ地球上の總生産中のホンの僅かな一小部分を占めてゐるだけには違ひない。それにまたヨーロッパの最も古い工業國にさへも、まだまだ大工業經營と並んで舊式の小手工業的經營が夥しく存続してをり、とりわけ農業生産の大部分は即ち小農民の經營であつて、資本主義的に經營されてはゐない。それに加へてヨーロッパには、大工業が殆んど發達してゐないで、その國の生産が主として農民のおよび手工業的性質を帯びてゐる幾多の國々がある。そして最後に、その他の大陸ではアメリカの北部を除いて、資本主義生産の場所は小さな地點に散在してゐるにすぎず、國土の廣漠なる大部分はまだ單純商品生産にも移つてゐないのである。それにも拘らずヨーロッパにおいて自ら資本主義的に生産してゐないこれらの社會層や國土の經濟生活も、ヨーロッパ以外の國々の經濟生活も、確かに資本主義によつて支配されてゐる。たとへばヨーロッパの農民は、自分ではまだ最も原始的な矮小土地經濟を營んではゐても、頭の先きから爪先きまで大資本主義經濟に、世界市場に左右されてゐるのであつて、資本主義大國家の商業や關稅政策が農民をそらいふものと接觸させてゐる。同じくどんなに原始的なヨーロッパ外の國も、世界貿易並びに植民政策によつて、ヨーロッパおよび北アメリカ資本主義の支配下に置かれてゐるのである。しかしそれにも拘らず資本主義生産様式はそれ自身としては、すべての舊式の生産形態をど

8112

ここからも驅逐するものとすれば、なほすばらしい擴張を遂げることができざる筈である。また一般的には、すでに述べたように發展がそらういふ方向に進んでもある。しかしながら資本主義は、取りも直さずこういふ發展に際して根本的矛盾に陥るのである。——即ち資本主義生産が舊式の生産に取つて代れば代るほど、既存の資本主義經營の擴張要求に對して、利潤關係がつくり出すところの市場限界はますます狭くなつてゆくのである。資本主義の發展が非常に進んだとして、地球上において人類の生産するものは、全部資本主義的にのみ生産されるようになつた場合、言ひかへれば近代的賃銀労働者を伴ふ大經營において、資本主義私的企業家によつてのみ生産されるようになつたとしたとき、一寸でも想像して見るなら、右の事情は全く明白になる。即ちその時に資本主義の存立不可が明瞭に暴露されるのである。

經濟學入門

昭和八年二月十五日印刷
 昭和二十一年六月二十五日第八刷發行
 (定價販賣發行)
 定價拾貳圓(稅共)

著者 佐野文夫
 發行者 岩波雄二郎
 印刷者 佐藤繁次郎

東京都神田區一ツ橋二丁目三番地
 横濱市中區霞澤二十九番地

發行所 東京都神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店
 東京都神田區末路町二ノ九 日本出版配給株式會社

配給元



本製刷印堂壽文

小店の發行動購入に際し何等かの條件により定價以上の不當なる要求をせられたる場合には具體的に御内報を願ひます

982
282

年 月 日 227

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|--|--|
| 天 | 地 | 人 | 鬼 | 神 | 仙 | | |
| 子 | 丑 | 寅 | 卯 | 辰 | 巳 | | |
| 午 | 未 | 申 | 酉 | 戌 | 亥 | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |

開濟

大正七年十月十四日

終

